大阪体育大学の現状と課題

自己点検・年次報告書

2004

大阪体育大学

自己点検・年次報告書

― 平成14年度・15年度の取り組み ―

平成１７年２月

大 阪 体 育 大 学

はじめに

大学が自ら不断の点検・評価を行い、目指す教育研究の実現を図ることは言うまでもないことであるが、同時にそれは、大きな社会的責任でもある。本学は、平成 12 年から点検・評価の第三者評価を受ける準備を始め、平成 14 年４月に、単科の体育大学として初めて(財)大学基準協会の正会員への加盟・登録が承認された。

平成 13 年以降の大学教育に関する国の施策の大きな変化は、個性豊かな大学づくり、社会への説明責任の重視と競争原理の導入、大学の経営責任の明確化等を狙いとするが、文部科学省は、設置認可の弾力化と点検・評価における第三者評価の義務化などを図りながら、これらの目的を成し遂げようとしている。すなわち、各大学の自主性、自立性の自由度を高めながら、一方で大学の自己責任や自助努力を強く求めているのである。

本学は、点検・評価の審査申請の準備と並行して、平成 13 年から「中期の目標と計画」の作成を進めてきた。平成 14 年 12 月に学内の諸手続きを終え、平成 16 年度までの計画を策定した。初めての全学的な点検・評価は、「中期の目標と計画」の作成のための基礎的な資料や必要な情報の収集に役立ち、具体的な目標と計画の立案に反映させた。これらは、カリキュラム改正（平成 18 年実施)、全学的な学生による授業評価の導入（平成 15 年～)、教養教育の見直し（平成 15 年～)、人事の将来構想の策定（平成 15 年)、大学運営の整備と効率化（平成 15 年）や施設・設備の計画的な整備（平成 15 年～）等であるが、本学では鋭意計画の着実な遂行に努めている。

今回の年次報告書は、大阪体育大学が独自の特色ある教育研究を推進するために、本学の平成 14・15 年度の取り組みを中心に大学基準協会の新しい大学評価システムの項目に沿って自ら点検したものである。本報告書が、多くの皆さんからのご批判をいただければ、本学の発展に大きく寄与すると考えている。

平成 17 年２月

大阪体育大学

学長　田村　清

はじめに

Ⅰ　平成14・15年度の取り組み
1　大学・学部等の理念・目的・教育目標 1
2　教育研究組織 2
3　教育研究の内容・方法と条件整備
（1）教育研究の内容等 3
（2）教育方法とその改善 5
（3）国内外における教育研究交流 7
4　学生の受け入れ 8
5　教育研究のための人的体制 11
6　施設・設備等 12
7　図書館及び図書館の資料、学術情報 13
8　社会貢献 14
9　学生生活への配慮 15
10　管理運営 17
11　財政 18
12　事務組織 22
13　自己点検・評価 23

Ⅱ　加盟判定審査結果（勧告・助言・参考意見）に対する改善状況
（平成16年3月31日現在）
1　勧告に対して
（1）学生の受け入れについて 25
2　助言に対して
（1）教育研究上の組織について 26
（2）学生の受け入れについて 26
（3）教育課程について 26
（4）研究活動について 28
（5）施設・設備等について 30
（6）図書館について 31
（7）学生生活への配慮 31
3　参考意見に対して
（1）構成員の意識改革について 33
（2）入学選抜の在り方について 33

（3）図書館の蔵書数等について 33
（4）学生への傷害保険の充実について 35
（5）学生相談室について 35
（6）学生からの生活相談、進路相談、就職指導等について 35
（7）理事・評議員について 35
（8）自己点検・評価委員会の構成メンバーについて 36

Ⅲ　大学院における主要点検・評価項目
1　大学院研究科の使命および目的・教育目標 37
2　修士課程・博士課程の教育内容・方法等
（1）教育課程等 38
（2）教育方法等 39
（3）国内外における教育・研究交流 39
（4）学位授与・課程修了の認定 39
（5）通信制大学院 40
3　学生の受け入れ 41
4　教員組織 43
5　研究活動と研究環境
（1）研究活動 44
（2）研究環境 44
6　施設・整備等
（1）施設・整備 45
7　学生生活への配慮 46
8　管理運営 47
9　自己点検・評価 49
10　情報公開・説明責任 50

Ⅳ　相互評価申請（更新）に向けての各種委員会の取り組み 51

資 料 編　　（平成16年5月1日現在）

財団法人大学基準協会による加盟判定審査結果

Ⅰ　平成14・15年度の取り組み

Ⅰ　平成14・15年度の取り組み

1　大学・学部等の理念・目的・教育目標

（人材育成等の目的の適切性とその達成状況）

大阪体育大学は建学の理念として「人類の平和と幸福のため修学修身、知識と体力の開発に精進努力する」と学是をかかげ、昭和40年に関西地域で唯一の体育系大学として発足した。本学の目的として、学則に「教育基本法に基づき、学校教育法の定めにより、体育・スポーツ及び健康福祉に関する科学の理論と技術を教授研究し、豊かな教養と広い識見を備える実践的、創造的な人材を養成し、国民の健康とスポーツ文化の向上に寄与することを目的とする」と謳っている。

この理念と目的を具体化するため、平成９年４月に体育学部に「生涯スポーツ学科」を新設し、体育学部は現在の２学科制となった。

平成４年４月には大学院修士課程を開設し、体育・スポーツを学問的に追求構築していく体制づくりが確立した。平成13年４月には大学院博士後期課程（スポーツ科学研究科）を開設し、平成16年３月に本学最初のスポーツ科学博士の学位授与を行ない、学部、大学院を通じた一貫性のある教育・研究体制が確立した。

また生涯を通じての「心身ともに健康な生活」の実現のため、短期大学部の福祉教育の成果を生かし、より発展させるため、平成15年４月には短期大学部の改組により健康福祉学部を設置した。

従前の１学部から２学部への移行にともない、大学の運営及び教学に関する重要事項を審議するため、平成15年４月学長、学部長、研究科長、学科長、各学部、研究科から選出された教授等で構成する大学評議会を新たに設け、大学評議会で検討、審議された内容、結果について、各学部教授会に報告し、全教職員の共通理解を図るよう制度改革を行った。

一方、大学運営の方向性と教育研究の高度化、活性化の方針を明確にするため、平成14年12月「大阪体育大学の中期の目標と計画」（平成14年度～平成16年度）を策定したが、健康福祉学部の新設、学長の交代などにより平成16年８月に改定を行った。

平成15年２月に本学が初めて公表した自己点検・評価に関する報告書（基礎データ　平成14年５月１日現在）に対する加盟判定審査結果によって明らかにされた本学の長所と問題点、そして将来に向けた改善・改革に向けた方策についても、今後、一歩でも前進すべく全学をあげた取り組みを進めている。

2 教育研究組織

（教育研究組織としての適切性・妥当性）

本学は学校法人浪商学園によって設置された大学であり、平成９年度に教育研究上の基本組織として、体育学部に体育科学、体育科教育およびコーチ教育の３コースからなる体育学科と、スポーツマネジメントと健康スポーツ科学の２コースからなる生涯スポーツ学科の２学科を設置した。平成15年度には健康福祉学部に社会福祉コース、精神保健福祉コースおよび福祉マネジメントコースの３コースからなる健康福祉学科を設置した。さらに大学院スポーツ科学研究科にはスポーツ社会科学、スポーツ運動科学およびスポーツ健康科学の３つの専修を設置した。

大学附置施設としては、図書館、産業体育研究所（平成17年４月より生涯スポーツ実践研究センターに改組予定）、大阪ソーシャルサービス研究所（平成15年４月設置）、情報処理センターおよび体力トレーニングセンター（平成14年４月附置施設に位置づけ）を設置している。

・教育研究組織の設置状況

資料編（表１）全学の設置学部・学科・大学院研究科等　参照

3 教育研究の内容・方法と条件整備

（１）教育研究の内容等

（学部・学科等の教育課程）

平成 14 年 12 月に策定した「中期の目標と計画」の最優先案件であるカリキュラム改革を進めるべく平成 14 年 12 月に体育学部にカリキュラム委員会を設置し、平成 18 年度改正に向けカリキュラム作成部会が中心になり新カリキュラムの策定作業を進めている。

（カリキュラムにおける高・大の接続）

高大連携の強化を図るべく、法人設置校である浪商高校体育コースとの連携プログラムの作成についての高大連絡会を通じて、具体化の検討を進めている。

（インターンシップ）

本学では体育学部生涯スポーツ学科において、平成 11 年から３年生全員を対象にインターンシップを実施しており、平成 14・15 年度、表のとおり実施した。対象事業所には、医療業、教育・学習支援事業を中心に、社会福祉・介護事業、サービス業等、多岐に渡っている。

２週間で 80 時間程度の実習と、事前研修・事後研修を目的とした講義を履修することで単位を認定している。

インターンシップ実施状況

年　度	対象事業所数	参 加 学 生 数
14 年度	１２０社	１５８名
15 年度	１２９社	１６８名

※各年度中に実習を実施した事業所・学生数

（履修科目の区分）

・平成 16 年度の開講授業科目における必修・選択の状況

資料編（表２）開設授業科目における専兼比率　参照

（授業形態と単位の関係）

・講義及び演習については15時間の授業で１単位としている。

・外国語、実験実習および実技については30時間の授業で１単位としている。

・卒業論文については、学修の成果を評価して６単位としている。

（単位互換、単位認定等）

・学則上、他の大学等における修得単位及び入学前の既修得単位の認定については、制度上可能であるが現在のところ実績はない。

（開設授業科目における専・兼比率等）

全授業科目中、専任教員が担当する授業科目とその割合

資料編（表２）開設授業科目における専兼比率　参照

（生涯学習への対応）

・生涯学習機関としての大学の役割は大きくなっており、下表に示したように、運動クラブを中心とした地域交流事業、より広い社会人教育の場としての公開講座などを実施している。

運動クラブの地域交流事業

クラブ名	事　業　内　容
柔道部	・泉南地区中学校柔道大会（年２回）及び合同稽古 参加者　12～13校　約100名 ・全国高等学校選抜柔道大会（旧 上野杯）
バスケットボール部	中学生ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ大会 Bears Cup 学生による大会運営と指導（泉南･泉北地区の中学校ﾁｰﾑ）
サッカー部	・サッカーフェスティバル　学生による大会運営と指導 （近畿の小中高校チーム） ・JC杯争奪サッカー大会（後援） 泉佐野青年会議所主催の大会への学生協力
バレーボール部	女子部 ・茨隆杯トーナメント大会 ・12月下旬 男子部 ・１月上旬　中学・高校生チーム参加の練習会

公開講座の開催

主な公開講座名	概　　要
▪大阪体育大学公開講座 ・ダンスセミナー	毎年　高校生及びその指導者を対象 平成14年　参加者　82名 平成15年　〃　77名
・くまとりロードレース攻略法	熊取ロードレース（毎年3月開催）参加希望者を対象にクラス別にランニングの科学的知識を実践的に指導 平成14年　参加者　延　42名 平成15年　〃　延　55名
▪ＯＵＨＳスポーツキャンプ2004	地元熊取町の小中学校を対象に実技指導 平成16年3月13日（土） ﾃﾆｽ･ｻｯｶｰ･ﾊﾞｽｹｯﾄ　参加者　146名
▪ＯＳＰＡスポーツ大学 (財)大阪市スポーツ振興協会と共催	毎年　一般市民を対象に講義を実施 平成14年度　2コース 各コース定員100名 年間25回開催 平成15年度　2コース 各コース定員100名 年間22回開催

（正課外教育）

体育専門の大学として在学学生の約80%が運動部クラブ等に参加して活動している。

区　分	クラブ・同好会数	参加学生数	在学学生数(5月1日現在)
14年度	34クラブ2同好会	1,548名	2,066名
15年度	36クラブ2同好会	1,633名	2,170名

（２）教育方法とその改善

（教育効果の測定）

平成14年度後期に一部授業の授業評価を試験的に実施、平成15年度から全授業（演習等の少人数(30名以下)クラスを除く。）の授業評価を実施した。さらに体育学部の組織的な教育・研究の充実を図るため、平成15年度、体育学部にＦＤ（ファカルティ・ディベロップメント）委員会を設置した。

（厳格な成績評価の仕組み）

本学の教育課程では実技の授業科目が多く配置しており、その実技科目の単位修得に必要な出席率は授業日数の80%以上を求めている。又講義科目に

おいても出席率80%を切ると受験資格がなくなる場合があり、授業を受講することの重要性を学生に徹底している。

又、当該年次（１年間）の修得単位が15単位未満であれば、除籍処分となる。その場合再入学は可能であるが、留年（原級）扱いとなり、当該年次の学修を再度行う。

なお、本学では、卒業延期学生への授業料の減免制度（16単位以内の卒業要件単位不足者が該当）を設けており、教員が卒業年次の学生にたいして、厳格な成績評価を行いやすいしくみとなっている。

（履修指導）

１年次生の履修指導については、新入生オリエンテーション時の履修説明及び個別相談日を設けて個人個人へのきめ細かい指導を行っている。

又、２年次生以上の学生にたいしても学年ごとにオリエンテーションを実施し履修説明を行っている。

なお、オフィスアワーは設けていないが、全学年において、演習担当教員を指導（担任）教員とし、履修指導、進路相談等を行うことにより、学生が初年次よりスムーズに本学教育課程を理解する一助ともなっている。

（教育改善への組織的な取り組み）

・教員の授業方法などの改善に資するため、平成15年度から全教員の授業（少人数クラスを除く）の学生による授業評価を導入した。

・組織的な教育・研究の充実を図るため、平成15年度より体育学部ＦＤ委員会を設置した。平成16年度に向けて授業への動機づけや授業に取り組む姿勢を高め、学習成果を向上させるため、全教員が意識統一して取り組むべく、ＦＤ委員会より種々の提案が行われている。

（授業形態と授業方法の関係）

講義・実技科目の多くで、必要に応じてマルチメディアを利用した授業内容が展開されている。

実験・実習科目では専用の実験・実習室で授業を実施し、実技科目では専用の運動施設を中心に、必要に応じ視聴覚教室等にてマルチメディア教材を利用した授業を展開している。

情報処理関係の授業では情報処理実習室にて、また少人数の演習では、複数の演習科目においてインターネットにて情報を収集する目的で情報処理センターを利用している。

本学の施設面では視聴覚教室、大教室、中教室の一部にはマルチメディア教育システム（コンピュータ対応）が整備されているが、その数は不足しており今後、中・小教室の整備が緊急の課題である。

また、マルチメディア教材の作成は教員の個人レベルにとどまっているので、今後大学全体で教材の作成支援体制を整える必要がある。

（３）国内外における教育研究交流

国際化への対応として、本学では、昭和 62 年（1987 年）に中国の西安体育学院と、学術・スポーツ交流協議書を、平成８年（1996 年）にカナダのウェスタン・オンタリオ大学と交流協定書をそれぞれ締結し、国際交流を進めている。

（西安体育学院）

・学術交流（平成 14・15 年度）

平成14年９月４日～９月11日　　博士課程開設記念講演

平成14年12月10日～12月16日　　周　里　　以下４名

平成16年３月17日～３月20日　　副院長　　他２名　　交流検討会

（ウェスタン・オンタリオ大学）

・学術交流

平成14年９月29日　原田宗彦教授「ｽﾎﾟｰﾂと都市」　招待講演

・学生交流

平成14年９月18日～９月30日　陸上部 男子 10 名　女子 10 名

ウェスタン・オンタリオ大学クロスカントリーレースに参加

平成14年９月１日～平成15年１月31日　大学院生１名

短期留学（交換プログラム協定）

（姉妹校以外の国際交流　（平成 14・15 年度））

・スポーツ交流

平成15年２月17日　ドイツスポーツ大学学長であるトカルスキー教授との意見交換

「ドイツスポーツ大学の現状（研究･教育･競技力）について」

平成15年７月29日　韓国体育大学校 李総長 他３名

「今後の交流事業の進め方について」

4 学生の受け入れ

（学生募集方法、入学者選抜方法）

本学の入学者選抜方針及び選抜方法は、各学部の入試委員会で審議し、教授会で決定している。学生募集方法として、毎年５月に入試ガイドを作成し、全国高等学校に配布するとともに、教員の教育実習指導時に持参し、募集案内を行っている。

また平成 15 年度にリニューアルした本学ホームページでも募集内容についての掲示を行っている。特に健康福祉学部については新学部でもあり別刷りの冊子を作成している。

オープンキャンパスの参加状況

年　度	第１回	第２回	第３回	第４回	合計
14 年度	292	318	374	273	1,257
15 年度	313	384	431	250	1,378

※上記人数は参加票の枚数で、同伴の保護者等は除く

入学者選抜は本学では複数の選抜方法を採用しており、平成 15 年度（平成 16 年度入試）から受験生のニーズによりきめ細かく応えることを目的として、両学部においてＡＯ入試（９～10 月）を導入した。

平成 14・15 年度の入試実施状況は以下の通りである。

体育学部

ＡＯ入試　　９～10 月実施（平成 16 年度入試より実施）
推薦入試　　11 月実施
一般入試　　Ａ日程（競技力重視）　２月上旬
　　Ｂ日程（学力重視）　２月上旬
編・転入試　　２月上旬　　若干名

健康福祉学部

ＡＯ入試　　９～10 月実施（平成 16 年度入試より実施）
推薦入試　　11 月実施
　　（平成 15 年度は文科省認可の関係で平成 15 年１月実施）
一般入試　　前期　　２月上旬
　　後期　　２月下旬

社会人入試　　２月下旬
編・転入試　　２月上旬（平成16年度より実施）

資料編（表９）学部・学科の志願者・合格者・入学者の推移　参照
（表10）学部・学科の学生定員及び在籍学生数　参照
（表11）学部の入学者の構成　参照

（入学者選抜方法の検証）

入試問題を検証する仕組みとして各学部の入試委員会の入試実施部会において、入試問題の事前点検などを実施している。

（アドミッションズ・オフィス入試）

平成15年度（平成16年度入試）から体育学部において一流アスリートやスポーツ・レクリエーション指導者を目指す55名（体育学科50名、生涯スポーツ学科５名）健康福祉学部においては、学部のリーダーシップをとることが期待できる者など10名のＡＯ募集を実施した。

（入学者選抜における高・大の連携）

本学においては法人設置校からの内部推薦制度を実施しており、体育学部で45名以内を、健康福祉学部で平成15年度入試から10名以内を推薦入試により受入れている。

また、指定校推薦として体育学部では、平成14年度から生涯スポーツ学科で４校（各１名）、健康福祉学部では17名の推薦枠を設けている。

（科目等履修生・聴講生等）

科目等履修生の受入れは、学部の開講科目と教職課程で実施している。

科目等履修生受入れ状況

年　度	体育学部	健康福祉学部
14年度	２６	—
15年度	３２	—

（定員管理）

平成15年度の本学の体育学部入学定員は360名（うち臨時定員増10名）、

収容定員は、1,500名（うち臨時定員増100名）である。

受け入れ学生数は、1年次生456名、在籍学生数1,960名である。

本学への志願者数増加並びに定員超過に対応するため、体育学部入学定員の350名を480名に変更するための学則変更を平成15年4月文部科学大臣に認可申請を行ない、申請通り平成16年度から収容定員の増加が許可された。

資料編（表10）学部・学科の学生定員及び在籍学生数　参照

（表14）大学院研究科の学生定員及び在籍学生数　参照

（編入学者、退学者）

成績不良・進路変更・家庭環境の急変（経済的理由など）などによる、中途退学者の状況は次の通りである。

資料編（表13）学部・学科の退学者数　参照

5 教育研究のための人的体制

（教員組織）

本学における教員組織の現状（平成16年5月1日現在）は下記資料編の通りである。

資料編（表15）全学の教員組織　参照

（表17）専任教員年齢構成　参照

（教育研究支援職員）

本学は、教育を補佐する人的補助体制として、助手と教務補佐がある。助手は平成14年度採用者から専任教員として3年の任期付（1回限り再任可）で採用している。教務補佐（大学院担当は平成16年度から教務助手に名称変更）は、学部・学科の要請により、1年契約（学部担当　1年延長可、院担当2年延長可）で雇用している。

教務補佐の雇用状況

年　度	学部担当	大学院担当	計
14年度	１０名	８名	１８名
15年度	１０名	８名	１８名

※平成14・15年度健康福祉学部担当なし

（教員の募集・任免・昇格に対する基準・手続）

専任教員の募集及び昇任は「大阪体育大学教育職員選考規程」に基づいて実施しており、平成14・15年度の専任教員採用（5名）については公募により行った。なお、体育学部に関しては、平成15年度より教員募集は完全公募となった。また、教授、助教授、講師への昇任は教育職員選考規程並びに業績基準に関する申し合わせ事項に基づいて実施しており、平成14年度3名、平成15年度2名の昇任が承認された。

（教育研究活動の評価）

研究費の配分について、過去5年間の研究業績に基づき研究委員会が査定して決定する方法を平成15年度から導入した。

6 施設・設備等

（施設・設備等の整備）

大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等の整備状況は下記資料編の通りである。

資料編（表 27）校地、校舎、講義室・演習室等の面積　参照
（表 28）学部・大学院研究科等ごとの講義室、演習室等の面積・規模　参照
（表 29）学部の学生用実験・実習室の面積・規模　参照
（表 30）大学院研究科の学生用実験・実習室の面積・規模　参照
（表 31）規模別講義室・演習室使用状況一覧表　参照

教育用の情報処理機器として、スポーツ情報処理実習のための、パソコン等を備えた 50 名収容の情報処理実習室を始め、パソコン 64 台、プリンター４台を備えた学生の自主的な学習をサポートする情報処理センターを設置している。

（キャンパス・アメニティ等）

キャンパス・アメニティを推進するため、学生委員会、施設委員会が中心になり、施設設備の整備を法人と協議しながら進めており、平成 15 年度他大学生との交流や宿泊のための 160 名宿泊可能なセミナーハウスがオープンした。

（利用上の配慮）

施設・設備面における障害者への配慮として、エレベーター、点字ブロック、スロープを設置している。

（組織・管理体制）

大学が設置されている熊取キャンパスには、中学校、高等学校から大学、大学院が開設されており、これらの施設・設備等は一括して法人が維持・管理しており、個々の使用を認められた大学の施設・設備の運用は大学事務局があたっている。

大学の防災上の自衛消防組織・訓練は消防署提出の消防計画に則り、地元消防署の協力のもとに実施している。

7 図書館及び図書館の資料、学術情報

（図書、図書館の整備）

本学図書館の図書及び資料は図書館管理規程に定める分類により、体系的に整備しており、所蔵数等の現状は下記資料編の通りである。

資料編（表 32）図書、資料の所蔵数　参照
（表 33）過去３年間の図書の受け入れ状況　参照
（表 34）学生閲覧室等　参照

平成 10 年度、図書館総合システム（丸善ＣＡＬＩＳ）を導入し、資料検索の電子化を図ったが平成 15 年度システムの全面更新を行ない、より迅速な検索が可能になった。また、環境改善も併せて計画的に進めており、平成 15 年度空調機の更新を行った。

開館時間についても、平成 15 年度から午後８時まで延長するとともに、夏季休業時についても可能な限り開館するようにし、利用者に対する配慮を図ってきた。

（学術情報へのアクセス）

学術情報の処理・提供システムとして、全国標準ともいえる国立情報学研究所形式に準じ、同研究所ＮＡＣＳＩＳ－ＣＡＴへ参加しているが、平成 15 年度のシステム更新に併せ、新ＣＡＴへと全面移行した。

8 社会貢献

（社会への貢献）

本学が採っているスポーツを中心とした地域交流を推進するため、国際・地域交流委員会が中心になり、事業を進めている。

また、新たに平成15年度、地元熊取町の小中学生を対象にＯＵＨＳスポーツキャンプを実施するとともに、熊取町との交流協定の締結に向け、熊取町との具体的な検討を始めた。第1回ＯＵＨＳスポーツキャンプは平成16年3月13日に開催され、熊取在住の小・中学生146名および保護者が参加し、本学教員が指導するサッカー、テニス、バスケットボールを楽しんだ。

9 学生生活への配慮

（学生への経済的支援）

奨学金その他学生への経済的支援を図るための下記資料編の通り奨学金給付等を行っている。

資料編（表 35）奨学金給付・貸与状況　参照

（生活相談等）

学生の心身の健康保持・増進及び安全・衛生への相談に応えるため、学生相談室・スポーツカウンセリングルームを設置し、専門の心理カウンセラーを配置して相談を行っている。平成 15 年度には、増加する相談者に対応するため、より広いスペースへ移設した。相談室の利用状況は下記資料編の通りである。

また、平成 14 年度セクシュアルハラスメント防止・対策委員会を設置するとともに、リーフレットの作成、相談員の配置を行った。

資料編（表 36）生活相談室利用状況　参照

（就職指導）

学生の進路選択に関わる指導を行うため、就職部が中心となり、就職先の開拓、進路相談を行っている。平成 14 年度からは、本学学生の就職希望が多い教員を中心とした公務員関係の特別講座を実施している。

（課外活動）

学生の課外活動の中心は、全学生が会員となっている学友会の活動であるが、従前は学友会会則上で会長は学長となっていた。そこで平成 15 年度会則の改正が行われ、会長は会員（学生）の中から選出されることになり、学長は顧問となり、本来の学生による自主的な自治組織となった。

学友会への指導は学生委員会及び教学部が中心になって行っており、毎年行っている大学と学友会役員などが参加したリーダー研修会を通じ、大学と学生との意見交換を行っている。

体育の専門大学の特色として、学生の約 70％以上が運動部に所属している。なお、各クラブの部長は本学の専任教員が担当し、運動部強化のための予算確保を行うなど人的・資金的な支援を行っている。

運動部の状況

年　度	クラブ･同好会数	部員学生数 ［A］	在学生数 ［B］	［A］／［B］　%
14 年度	34 クラブ２同好会	1,548 名	2,066 名	74.9 %
15 年度	36 クラブ２同好会	1,633 名	2,170 名	75.3 %

10 管理運営

（教授会）

平成15年度の健康福祉学部の新設により、本学は2学部1研究科となった。そして大学の最高意思決定機関として、学長、学部長、研究科長、学科長等で組織された大学評議会が設置され、各学部の意思決定機関として各学部に教授会が設置された。それぞれの権限は、学則並びに大学評議会規程、各学部教授会規程、研究科委員会規程で定めている。

大学評議会の審議事項などについては、その都度教授会に報告しており、教員人事については各学部に人事審査会議を設置し、採用・昇任について審議し、教授会に報告している。

教授会と学部長の連携を図るため、学科長、教授会で選出された専任教授で組織された体育学部基本問題検討会議を設置している。

（学長、学部長の権限と選任手続）

学長・学部長の選任手続は学長候補者選出に関する規程、学長の選挙と任命及び任期に関する規程並びに学部長の任命及び任期に関する規程により、適正に実施している。

本学は創立以来、体育学部のみを有する単科大学であったため、学長が学部長を兼務することが多かったが、平成13年度から専任の学部長が選挙により選ばれた。

（評議会、「大学協議会」などの全学的審議機関）

平成15年度、健康福祉学部が設置され2学部1研究科制となり、全学的審議機関として、大学の運営及び教学に関する重要事項を審議するため、平成15年4月から学長を議長とする大阪体育大学評議会を設置するとともに全学的な事項を審議するための委員会組織の整備を行なった。

（教学組織と学校法人理事会との関係）

法人と大学、短期大学部との協議の場として理事長、学長、学部長等で組織する大学等運営協議会を設置し、定期的に協議会を開催し、大学等の重要事項について協議、意見交換を行っている。

11 財　政

（教育研究と財政）

教育研究の一定水準を確保するため、毎年法人から大学予算の総枠提示がされている。13～15 年度大学の当初予算は下表の通りである。

平成 14 年度の大学の中期計画の策定を機会に、法人においても施設設備整備を中心に中期計画を参考に予算計上がなされるようになり、大学の判断で執行が可能な新たな予算として、平成 14 年度から小規模（1 件 100 万円未満）施設・設備の改修、予算 1 千万円、15 年度から学長、学部長用特別予算 1 千万円が計上されるなど、除々にではあるが大学の計画的な予算計画がなされ始めてきた。

大学予算の推移（資金収支）

〔単位：千円〕

年　度	13 年度	14 年度	15 年度
《収入》			
学生等納付金収入	2,498,659	2,539,506	2,642,128
手数料収入	88,500	92,900	109,950
補助金収入	160,210	157,000	155,000
その他収入	39,954	53,842	104,080
収入の部 合計	2,787,323	2,843,248	3,011,158
《支出》			
人件費支出	1,167,470	1,190,850	1,385,880
教育研究経費支出	447,900	473,000	509,900
管理経費支出	67,850	71,700	96,660
施設・設備関係支出	267,300	242,500	1,116,800
その他の支出	75,760	73,070	70,370
支出の部 合計	2,026,280	2,051,120	3,179,610

※平成 15 年度 健康福祉学部予算を含む

教育研究経費支出の内訳

〔単位：千円〕

年　度	13 年度	14 年度	15 年度
体育学部	429,900	443,200	442,700
健康福祉学部	—	—	30,400
大学院	16,000	25,800	31,000
附置施設（図書館等）	2,000	4,000	5,800

※共通的経費は体育学部に含む

施設・設備関係支出の内訳　〔単位：千円〕

年　度	13年度	14年度	15年度
教育研究機器備品	135,300	63,000	156,000
管理機器備品	5,000	8,000	13,300
図書支出	30,000	27,000	32,000
建物・構築物	97,000	144,500	915,500

※平成15年度 健康福祉学部予算を含む

（外部資金等）

外部資金等として、文部科学省等からの科学研究費、その他の補助金の導入を積極的に図った。また、補助採択には至らなかったが平成15年度特色ある大学教育支援プログラム（ＣＯＬ）、平成16年度特色ある大学教育支援プログラム（ＧＰ）に学長、副学長が中心になり補助申請を行った。

また、平成15年度摂泉会（大阪体育大学同窓会）からの寄附金９千万円を受け、大阪市内に研修・会議室機能を備えた大阪体育大学アネックスの建築（竣工平成16年３月）がなされた。

平成13、14、15年度の外部資金等の受入状況は次表の通りである。

科学研究費補助金の採択状況　〔単位：千円〕

年　度	区　分	研究課題	研究代表者	補助金額
平成13年度	基盤研究（A）	運動ﾚﾍﾞﾙの違いによる随意動作習熟過程の神経機構に関する研究	矢部京之助	20,500 間接経費6,150
	基盤研究（C）	ｽﾎﾟｰﾂ振興とまちづくりの有機的関係	原田 宗彦	600
	基盤研究（C）	筋神経系の再構築過程における細胞内ｼｸﾞﾅﾙ伝達分子の役割に関する研究	上　勝也	2,200
	奨励研究（A）	ｽﾎﾟｰﾂ選手のﾒﾝﾀﾙﾍﾙｽ向上のための社会心理的ｱﾌﾟﾛｰﾁ	土屋 裕睦	500
平成14年度	基盤研究（A）	運動ﾚﾍﾞﾙの違いによる随意動作習熟過程の神経機構に関する研究	矢部京之助	12,900 間接経費3,870
	基盤研究（C）	ｽﾎﾟｰﾂ振興とまちづくりの有機的関係	原田 宗彦	1,200
	基盤研究（C）	筋神経系の再構築過程における細胞内ｼｸﾞﾅﾙ伝達分子の役割に関する研究	上　勝也	1,100
	基盤研究（C）	ｱｼﾞｱ諸国を中心とする高齢者の体力に関する国際比較	金子 公宥	1,800
	若手研究（B）	選手のｻﾎﾟｰﾄﾈｯﾄﾜｰｸに注目したｽﾎﾟｰﾂｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞの実践研究	土屋 裕睦	1,300
	若手研究（B）	地域ｽﾎﾟｰﾂ振興における組織の発展過程と価値連鎖構築の様相	松永 敬子	1,400

平成15年度	基盤研究（C）	ｱｼﾞｱ諸国を中心とする高齢者の体力に関する国際比較	金子 公宥	900
	基盤研究（C）	脊髄損傷者の上肢筋力ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞが下肢の筋系と末梢循環系の機能と構造に及ぼす影響	矢部京之助	2,300
	若手研究（B）	選手のｻﾎﾟｰﾄﾈｯﾄﾜｰｸに注目したｽﾎﾟｰﾂｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞの実践研究	土屋 裕睦	700
	若手研究（B）	地域ｽﾎﾟｰﾂ振興における組織の発展過程と価値連鎖構築の様相	松永 敬子	1,000
	若手研究（B）	ﾎﾟｰﾙ・ｹｰｽﾗの初期仏教文学解釈における臨済ｱﾒﾘｶ伝道の影響	長尾佳代子	500
	若手研究（B）	ﾌﾟﾛｽﾎﾟｰﾂおよび企業ｽﾎﾟｰﾂ発展へ向けてのｽﾎﾟｰﾂと企業の相互関係構築	藤本 淳也	1,500

私立大学等研究設備等整備費の採択状況

〔単位：千円〕

年　度	区　分	設　備　名	研究代表者	事業経費	補助金額
平成14年度	研究設備	運動解析用画像処理システム	伊藤　章	10,500	6,650
	情報施設	大教室ＡＶ設備改修工事	大学事務局	13,198.5	6,599
平成15年度	研究設備	筋機能評価測定装置（ﾊﾞｲｵﾃﾞｯｸｽ システム）	豊岡 示朗	20,319.6	12,191

大学教育高度化推進特別経費（旧 高等教育研究改革推進経費）

〔単位：千円〕

年　度	課　題　名	研究代表者	補助金額
平成13年度	体脂肪燃焼に関する授業への取り組み	豊岡 示朗	2,000
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ研究所の設立に向けて：地域交流活動の新しい展開を求めて	永吉 宏英	2,000
	情報処理センター拡張・リニューアル（借入）	情報処理ｾﾝﾀｰ	※ 1,824
平成14年度	生涯ｽﾎﾟｰﾂ研究所の設立に向けて：地域交流活動の新しい展開を求めて	永吉 宏英	2,000
	情報処理センター拡張・リニューアル（借入）	情報処理ｾﾝﾀｰ	※ 3,600
平成15年度	生涯ｽﾎﾟｰﾂ研究所の設立に向けて：地域交流活動の新しい展開を求めて	福田 芳則	2,000
	体育学部におけるカリキュラム改革	淵本 隆文	1,000
	図書館総合システム　（借入）	図 書 館	※ 3,891
	情報処理センター拡張・リニューアル（借入）	情報処理ｾﾝﾀｰ	※ 3,600

※…リース年額

受託研究の受入れ状況

〔単位：千円〕

年　度	課　題　名	委 託 者	受 託 者	受託費
平成14年度	科学的トレーニングシステムの調査研究	(財)大阪市ｽﾎﾟｰﾂ振興協会	産業体育研究所	6,510
平成15年度	同　上	同　上	同　上	同　上

資料編（表24）科学研究費の採択状況　参照

（予算の配分と執行）

本学では大学予算（特に教育研究費）について、学部長が議長の予算委員会において当該学部の予算配分案を決め、教授会の承認を得て執行している。

なお、研究費については研究委員会が毎年各教員から提出される研究予算計画書に基づき、各教員の研究費を配分している。教育費については、学科連絡会議が教育予算計画書に基づき配分している。

（財務監査）

毎年、公認会計士による財務監査を法人が受けており、決算については学校法人浪商学園寄附行為により、毎年５月に監事の意見を求め、理事会の承認、評議員会への報告を行っている。

（財政公開）

平成 15 年度のホームページのリニューアルに併せ法人全体予算の公開を大学のホームページで実施している。

大学予算は、教育後援会の会報上で学部ごとの予算を平成 15 年度から公開している。

資料編（表 39）財政公開状況について　参照

（私立大学財政の財務比率）

消費収支計算書関係比率及び貸借対照表関係比率における項目毎の比率は、次の通りである。

資料編（表 37-1）消費収支計算書関係比率（法人全体のもの）参照
（表 37-2）消費収支計算書関係比率（大学単体のもの）参照
（表 38）　貸借対照表関係比率　参照

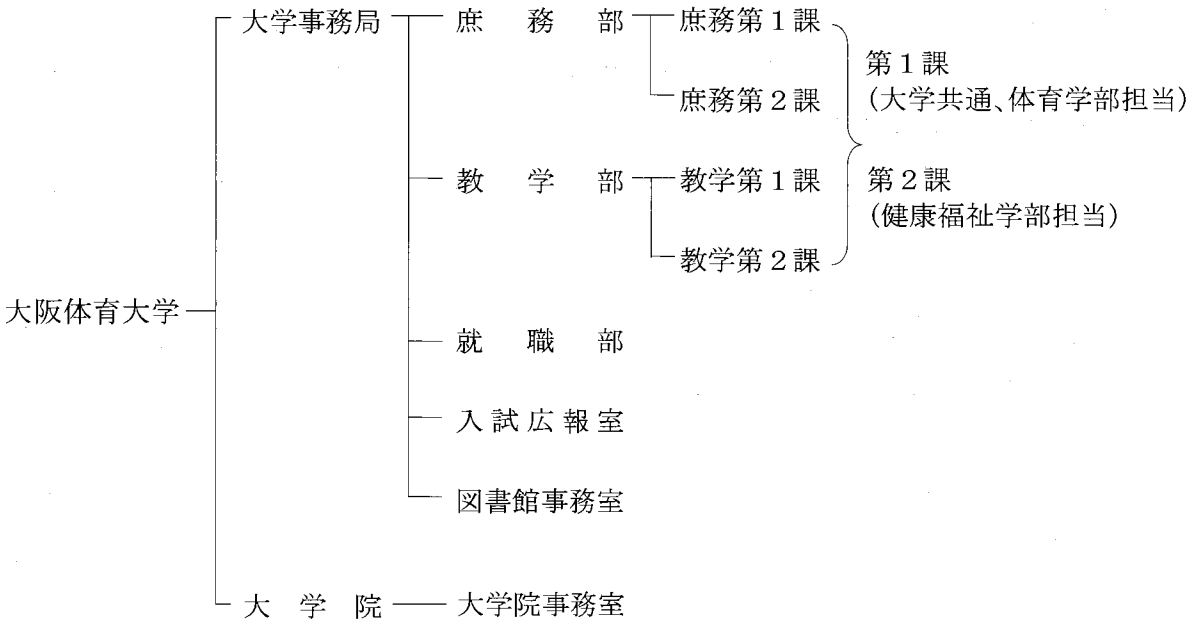
12 事務組織

（事務組織と教学組織との関係）

事務組織と教学組織の関係は、教学組織である教務委員会、学生委員会、就職委員会、研究委員会、国際・地域交流委員会等に事務部局の職員が出席し、原案を検討する委員会レベルで連携し、事務部局と各種委員会は教育研究活動の充実と活性化にむけて、一体となった取り組みを行っている。

（事務組織の役割）

大学の事務組織として大学事務局長のもと平成15年度から以下の３部４課３室が組織されている。



教授会、各種委員会を始めとした教学組織の庶務事務は、関連の深い事務局のそれぞれのセクションが担っている。また、大学評議会、教授会は大学事務局長及び庶務部が中心となり、学長、学部長と適時意見調整を図るとともに、各種委員会においても各所属長が中心になり、データ収集などの連携協力を行っている。

大学の予算（案）編成については、学長、理事長の基本的な話し合いの他、法人との事務的折衝窓口として大学事務局長と庶務部が中心となり行っており、大学内の予算（案）編成は予算委員会の原案作りに、大学事務局長、庶務部が協力している。

13 自己点検・評価

（自己点検・評価）

平成 14 年度の報告書完成に向けて、平成 11 年に自己点検・評価委員会を発足させた。平成 12 年には具体的な編集作業を行う自己点検評価・作業部会をスタートさせ、作業を積み重ねていった。その後、自己点検の恒常的実施を行うことを目的とした特別委員会が発足し、授業評価等の実施の検討を行った。

（自己点検・評価と改善・改革システムの連結）

平成 15 年度には、自己点検・評価の基に、将来の発展に向けた改善・作業を行うためのＦＤ委員会設置の準備作業に取りかかった。また平成 15 年度には、試験的に全学的な授業評価を実施し、質問紙の精緻化を行った。

（自己点検・評価に対する学外者による検証）

自己点検・評価の外部評価システムの導入に関しては、現在検討中である。

（評価結果の公表）

自己点検・評価結果の学内外への情報発信手段として、「大阪体育大学の現状と課題　2002」と題した自己点検報告書を平成 14 年に発行した。

（大学に対する社会的評価等）

平成 13 年４月に、学長、副学長、学部長、学科長、各種委員会委員長、附置施設の長で新たに組織された「大阪体育大学自己点検・評価委員会」のもと、同委員会特別委員会（作業部会）が中心になり、全学をあげて、本格的な自己点検・評価を行なった。この自己点検・評価を基に大学基準協会への「加盟・登録」申請を平成 13 年８月行ない、平成 14 年４月１日、単科の体育系大学では初めての大学基準協会の正会員に認められた。

この時の申請書類をもとに、平成 14 年 12 月「大阪体育大学の現状と課題 2002」のタイトルの自己点検報告書を初めて刊行（発行平成 15 年２月）した。

平成 15 年４月、健康福祉学部の新設に伴う学則改正においても教育研究水準の向上と本学の設立目的を達成するための自己点検・評価する組織として、総則の中で大学自己点検・評価委員会の設置を明確にし、両学部に学部長、学科長、各種委員会委員長からなる学部自己点検・評価委員会が新たに発足した。

今後、定期的な自己点検・評価を行うべく、体育学部自己点検・評価委員会において年次報告書作成部会が中心になり大学基準協会よりの加盟判定の結果通知に付記された「勧告」や「助言」「参考意見」等についての取り組み状況も加え、第二次の報告書(平成16年度刊行予定)作成に取り組んでいる。

II　加盟判定審査結果(勧告・助言・参考意見)に対する改善情況

Ⅱ 加盟判定審査結果(勧告・助言・参考意見)に対する改善状況

1 勧告に対して

(1) 学生の受け入れについて

本学は、長年の懸案であり、また、平成14年に策定した「中期の目標と計画」でも最大の目標であった、体育学部の収容定員に対する高い在籍学生数比率を是正するため、平成15年4月に収容定員の増加に係る学則変更認可申請書を文部科学大臣に提出した。その結果、平成15年7月に同大臣より認可され、平成16年度より、体育学部の入学定員を350名から480名に変更した。学則変更の必要性は、社会的要請に応える新しいタイプの人材養成とそれらの人材を集め、教育できる体制が整備されていること等を理由に挙げた。入学定員の変更により、平成16年度の入学定員超過率は、1.01となり、平成19年度の完成年には収容定員超過率を1.0台まで是正することが可能であると考えている。

2 助言に対して

（1）教育研究上の組織について

附置研究機関である産業体育研究所について、平成14年の産業体育研究所運営審議会において、同研究所を発展的に改組し、地域社会における生涯スポーツの振興、健康づくり、生き甲斐づくりをサポートする生涯スポーツ研究所（仮称）として移行させることが承認され、平成16年の大学評議会において、平成17年４月から「大阪体育大学生涯スポーツ実践研究センター」と名称変更し、新たなスタートを切ることが承認された。

（2）学生の受け入れについて

体育学科における入学者に占める推薦入学者の比率について平成 13 年度までは 50%を超えており、推薦入学者比率の適正化を求められた。そこで、平成14年度以降推薦入試による入学者数を見直し、50%未満になるよう是正した。平成 15 年度 50%を若干超えたのは、一般入試における辞退者が予測より上廻ったためのもので、今後も推薦入学者が全入学者の 50%を越えないようにしていく予定である。

体育学科の入学者数の推移

年　度	入学者数 ［A］	内推薦入試による入学者数　［B］	［B］／［A］　%
12年度	３４９名	２００名	５７．３%
13年度	３４４名	１９４名	５６．４%
14年度	３２９名	１５３名	４６．５%
15年度	３０２名	１５４名	５０．９%
16年度	３２４名	１５８名	４８．８%

（3）教育課程について

①履修指導について

履修モデル等を示すなど、履修についての個別指導について、工夫を求められた。そこでこれまでの反省を踏まえて以下のような工夫をすることとした。

・平成16年度新入生に対する履修に関するオリエンテーションで配布する資料等をこれまでの文章表現に加えて、わかり易く明確に標記するためにチャート化して、そのシステムや履修方法を学生が理解しやすいように工夫をする。
・履修に関する諸注意事項について、具体的な例を取り上げ、説明を加える等の工夫をする
・教務事務担当者による個別指導の時間を設け、学生と１対１で直接履修相談・指導するようにする。

このような工夫をすることによって、学生１人１人に適した履修指導ができると考えられる。

②学生による授業評価等について

授業評価に対する体育学部の取り組みは、平成14年６月に開かれた自己点検・評価委員会において実施する方向性が確認され、同年12月には試験的に授業評価が実施されたが、対象は全教員ではなく、あくまで希望者のみとした。

平成15年度は体育学部として全学実施とし、演習と20人以下の少人数クラスを除いた全科目において実施した。教員には授業評価のアンケート用紙と集計結果のまとめを返却した。授業評価は教員の業績評価に用いるものではなく、あくまで、授業改善の資料に用いるという基本合意に基づき、個々の授業の評価結果は公表せず、あくまで全体的な傾向を教員と学生に向けて公表した。

次にＦＤの取り組みとして、教員の授業技術の向上とエンパワーメントを目的としたＦＤ委員会が平成15年度設置された。ＦＤ委員会は授業評価の実施母体としての機能を移管した。平成15年６月にはＦＤ委員会主催の「授業を活性化させよう!!」というタイトルの講習会（岡村遼司早稲田大学教授）を実施した。また、平成15年度の授業評価の実施要領として、以下を決めた。

a) 自己点検の作業部会とＦＤ委員会の連名で報告する。
b) 学内掲示と別刷りとしてＡ３判１枚程度にまとめる。
c) 内容は学部全体のデータを講義科目・実技科目に分けて報告する。（＊学科別の特徴がみられないため）。
d) 科目群別・学年別・規模別などについては、後期実施分を含めて、後日詳細に報告する。

e) 平成 16 年度からは授業評価に関する事柄は、ＦＤ委員会が担当出来るように組織を再編することを学部長に提案する。

平成 15 年度末には、次年度に向けた提案が教授会で行われた。全教員が意識統一して取り組むことによって、授業への動機づけや授業に取り組む姿勢を高め、学習成果を向上させることに結びつけることが狙いである。

（４）研究活動について

①研究費配分方法の見直し

本学の研究組織は一般教育系、史哲・行動科学系、コーチング系、生理機能系の４つの系に分かれている。平成 13 年度までは長い歴史によってある程度固定化された研究備品費と研究消耗品費が各系に配分されてきた。その中には人数に比例した基礎配分費が含まれていたが、その割合はわずかであり、ほとんどが系によって固定化された額が配分されていたのが現状である。その内訳は生理機能系が総額の 50～60％と最も多く、史哲・行動科学系とコーチング系が 15～25％、一般教育系が５～６％であった。これらの点に対し、2002 年の自己点検報告書に「備品と消耗品の予算配分は研究企画書を提出してもその影響力はなく、ほとんど前年度までの配分を踏襲しているに過ぎない。（中略）少しずつ実績を加味した競争原理が働いたり、必要な所に必要なだけ配分するシステムを考える必要があろう。」と指摘されている。

以上の内容は研究費配分の固定化が研究活動の活性化を抑制している可能性と研究業績を研究費配分の基準の一つにすることが研究の活性化に繋がる可能性を示唆している。これらの指摘と問題点を改善するために平成 14 年度の研究委員会において研究費配分に関する教員アンケート調査を実施するとともに、「研究計画に関する検討部会」を設け、平成 15 年度の研究計画書の作成方法と研究費の配分について検討を行い、以下のように決定した。

a) 平成15年度から研究費の配分に研究業績の内容や件数を反映させるが、本格的な運用は平成 18 年度からとし、平成 17 年度までの３年間は制度の移行期間として緩やかな運用とする。但し、20 万円以上の申請者については３年以内に研究成果を発表することを義務付ける。

b) 80 万円以上 300 万円以下の備品の申請は研究代表者１人当たり１件とし、各系で優先順位を付け、研究委員会において採択、不採択を決める。但し、不採択になった研究代表者については次年度においてその点を考慮する。また、採択された研究代表者は３年以内に研究成果を発表することを義務付ける。

②プロジェクト研究の推進

研究活動を活性化させることを目的に、平成 14 年度の研究委員会は平成 15 年度から「プロジェクト研究」を推進するよう教授会に以下の提案を行った。

a) 大学が必要と認める研究を「プロジェクト研究」とする。
b) 教授会で指名されたプロジェクト研究設定委員会(仮称)が研究テーマおよび研究員を決定する。
c) 原則として３年以内に、学術誌等に論文を掲載、または大学紀要、テキスト、報告書等で学外に公表する。
d) 研究期間は２年以内とする。
e) 予算については、研究予算以外の特別予算を要望。やむなく研究予算から執行する場合は年間 200 万円以内とする。
f) プロジェクトの代表者が研究計画調書を提出する。テーマと研究員の決定は教授会で行う。

これらの提案を受けて、平成 15 年度にプロジェクト研究に該当すると思われる研究計画がいくつか申請されたが、採択されなかった。

③研究組織の見直し

平成 14 年度の研究委員会において研究活動の活性化を目的とした研究組織の見直しが提案された。本学の研究組織は教育組織にとらわれない独自の編成となっている点が特徴であるが、その研究組織は長い間見直しがされておらず、研究活動を一層活性化させるためには研究組織の見直しが必要であると考えられた。そこで、体育学部の教員を対象にしたアンケート調査を平成 14 年 11 月に実施した結果、現状のままでよいが５人、変更した方がよいが 14 人、分からないが３人であった（回答 22 名、回収率 39%)。以上のアンケート結果を踏まえて、平成 15 年度の研究委員会において検討が予定されたが、大学院の機構検討委員会が組織の見直しを考えているため、学部と大学院が一体となって研究組織の見直しを考えた方が良いとの判断で、見直しの具体的検討や案の提案には至らなかった。

④大阪体育大学紀要編集規程の見直し

従来の規定では当該の学年度末（３月 31 日）までに論文を投稿し、７月上旬に紀要が発行されていた。投稿から年度を越えて紀要が発行されていたため、昇任に関わる業績の場合は１年間遅れるなどの問題が生じ、投稿意欲に

も影響していた可能性が考えられる。また、紀要部会委員の任期を越えた作業、すなわち本来なら２年任期末の３月 31 日で新委員と交代だが、７月まで作業を継続しなければならないという弊害も生じていた。これらの問題を解決するために、平成 14 年度から投稿論文の締め切り期日を 10 月 31 日とし、紀要の発行日を３月 31 日とすることに改定した。

（５）施設・設備等について

①講義室・演習室の改善

演習室については、平成 13 年度において未使用教員研究室の演習室への転用、小規模演習室の改修などの改善を図った。

なお、現在検討中の体育学部カリキュラム改正（平成 18 年度改正予定）において少人数教育の授業科目の増加が予想され、その対応も含めた抜本的な改善策として、講義・演習室の機能をもりこんだ複合本部棟の建設計画（平成 19 年度に竣工予定）が進行中である。

②人工芝グランドと合宿所の設置

大阪体育大学は、屋外体育・スポーツ施設として、400m全天候型トラック１面、サッカー競技場、ラグビー競技場、テニスコート、ハンドボールコート、そして、多目的グランドを有している。その中で、サッカー競技場とラグビー競技場を全面人工芝グランドに整備し、それぞれの競技の指導のみならず、学生に対し自由使用の時間を設けてフリーに誰でも利用出来るようにした。

また、今迄合宿所として利用していた施設を全面建替し、セミナーハウス（ＯＵＨＳセミナーハウス）を新設し、スポーツの合宿はもとより文化的活動やその他いろいろな活動に利用できるように開放した。

なお、人工芝グラウンド及びセミナーハウスの外部者利用状況は下表の通りで、本学関係者のみならず一般にも開放し、その成果をおさめている。

人工芝グラウンド及びセミナーハウスの外部者利用状況

施設名	設置年月	最近１年間の利用状況	
人工芝サッカー場	平成 14 年４月 25 日	平成 15 年５月～平成 16 年５月	4500 人
人工芝ラグビー場	平成 15 年８月 11 日	平成 15 年８月～平成 16 年６月	2900 人
セミナーハウス	平成 15 年６月 15 日	平成 15 年６月～平成 16 年６月	6400 人

※「最近１年間の利用状況」欄、「施設使用願」より算出。

本学教職員・学生以外の人数を記入。

③グラウンド使用の工夫と50m温水プールの建設

野球場以外のグラウンドは、基本的に大学専用。サッカー場、ラグビー場の人工芝化により、より効果的なグラウンド使用が可能となってきている。

50mプールについては、大学の中期計画の中でも、平成18年度以降整備を折り込み、実現化を目指すこととしている。

（6）図書館について

長期休暇中の開館について、平成15年度から下記のとおり改善を行った。

夏季休暇（7月20日～9月20日）全63日のうち、日曜、祝日（11日）学園休業日（5日）とオープンキャンパス（1日）を除く46日中、蔵書整理と図書館システム入れ替えのために9日間を休館とし、37日間の開館を行った。そのうち土曜日以外20：00までの開館日は19日であった。休暇中開館日の利用者総数は4,330人で、うち18：00～20：00までの利用者は102人であった。

冬季休暇中は、学園業務終了の12月25日～1月7日を休館とした。12月1日～19日は通常通りの開館とし、12月22日、23日は17：00閉館とした。この間の利用者数は19,626人で、そのうち18：00～20：00の利用者は291人であった。

春季は、3月4日までを通常開館とし、3月5日～13日は17：00閉館とした。以後3月15日から末日までは、館内整理と雑誌製本準備などのために休館とした。

（7）学生生活への配慮

①大学独自の奨学金、貸付制度

奨学金・貸付制度の両方共、検討の継続中である。それとは別に、「卒業延期学生の学費の減免」制度が平成16年度より発足、実施している。

この制度は、延期となった在学年度に履修する授業科目が、卒業所要単位に不足する授業科目であり、かつ当該在学年に履修する単位数が16単位以下の者に対して、授業料・施設費は半額、教具教材費・図書費・教育後援会費・学友会費は全額免除になるものである。

この制度を利用する事により卒業延期学生が、退学または休学する事なく所要単位を取得し卒業出来るのは、高く評価できる。

②セクシャル・ハラスメントへの対応

平成14年度、大阪体育大学セクシャル・ハラスメント防止・対策委員会発足。大阪体育大学セクシャル・ハラスメント防止・対策体制を整えるとともに、ハラスメント相談窓口に関する規程。ハラスメント調停委員部会細則。ハラスメント調査専門委員会細則を設け運用してきた。

委員会は学部長、教学部長、学生委員会委員長、学科選出専門教員（４名）、事務局長の８名の構成員で組織され、教学部長を委員長として大学一体となって取り組んでいる。

学生に対しては、まずパンフレット「セクシャル・ハラスメント防止のために」を作成、演習、教養ゼミ担当教員を通じて配布。新入生に対しては入学時オリエンテーション時に配布、説明を行っている。

相談窓口に関しては、学部・学科を問わず、相談員９名（女性５名）を配置し、学生の相談に応じている。15年度３件の相談があった。すぐさま相談員⇒相談主任⇒委員長⇒委員会のルートで対応策を検討した。本学では委員会に学生相談室のカウンセラー・臨床心理士も加わり、専門的かつ客観的な助言・判断を参考に解決策を見出している。

一方、平成15年度体育大学の特殊性から、外部講師に山田ゆかり氏を迎え「スポーツ界の常識は社会の非常識」のテーマで教職員、大学院生等、学生に講演を依頼した。特に、講演内容の一部であるスポーツコーチのためのガイドライン項目では試案ではあるものの、スポーツ指導者にとって大きな示唆を得た。

3 参考意見に対して

（1）構成員の意識改革について

本学は、平成15年より従来の1学部から2学部（体育学部と健康福祉学部）体制に変わり、大学院スポーツ科学研究科も設置している。新しい体制では、①大学評議会のリーダーシップと②構成員の大学運営への積極的な参画が、構成員の意識改革に重要であると考えている。具体的には①については、大学評議会が大学の意思決定機関であるという大学組織に対する理解を得る。そして、議決事項だけでなく審議中の事案についても教授会等への情報の流れをスムースにしている。②については、各構成員の各種委員会活動の数を厳選し、役割分掌を明確にして、大学運営に参画できる体制を整備している。

（2）入学選抜の在り方について

平成14年度から18年度に渡る中期計画に基づき、現在カリキュラムの抜本的改革に着手している。それに伴い、入試制度の改革が余儀無く必要となり、現在カリキュラム改正の進捗状況を睨みながら入試委員会で基本構想を検討している。その際、外部の有識者の意見を積極的に取り入れ、より開かれた入試体制とするべき努力している。なお、平成15年度からは推薦入試、一般試験入試に加え、ＡＯ入試を導入した。さらに平成16年度の編・転入入試を出身学校・大学の状況に応じて２年次編・転入と３年次編・転入の２階建てとして募集することとした。

（3）図書館の蔵書数等について

①蔵書数

平成15年度健康福祉学部発足により、従来の資料収集に加え、福祉・介護関係資料をも、より充実させねばならない事となった。しかしながら、予算面での制約、特に、洋雑誌の高騰（体育学部の場合、図書予算の55.5%が雑誌費で、雑誌費合計の87.5%を洋雑誌費が占めている。）や健康福祉学部は発足初年度で予算が少ないこともあって、遺憾ながら健康福祉関係の専門・学術書の収集は、きわめて不十分と言わざるを得ない。

平成16年3月末日現在の本学図書館蔵書総数は、126,314（和書90,328洋書35,986）冊、雑誌は2,670（うち洋雑誌503）種である。

また、本図書館は、少数ではあるが稀覯書を所蔵している。なかでも、1569年刊行の「Artis Gymnasticae apud antiques,nostris temporibus ignoratae,Librisex」初版本、1908年～1932年にかけ、1,000部限定出版の

「British Sports and sportsman」全16巻は極めて入手困難な資料であり、その他、1894年刊行の「The Badminton Library」全30巻等、あわせて10点を蔵している。

②視聴覚資料

平成15年度当初でマイクロフィルム・マイクロフィッシュ合わせて4,043タイトル、ビデオテープ（VHS）1,025タイトルを所蔵し、マイクロリーダー1台とビデオブース6台により利用できる。

ビデオテープは、従来、館内のみ視聴可能となっていたが、教員が講義に使用する場合には、貸出できることとした。

③電子化等

・電子ジャーナルの導入

本年度、新たに医中誌web版、Ingenta、それに、試用ではあるがPro Quest Health and Medical Completeを導入した。

・医学図書館協会への加入

平成13年度から医学図書館協会に加入し、医学関連の情報獲得が容易になった。

・図書館相互利用

文献複写依頼は年を追うごとに活発化し、本年度途中であるが、依頼が70件を超えており、今後、益々増加することは確実である。

・利用者マナー

図書館職員の度重なる注意や指導、セミナーハウス利用開始も相俟って、かなりな程度改善したが、静寂が支配するには未だ道は遥かである。貸出図書返却は督促が必要ではあるものの、未返却者は皆無といえるほどになった。

④開館時間

平成15年4月から、平日の開館時間を従前の9:00～18:00から9:00～20:00に延長した。また、平成15年度の開館総日数（閲覧可能日）は250日で、そのうち20:00までの開館日は188日を数え、開館総日数の75.6%にあたる。その間の18:00～20:00の時間帯利用者総数は2,811人で、同日までの利用者総数158,956人の1.77%である。

20:00までの開館は、その利用者の様子から推測すると、大学院生・学部生ともに固定的な傾向が顕著で、休暇中もそれは変わらない。利用態度は熱

心で、真摯に学習・研究に取り組んでおり、18:00 以降にクラブ活動を終えて利用する学生も見受けられ、利用者の益になっていると判断できる。また、試験前・試験中・レポート提出時期には、17:00 以降の利用者も増加している事（9:00～17:00 の時間帯も当然、同様）から、学生諸君の日常の学習姿勢を窺うことができる。

（4）学生への傷害保険の充実について

資料を集め検討した結果、大学創設以来 39 年間、重大事故に対して支払った額と、全学生に掛ける保険金の合計額を比較すると、全学生に掛ける保険金の合計額の方が大幅に上回った。

従って、重大事故についてはその都度、診療所をはじめ全学（法人含）を上げて対応する事としているが、指導する教員の精神的負担等を考えると、大学独自の保険制度の充実についても今後検討していく。

（5）学生相談室について

検討の結果、大学事務局教学部と同一フロアーに学生相談室を設置したが広さが不足している。平成 15 年度、新たに研究棟に「学生相談室・スポーツカウンセリングルーム」を設置した際に、その一部分を使用出来る事となり、効果を上げている。

資料編（表 36）生活相談室利用状況　参照

（6）学生からの生活相談、進路相談、就職指導等について

学生からの生活相談については、待つ姿勢だけではなく、教務委員会および学生相談室・スポーツカウンセリングルームと協力し、学生の長期欠席調査を行いまた、全学生にスクリーニングテストを実施し、積極的に問題を抱える学生を掘り起こし、相談室を訪れる様に指導している。

また、大学として担任・副担任制度を取り入れ、全学的ではなく、担任・副担任主導で、クラス別のオリエンテーションにおいて学生生活、課外活動、履修方法等の説明を実施した。学生は、担任・副担任の所へ相談に出向く様になり、当初の目的を充足している。

（7）理事・評議員について

法人理事会及び評議員会へ教学側の意見を反映させるため平成 15 年から、法人評議員会へは、学長、副学長、学部長及び大学院研究科長が評議員として加わり、これまでより２名の増員となり教学側の意見を反映させる改善が

なされた。

（８）自己点検・評価委員会の構成メンバーについて

自己点検・評価委員会は、本学においては最重要委員会と位置付けている。

そのために学部長をヘッドとして多方面から検討するため、平成 14 年度から学部長、学科長、各種委員会委員長に加えて助教授、講師、助手を委員会に配し、自己点検・評価を進めることとした。

Ⅲ　大学院における主要点検・評価項目

Ⅲ　大学院における主要点検・評価項目

1 大学院研究科の使命および目的・教育目標

（理念・目的・教育目標とそれに伴う人材養成等の目的の適切性）

前述のように、本学の建学の理念は「人類の平和と幸福のため修学修身、知識と体力の開発に精進努力する」となっており、この理念に基づいて大学院研究科は、「少子高齢化社会における国民の健康維持と、スポーツを通して国民が質の高い生活を豊かにできるよう、スポーツ科学領域の高度な知識と経験を身につけた専門家を養成する」という教育目標を掲げた。

このような使命を達成するために、本学では平成４年に大学院修士課程を発足し、定期的なカリキュラムの見直しを含めて、活発な研究・教育活動を展開している。また平成 13 年度(2001)には、研究者の養成を最大目標に掲げた博士後期課程を立ち上げ、修士課程を博士前期課程とあらため、一貫性のある大学院教育へと乗り出した。

2 修士課程・博士課程の教育内容・方法等

（1）教育課程等

（大学院研究科の教育課程）

平成13年度（2001）には、博士後期課程の設置に呼応して、これまでの体育学研究科からスポーツ科学研究科に名称を変更すると同時に、専修をスポーツ社会科学専修、スポーツ運動科学専修、スポーツ健康科学専修に名称変更した。これによって、より適切な領域での人材養成を目指すことが可能となった。平成14年度からは、特別委員会として入試検討委員会、機構検討委員会、規則検討委員会が発足し、大学院研究科の教育課程の将来的検討に着手した。

（社会人学生、外国人留学生への教育上の配慮）

社会人学生・外国人留学生に対しては、入試において社会人入試と留学生入試を実施しているだけで、現在のところ日本語教育やチューター制度といった特別な教育課程上の配慮は行っていない。今後外国人留学生に対しては、語学能力の判定のために、英語のTOEFLやTOEICと同じ機能を持つ、財団法人日本国際教育支援協会（JEES）による「日本語能力試験」の導入が求められる。

（専門大学院のカリキュラム）

平成13年度（2001）入学生からは、博士課程の設置にともない、博士前期課程で修士論文の作成を指導する教員を10名から28名に増員した。その結果、特論が32科目、特演が29科目の、合計61科目が開講されて大幅な科目増となった。

各教員の担当科目については「特演」は毎年、「特論」は隔年の開講とした。新しく開講された特演は、いずれも高度専門職業人の養成を念頭に置いて開設されたもので、スポーツ社会科学専修では地域スポーツ論、スポーツ施設管理論、野外スポーツ論、産業体育経営論、スポーツ指導者論の５科目、スポーツ運動科学専修ではバイオメカニクス特演Ⅱ、スポーツ心理学、臨床スポーツ心理学、球技コーチング論、スポーツゲーム分析論、武道論、身体表現学、身体表現学習論、障害者スポーツ論の９科目、スポーツ健康科学では健康管理論、運動衛生学、スポーツ環境論、体力科学、運動生化学の５科目の計19科目である。

（研究指導等）

平成13年度（2001）からスタートした新しい教育課程によって、博士課程前・後期課程に在籍する学生は、論文作成にあたってより多様な学問分野から論文テーマを選択し、それに関連する指導教員の講義を受講して、綿密な論文指導を受けることが可能となった。前述のように、平成14年度の博士前期課程在籍者は36名、博士後期課程在籍者は10名の計46名であったが、平成15年度には博士前期課程在籍者が44名、博士後期課程在籍者が14名の計58名と、その数は1.3倍に増加するなど、収容定員を上回る在籍者となった、指導教員の数も年々増える傾向にあり、研究指導において大きな支障は生じていないが入学定員の見直しを今後検討していかなければならない。

（２）教育方法等

（教育・研究指導の組織的な改善）

平成14年度と15年度に関しては、新しいカリキュラムの運用に精力を注ぎ込み、教育・研究指導方法の改善を促進するための組織的な取り組みは実践されず、個々の教員の改善努力に委ねられた。平成15年度には、教育研究水準の向上を目指した自己点検・評価委員会が学部に発足し、試験的に全学的な授業評価を実施するとともに、教員の授業力・教育力を向上させるためのＦＤ委員会の発足準備に取りかかったが、基本的に少人数教育をベースとする大学院においては、このような授業評価システムはなじまないと判断された。今後は、本学大学院教育のミッションを明確にし、どのような教育・研究指導が望まれるのかについて議論を重ね、大学院独自の授業評価とファカルティー・ディベロップメント（ＦＤ）に取り組む必要がある。

（３）国内外における教育・研究交流

本学大学院では、国際交流委員会を設け、西安体育学院（中国）とウェスタンオンタリオ大学(カナダ)との教育・研究を含めた国際交流を推進している。平成14年度・15年度にこの制度を利用したのは、大学院生１名であった。しかしながら、国際レベルでの教育研究交流を緊密化させる組織的な動きは充分とは言えない。

（４）学位授与・課程修了の認定

平成14年度の博士前期課程の学位授与者は13名で、内訳はスポーツ社会科学専修が６名、スポーツ運動科学専修が４名、スポーツ健康科学専修が３名であった。計22名に増えた平成15年度の博士前期課程の学位授与者内訳

は、スポーツ社会科学専修が10名、スポーツ運動科学専修が８名、スポーツ健康科学専修が４名であった。平成15年度はまた、大学院開設以来初の博士後期課程の学位授与者（１名：スポーツ運動科学専修）が誕生するなど、大学院がようやくフル稼働し始めた記念すべき年となった。

（５）通信制大学院

本学では、単科大学という規模と、日常的なフィールドワークが不可欠なスポーツ科学という学問的特性を鑑みて、通信制大学院の制度導入には踏み切っていない。

3 学生の受け入れ

（学生募集方法、入学者選抜方法）

学生募集に関しては、入試広報に関する通常チャネルを用いた募集以外、特別な募集を行っているわけではない。受験生の多くは、ホームページや大学への問い合わせを通して情報を獲得している。

大学院進学希望者に対する試験は、前期試験、後期試験ともに論述試験と語学試験（英語）、そして口述試験を実施している。論述試験は、体育学一般に関わる共通問題と、スポーツ社会科学、スポーツ運動科学、スポーツ健康科学のそれぞれの専修の専門分野に関わる領域から選択する問題から構成されている。また、社会人と外国人については特別選抜制度を設け、論文試験と口述試験で行い、これまでの社会での活動と研究計画との関連性を合否判断の基準として重視している。ただ入学者の選抜方法に関しては、試験の成績順に合格者が決めていくシステムであるため、専修間に偏りが生じる事態を避けることはできない。それゆえ、平成14、15年度のようにスポーツ社会科学専修を希望する合格者が半数近くを占めるという事態も出現した。

（門戸開放）

他大学、大学院の学生に対する門戸開放の状況は問題なく、これまでに多くの体育大学系以外の大学からの進学者があった。しかしこれは同時に、他大学から進学してくる学生のスポーツ科学の基礎的学力が不足しているという新たな課題を生み出した。

（定員管理）

博士課程の認可（平成13年度）によって、入学定員は博士前期課程が12名、博士後期課程が6名となった。専修別の定員は設定しておらず、合格者の中から成績順に定員を満たす学生を選んでおり、年度によっては（前述のように）ある専修に学生が集中する事態も生じている。

大学院の受験生に関しては、大学院開設時より定員を上回る応募があり、これまで定員割れの心配はなかった。それよりもむしろ、受験生の多さから、収容定員を上回る在籍学生数の上限比率を決めることに腐心してきたという経緯がある。平成14年度の収容定員（前期課程：24名、後期課程：9名）を100とした場合の在籍者の割合（収容率）は、前期課程で150%（36名）、後期課程で111%（10名）であり、平成15年度は前期課程で122%（44名）、後期課程で155%（14名）であった。いずれも収容定員を大きく上回ってい

る。現在のところ博士前期、博士後期課程とも、指導教員の数は充分に確保されており、特定教員への院生の集中さえ避けられれば、問題なく指導が行われているが、入学定員の見直しを今後検討しなければならない。

4 教員組織

（教員組織）

本研究科の教育研究は、創設以来、学部の専任教員が兼担の形であたっており、平成14－15年度は、博士後期課程の論文指導担当教授７名（スポーツ社会科学専修１名、スポーツ運動科学専修４名、スポーツ健康科学専修２名）と講義担当教授６名（スポーツ社会科学専修１名、スポーツ運動科学専修２名、スポーツ健康科学専修３名）、助教授１名（スポーツ健康科学専修）の計14名に、博士前期課程担当教授12名（スポーツ社会科学専修６名、スポーツ運動科学専修６名）、助教授２名（スポーツ健康科学専修）を加えた計28名と、非常勤講師８名であった。

（教員の募集・任免・昇格に関する基準・手続）

学部教員が大学院を兼担する現在の制度では、大学院に特化した専任教員の募集は困難であり、大学全体の採用計画に組み込まれている。しかしながら、教員の高齢化に対処する若い教員の採用は緊急の課題である。今後は、引き続き教育。研究能力の備わった優秀な教員の新規採用への努力を継続するとともに、大学内部から大学院で教育研究の指導が可能な人材を育てていく組織風土の涵養と制度づくりが重要とされる。

5 研究活動と研究環境

（１）研究活動

（研究活動）

論文等、研究成果の発表状況は本年次報告書の巻末資料に、教員個々人の研究成果として掲げた。

（教育研究組織単位間の研究上の連携）

産業体育研究所は、平成17年４月より生涯スポーツ実践研究センターに改組予定であり、平成15年度現在では休眠状態であった。今後大学と大学院との連携が期待される。また大学共同利用機関である情報処理センターは、午後９時まで利用可能であり、論文作成等の研究活動を通じて学部、大学院の連携が見られる。

（２）研究環境

（経常的な研究条件の整備）

大学院担当教員に対する研究費としては、平成14年度博士課程前期担当者には基礎配分として教員一人当たり16万2000円が支給されたほか、大学院生一人あたり14万2500円（平成15年度は13万5000円）の研究費が上乗せされた。後期担当者には基礎配分として24万3000円（博士論文指導教員は32万5000円）に加え、後期大学院生一人当たり19万円（平成15年度は18万円）が論文指導の必要経費として支給された。研究旅費に関しては、研究会や学会等への旅費支給を年間５回まで認めている（一回上限７万円）。また海外学会での研究発表（ファースト・オーサー）については全額（上限は特になし）を支給している。研究時間の確保については、大学院における教員のコマ数の勘定は学部と同等であり、全体で６コマを超えないように配慮がなされている。

6 施設・整備等

（1）施設・整備

（施設・整備等）

本研究科は、開設時より大学の校舎延 14,728 ㎡のうち占有面積 420 ㎡、共有面積 8,086 ㎡（実験室を中心として）を占めていた。しかし、大学院使用に限定された施設は講義室４、演習室５、自習室３室であり、大学院の教育研究の目的を実現するには自習室、演習室が手狭であった。しかし、平成 13 年（2001）には博士課程の設置に合わせて、延面積 780 ㎡、２階建の大学院棟が完成した。その中には後期課程の論文指導担当教員の研究室が７室、実験室が３室、自習室が３室、演習室が４室に、画像分析室と資料整理室が整備された。これらの実験室には、スポーツ社会科学実験室に情報処理用ＡＶシステム、スポーツ運動科学実験室にビデオ撮影システム・適応能力分析器等、スポーツ健康科学実験室に筋活力測定装置等の設備が整備され、大学院の教育研究のコア施設として優れた機能を発揮してきた。

（維持・管理体制）

大学院関係の施設・整備の維持・管理は、学校法人の総務部が総合的な管理を行っている。

管理については「学園事務組織規程」が制定されており、規則に則り、土地・建物・構築物・光熱水費については法人事務局が運用にあたっている。

防災上の自衛消防組織・訓練は消防署提出の消防計画に則り実施している。

7 学生生活への配慮

（学生への経済的支援）

本学では独自の制度として、学業成績優秀者に対して、返済義務のない大学院奨学金(月額５万円)を支給している。この他に育英会の奨学金を獲得する学生も多い。

（生活相談等）

生活上の相談については、大学院生がすでに大学を卒業した成人ということもあり、学部学生と比較して教員への依存度は小さい。そのため、アルバイトや就職等の生活相談に関しては、研究活動との兼ね合いを考慮しながら指導教員や専修の教員が相談に応じている。また指導教員だけでなく、「学生相談室・スポーツカウンセリングルーム」において、カウンセラー４名（専任１名、非常勤３名）からカウンセリングを受けることも可能である。大学院生の健康管理については診療所があり、内科、外科の２名の教授と看護師が学生の健康相談に応じる体制が整えられている。セクシュアルハラスメントやアカデミックハラスメントのような、学生生活を脅かす不当な行為に関しては、研究科委員会を中心として、教員間での危機意識の共有を図るとともに、セクシュアルハラスメント委員会の啓蒙活動が効果をあげている。

（就職指導等）

大学院生は、各専修別の専門分野に分かれて、論文担当指導教員の指導の下で研究活動に取り組んでいる。それゆえそれぞれの指導教員や所属する専修の教員が、研究に直接関わるだけでなく、それに付随する進路上の相談や生活上の相談に応じている。ただし就職に関しては、昨今の厳しい社会経済状況を反映して大学院卒業後の進路が狭き門となっており、指導教員に任せきりにするのではなく、学生委員会を中心に大学就職部と一体となって就職先の開拓や斡旋を行う体制をとっている。また専修によっては、インターンシップに力を入れており、学生の研究に役立ち、就職先の開拓につながるような、企業との協力関係の構築に努めている。

8 管理運営

（大学院の管理運営体制）

大学院の教学上の管理運営は、本学大学院学則に基づき、大学院研究科委員会がこれを行う。平成13年(2001)４月からスタートした新学則によれば、研究科委員会は、学長及び研究科担当の教授と助教授をもって構成される。ただし、委員会の承認を得て専任講師を加えることができると定めている。従前の学則との相違は、学長及び助教授を、議決権を持つ構成員として加えたことである。これまでも、実質的には学長は毎回の委員会に出席し、重要事項について大学全体の立場から意見を述べてきた。なお委員会は、選挙によって博士後期課程の研究指導教授の中から研究科長候補者を選出し、学長がこれを選任する。また、研究科長は博士後期課程の中から研究副科長を指名する。

研究科委員会は、「（１）研究科長候補者の選出に関する事項、（２）教員の人事に関する事項、（３）その他、研究科の運営に必要な事項」について審議すると定められており（大学院学則第７条)、具体的には①課程の修了及び学位の授与、②大学院学則及び諸規定の制定改廃、③予算及び施設、④入学及び退学、⑤教育課程及び履修方法、⑥賞罰、その他大学院全般に関する事項について審議する。また、研究科委員会は、各種委員会を持つことが定められており（研究科委員会規程第７条「各種委員会」)、以下の委員会が大学院運営を支えている。

①専修連絡会議（予算委員会を兼ねる）

専修間の連絡調整と予算等について審議検討する委員会である。

②教務委員会

教育に関わる諸事項を審議検討する委員会である。

③研究科担当審査委員会（人事委員会を兼ねる）

研究科担当教員の人事等に関わる諸事項について審議検討する委員会である。

④学生委員会（就職委員会を兼ねる）

学生に関わる諸事項を審議検討する委員会である。

⑤入試委員会

入試に関わる諸事項を審議検討する委員会である。

⑥国際交流委員会

西安体育学院（中国）とウェスタンオンタリオ大学（カナダ）との国際

交流に関わる諸事項を審議する委員会である。

⑦自己点検・評価委員会

自己点検・評価委員会は「自己の責任において教育・研究水準を維持・向上させ、大学院が社会に対して持つ責任を果たすため」（大学院設置基準）大学院の点検評価を行い基礎資料としての報告書を作成する委員会である。

平成13年（2001）には、研究科委員会の中に新しく博士委員会が設置された。博士委員会の構成員は、博士後期課程を担当する教授・助教授で、主として博士の学位授与について審議を行う。

9 自己点検・評価

（自己点検・評価）

スポーツ科学研究科の自己点検・評価は、これまで旧大学院学則第３条「自己評価」において、「大学院は、教育研究の水準の向上に絶えず努めるとともに、学問の府としての社会的責任を果たしていくために、活動状況を自己点検し評価する組織として『大学院審査会』を設ける」と定められており、研究科委員会により推薦された６名の専任教員と事務主任によって構成される大学院審査委員会（自己点検・評価委員会）で、創設以来２年に１度の割合で「自己点検・評価報告書」を公刊してきた。

「大学院自己点検・評価報告書（Ⅰ）」平成７年（1995）は、準備段階から開設２年間の記録をまとめ、完成年度までの足取りをふりかえってみることに主眼を置いたもので、修士論文、教員の教育研究業績一覧と併せて公にしたものである。

「大学院自己点検・評価報告書（Ⅱ）」平成９年（1997）は、文部省の監督下を離れて、本学修士課程が一人歩きを始めてから初めてのもので、その内容としては本学独自の判断で行ったカリキュラムの一部変更と、それに伴う人事への反省が中心であった。

「大学院自己点検・評価報告書（Ⅲ）」平成 11 年（1999）は、各種委員会活動の報告や施設・設備の現状、修士論文の内容と教員の教育研究活動の報告が中心であった。

平成 14 年（2003）には、大学基準協会への加入にともない、大学全体の自己点検・評価を実施する必要性が生まれ、学部と大学院の両者を含む「大阪体育大学の現状と課題」と題する自己点検・報告書を完成させた。そこでは、学部と大学院に関する多くの問題点を洗い出し、具体的な検討・実践課題を抽出した。

10 情報公開・説明責任

（自己点検・評価）

大学院自己点検・評価委員会の点検・評価の結果を研究科の教育研究にフィードバックするため、２年に１度の年次報告書の刊行を行うこととなった。自己点検の結果は、本学のＯＵＨＳジャーナルや、ホームページを用いて、学内外へと情報発信を試みている。

Ⅳ　相互評価申請（更新）に向けての各種委員会の取り組み

Ⅳ 相互評価申請(更新)に向けての各種委員会の取り組み

今回の年次報告書は、平成13年度の大学基準協会への加盟判定に対応した取り組みを中心にまとめたもので、新たに平成14年に改正された新しい基準についても、次回の「相互評価」を見据え、それらの項目に対応した自己点検・評価を実施した。

各種委員会の取り組みについても、前回の基準協会からの勧告・助言等に対する改善にとどまらず、本学が平成14年12月に策定(平成16年改定)した「中期の目標と計画」との整合を図りつつ、大学基準協会の新基準に対応したさらなる点検・評価を実施する必要がある。

資　料　編

Ⅰ　教育研究組織

1　全学の設置学部・学科・大学院研究科等

（表１）

名　　称	設置認可年月日	所　在　地	備　　考
大阪体育大学　　体育学部		泉南郡熊取町朝代台1-1	
体育学科	昭和40年1月25日	同　　上	
生涯スポーツ学科	平成8年12月19日	同　　上	
大阪体育大学　　健康福祉学部		同　　上	
健康福祉学科	平成14年12月19日	同　　上	
大阪体育大学　　スポーツ科学研究科		同　　上	
博士前期課程	平成4年3月19日	同　　上	
博士後期課程	平成12年12月21日	同　　上	

Ⅱ　教育研究の内容・方法と条件整備

1　開設授業科目における専兼比率

（表２）

学部・学科				必修科目	選択必修科目	全開設授業科目
体育学部	体育学科	専門教育科目	専任担当科目数（A）	198	33	231
			兼任担当科目数（B）	61	26	87
			担当科目における専兼比率（A／B）	3.25	1.27	2.66
		教養教育科目	専任担当科目数（A）	31	4	35
			兼任担当科目数（B）	9	21	30
			担当科目における専兼比率（A／B）	3.44	0.19	1.17
	生涯スポーツ学科	専門教育科目	専任担当科目数（A）	89	15	104
			兼任担当科目数（B）	27	11	38
			担当科目における専兼比率（A／B）	3.30	1.36	2.74
		教養教育科目	専任担当科目数（A）	16	2	18
			兼任担当科目数（B）	4	16	20
			担当科目における専兼比率（A／B）	4.00	0.13	0.90
	学部共通	自由科目	専任担当科目数（A）			31
			兼任担当科目数（B）			10
			担当科目における専兼比率（A／B）			3.10
健康福祉学部	健康福祉学科	専門教育科目	専任担当科目数（A）	4	1	5
			兼任担当科目数（B）	1	0	1
			担当科目における専兼比率（A／B）	4.00	—	5.00
		教養教育科目	専任担当科目数（A）	14	8	22
			兼任担当科目数（B）	8	6	14
			担当科目における専兼比率（A／B）	1.75	1.33	3.1

［注］　「専任担当科目数」には、他学部・大学院研究科・研究所等の専任教員による兼担科目も含む。

2　卒業判定

（表３）

学部・学科		平成１３年度			平成１４年度			平成15年度		
		卒業予定者（A）	合格者（B）	合格率(%) B/A*100	卒業予定者（A）	合格者（B）	合格率(%) B/A*100	卒業予定者（A）	合格者（B）	合格率(%) B/A*100
体育学部	体育学科	314	281	89.49%	344	315	91.57%	338	310	91.72%
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	163	152	93.25%	181	163	90.06%	168	155	92.26%
計		477	433	90.78%	525	478	91.05%	506	465	91.90%

［注］１　「卒業予定者」は、毎年度５月１日における当該学部の最終学年に在籍する学生数。
　　２　健康福祉学部は平成１５年度開設のため、該当なし。

3　大学院における学位授与状況

（表４）

研究科・専攻		学　位	１５年度	１４年度	１３年度	１２年度	１１年度	備考
ｽﾎﾟｰﾂ科学研究科	ｽﾎﾟｰﾂ科学専攻	修　　士	22	14	13	12	14	
		博士（課程）	1	—	—	—	—	平成12年12月21日設置
		博士（論文）	—	—	—	—	—	

4　就職・大学院進学状況

（表５）

学　　部	進　　路		１３年度	１４年度	１５年度
体育学部	就職	民間企業	74	111	82
		官公庁	17	28	36
		教員	126	124	141
		上記以外	68	83	86
	進学	自大学院	3	8	10
		他大学院	1	1	3
		その他	28	36	42
	そ　の　他		116	87	65
	合　　計		433	478	465

［注］　「その他」欄には、当該学部の各年度の卒業者のうち、就職、進学のいずれにも該当しないもののすべての数を含む。

5　公開講座の開設状況

（表６）

大学 学部 研究科	年間開設講座数	１講座当たりの 平均受講者数	備　考
体育学部	2	80	

［注］　平成１５年度実績。

6　国別国際交流協定締結先機関

（表７）

国名 大学・学部 研究科・研究所等	中華人民共和国	カナダ	合計
体育学部	1	1	2

7　人的国際学術研究交流

（表８）

学部・研究科等		派遣						受け入れ					
		平成１３年度		平成１４年度		平成１５年度		平成１３年度		平成１４年度		平成１５年度	
		短期	長期	短期	長期	短期	長期	短期	長期	短期	長期	短期	長期
体育学部	新規			2				8		2		2	
	継続												
計	新規			2				8		2		2	
	継続												

［注］１　研究者（教員を含む）の派遣、受け入れは１年未満のものを「短期」、それ以上を「長期」。
　　２　各派遣者および受け入れ者は、派遣および受け入れが複数年度にわたる場合、初年度について「新規」、次年度以降は「継続」欄に記載。
　　３　旅費・滞在費等の経費負担が私費によるものも含め、全ての派遣者および受け入れ者について記入。

Ⅲ　学生の受け入れ

1　学部・学科の志願者・合格者・入学者数の推移

（表９）

		入試の種類		１１年度	１２年度	１３年度	１４年度	１５年度
体育学部	体育学科	一般入試	志願者	1,302	1,589	1,265	1,413	1,667
			合格者	217	228	217	239	202
			入学者	139	142	150	176	148
			募集定員	140	133	126	124	121
		附属校推薦	志願者	27	22	26	30	30
			合格者	27	22	26	30	30
			入学者	27	22	26	30	30
			募集定員	—	—	—	—	—
		公募推薦入試	志願者	672	644	643	646	589
			合格者	177	179	170	125	124
			入学者	172	178	168	123	124
			募集定員	130	130	130	125	121
		合　計	志願者	2,001	2,255	1,934	2,089	2,286
			合格者	421	429	413	394	356
			入学者	338	342	344	329	302
			募集定員	270	263	256	249	242
	生涯スポーツ学科	一般入試	志願者	458	624	617	541	590
			合格者	192	183	155	118	118
			入学者	130	107	103	83	83
			募集定員	100	97	94	91	73
		附属校推薦	志願者	10	11	13	9	13
			合格者	10	11	13	9	13
			入学者	10	11	13	9	13
			募集定員	—	—	—	—	—
		指定校推薦	志願者	—	—	—	—	3
			合格者	—	—	—	—	3
			入学者	—	—	—	—	3
			募集定員	—	—	—	—	—
		公募推薦入試	志願者	93	123	277	244	379
			合格者	36	38	51	65	58
			入学者	36	37	51	65	55
			募集定員	30	30	30	30	45
		合　計	志願者	561	758	907	794	985
			合格者	238	232	219	192	192
			入学者	176	155	167	157	154
			募集定員	130	127	124	121	118

［注］　公募推薦入試の募集定員は附属校推薦・指定校推薦の募集定員を含む。

2　学部・学科の学生定員及び在籍学生数

（表10）

学部	学科	入学定員	編入学定員	収容定員（A）	在籍学生総数（B）	編入学生数（内数）	B／A	在籍学生数 第1年次 学生数	第1年次 留年者数（内数）	第2年次 学生数	第2年次 留年者数（内数）	第3年次 学生数	第3年次 留年者数（内数）	第4年次 学生数	第4年次 留年者数（内数）	備考
体育学部	体育学科	242	—	1,010	1,309		1.30	307		319		339		344	21	増 7名（H15年度迄）
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	118	—	490	651		1.33	156		151		173		171	9	増 3名（H15年度迄）
計		360		1,500	1,960		1.31	463		470		512		515	30	増10名（H15年度迄）
健康福祉学部	健康福祉学科	120	20	(120)	152	—	—	152								編入学3年次
合計		480		1,620	2,112		1.31	615		470		512		515	30	増10名（H15年度迄）

［注］1　健康福祉学部の収容定員は1年次のみ
　　2　備考欄「増」は期間を付した入学定員増
　　3　留年者には、休学や留学によって進級の遅れた者は含まない。
　　4　「B／A」欄は、小数点以下第3位を四捨五入し、小数点以下第2位まで表示。

3　学部の入学者の構成

（表11）

学部	学科		入学者数 一般入試	附属校推薦	指定校推薦	公募推薦入試	計	備考
体育学部	体育学科	募集定員	121		—	121	242	
		入学者数	148	30	—	124	302	
		計に対する割合	(49.0%)	(9.9%)	%	(41.1%)	100.0%	
	生涯スポーツ学科	募集定員	73			45	118	
		入学者数	83	13	3	55	154	
		計に対する割合	(53.9%)	(8.4%)	(1.9%)	(35.7%)	100.0%	
合計		募集定員	194			166	360	
		入学者数	231	43	3	179	456	
		計に対する割合	(50.7%)	(9.4%)	(0.6%)	(39.3%)	100.0%	

［注］1　各学科および合計欄の下段は全入学者数に対する割合。
　　2　公募推薦入試の募集定員には附属校推薦・指定校推薦の募集定員を含む。

4　学部の社会人学生・留学生・帰国生徒数

（表12）

学　　部	学　　科	社会人学生数	留学生数	帰国生徒数
体育学部	体育学科	—	0	—
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	—	0	—
計				
健康福祉学部	健康福祉学科	1	0	—
計		1	0	—
合　　計		1	0	—

［注］　社会人、留学生として挙げるのは、一般の学生を対象とした入試とは別にそれぞれの入試によって入学させた学生をいう。

5　学部・学科の退学者数

（表13）

学部	学科	平成１３年度					平成１４年度					平成１５年度				
		１年次	２年次	３年次	４年次	合計	１年次	２年次	３年次	４年次	合計	１年次	２年次	３年次	４年次	合計
体育学部	体育学科	12	9	2	11	34	17	10	2	11	40	7	2	3	5	17
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	3	2	4	2	11	6	6	2	3	17	5	1	3	5	14
計		15	11	6	13	45	23	16	4	14	57	12	3	6	10	31
健康福祉学部	健康福祉学科											4				4
合　　計		15	11	6	13	45	23	16	4	14	57	16	3	6	10	35

［注］　退学者数には、除籍者も含む。

6　大学院研究科の学生定員及び在籍学生数

（表14）

研究科	専攻	入学定員		収容定員		在籍学生数										C／A	D／B
						修士課程					博士課程						
		修士課程	博士課程	修士課程（A）	博士課程（B）	一般	社会人	留学生	その他	計(C)	一般	社会人	留学生	その他	計(D)		
ｽﾎﾟｰﾂ科学研究科	ｽﾎﾟｰﾂ科学専攻	12	6	24	18	(30)	(11)	(1)		(42)	(8)		(3)		(11)	1.75	0.61

［注］1　博士前期課程は修士課程の欄に後期課程は博士課程の欄に記載。
　　2　「C／A」および「D／B」欄は、小数点以下第３位を四捨五入し、小数点以下第２位まで表示。

Ⅳ　教育研究のための人的体制

1　全学の教員組織

（表15）

学部・学科、研究科・専攻、研究所等		専任教員数					助手	設置基準上必要専任教員数	専任教員１人当たりの在籍学生数	兼担教員数				兼任教員数	備考
		教授	助教授	講師	計	特任教員（外数）				教授	助教授	講師	計		
体育学部	体育学科	24	7	1	32		3	14	37.69					50	教務補佐 10人
	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	15	3	2	20	1		10						19	
計		39	10	3	52	1	3	24						69	
健康福祉学部	健康福祉学科	8	6	4	18		1	14						27	
計		8	6	4	18		1	14						27	
ｽﾎﾟｰﾂ科学研究科	ｽﾎﾟｰﾂ科学専攻	—	—	—	—	—	—			(26)	(2)		(28)	0	教務助手 ８人
計										(26)	(2)		(28)		
大学全体の収容定員に応じ定める専任教員数								22							
合計		47	16	7	70	1	4	60		(26)	(2)		(26)		

［注］1　専任は、常勤する者をいい、兼任は、学外からの兼務者。また、併設短期大学からの兼務者は兼任教員に含む。
　　2　「助手」は、主として教育研究に従事する者。また、助手に準じる専任教務補助員は「備考」欄に記載。

2　専任教員個別表

体 育 学 部

（表16）

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
学長	たむら　きよし 田村　清	男	65	1966/4/1	1983/4/1	体育学科	比較体育・スポーツ論	0.06			0.06	有	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							外書購読（英語）	0.5			0.5		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							計	0.56	1.0	0.0	1.56		
学部長	ますはら　みつひこ 増原　光彦	男	61	1965/4/1	1984/4/1	体育学科	スポーツ生理学	0.5			0.5	有	東京教育大学 体育学部健康学科 卒業 体育学士 医学博士
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							健康科学実験実習			0.6	0.6		
							△ スポーツ生理科学特講演習		1.0		1.0		
							△ スポーツ生理科学特講	0.5			0.5		
							△ スポーツ科学研究論	0.7			0.7		
							計	1.7	3.0	0.6	5.3		
教授	あさい　まさひと 浅井　正仁	男	46	1980/4/1	2001/4/1	体育学科	体育測定評価	1.0			1.0	有	筑波大学 体育専門学群卒業 体育学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							指導実習	0.5			0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							バレーボールⅠ			0.5	0.5		
							スポーツ基本運動			2.0	2.0		
							バレーボールⅡ			1.0	1.0		
							計	2.5	2.0	3.5	8.0		
教授	あらき　まさのぶ 荒木　雅信	男	52	1983/4/1	1995/4/1	体育学科	スポーツ心理学	1.0			1.0	有	筑波大学大学院 体育研究科博士課程単位取得満期退学 体育学修士 教育学修士
							行動分析法	0.5			0.5		
							メンタル・トレーニング論	0.5			0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							△ 臨床スポーツ心理学特論	0.5			0.5		
							△ 臨床スポーツ心理学特論演習		1.0		1.0		
							計	2.5	3.5	0.0	6.0		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	いだ くによし 井田 国敬	男	60	1966/4/1	2000/4/1	体育学科	スポーツ社会学	2.0			2.0	無	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							スポーツ文化研究	0.25			0.25		
							教養演習Ⅰ		2.0		2.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							計	2.25	4.5	0.0	6.75		
教授	いとう あきら 伊藤 章	男	55	1971/4/1	1991/10/1	体育学科	スポーツのバイオメカニクス	0.5			0.5	有	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育科学博士
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							陸上競技Ⅱ			1.0	1.0		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾊﾞｲｵﾒｶﾆｸｽ特論	0.5			0.5		
							△ スポーツ科学研究論	0.07			0.07		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾊﾞｲｵﾒｶﾆｸｽ特論演習		1.0		1.0		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾊﾞｲｵﾒｶﾆｸｽ特講演習		1.0		1.0		
							計	1.07	4.5	1.0	6.57		
教授	いとう みちこ 伊藤美智子	女	46	1983/4/1	2001/4/1	体育学科	舞踊論	0.5			0.5	有	岡山大学大学院 教育学研究科保健 体育専攻修士課程 修了 体育学士 教育学修士
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							ダンスⅡ			2.0	2.0		
							ダンスⅢ（ダンスⅡ）			1.0	1.0		
							ダンスⅠ			1.0	1.0		
							計	0.5	2.0	4.0	6.5		
教授	おおにし よしひさ 大西 仁久	男	59	1968/4/1	1992/4/1	体育学科	スポーツ技術論	1.0			1.0	無	東京教育大学 体育学部健康学科 卒業 体育学士
							教育方法論	1.0			1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							種目別指導法		1.0		1.0		
							体操			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							器械運動Ⅱ			1.0	1.0		
							計	2.0	3.0	2.5	7.5		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	かねこ まさひろ 金子 公宥	男	66	1971/4/1	1975/4/1	体育学科	体育学演習Ⅰ		1.0		1.0	有	東京大学大学院 教育学研究科博士 課程単位取得満期 退学 体育学士 教育学博士
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							△ バイオメカニクス特講	0.5			0.5		
							△ スポーツ科学研究論	0.07			0.07		
							△ バイオメカニクス特論演習①		1.0		1.0		
							△ バイオメカニクス特講演習		1.0		1.0		
							計	0.57	4.0	0.0	4.57		
教授	かやもり やすお 柏森 康雄	男	56	1970/4/1	1991/4/1	体育学科	体育の教材研究	0.5			0.5	有	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							介護等技術講義	0.5			0.5		
							保健体育科教育法Ⅱ	1.5			1.5		
							教育実習	0.5			0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							△ 球技コーチング論特論	0.5			0.5		
							△ 球技コーチング論特論演習		1.0		1.0		
							計	3.5	3.0	0.0	6.5		
教授	かわしま ひでたか 河島 英隆	男	58	1970/4/1	1998/4/1	体育学科	教養演習Ⅱ	0.5			0.5	無	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							コーチング論Ⅱ	0.5			0.5		
							種目別指導法	1.0			1.0		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							テニスⅠ			1.0	1.0		
							ゴルフ			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							テニスⅡ			2.0	2.0		
							計	2.0	2.0	4.5	8.5		
教授	くりやま よしなり 栗山 佳也	男	48	1982/4/1	2004/4/1	体育学科	トレーニング計画	0.5			0.5	無	筑波大学 体育専門学群卒業 体育学士
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							陸上競技Ⅰ			2.0	2.0		
							陸上競技			1.0	1.0		
							トレーニング実技			0.5	0.5		
							計	0.5	2.5	3.5	6.5		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	こくぼ しょうじ 小久保昇治	男	68	1996/4/1	1998/4/1	体育学科	学校保健	2.0			2.0	無	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							教師論	1.5			1.5		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							体育教師論		0.5		0.5		
							計	3.5	3.0	0.0	6.5		
教授	さかた よしひろ 坂田好弘	男	61	1977/4/1	1991/4/1	体育学科	比較体育・スポーツ論	0.74			0.74	無	同志社大学 経済学部卒業 経済学士
							競技スポーツ論	0.5			0.5		
							外書購読（英語）	0.5			0.5		
							種目別指導法	1.0			1.0		
							教養演習Ⅱ		0.25		0.25		
							体育学演習Ⅰ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅱ		0.5		0.5		
							ラグビーⅡ			0.5	0.5		
							指導実習			0.5	0.5		
							計	2.74	1.25	1.0	4.99		
教授	さかもと やすひろ 坂本康博	男	55	1973/4/1	1997/4/1	体育学科	コーチング論Ⅰ	0.5			0.5	無	大阪体育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							教養演習Ⅱ		0.25		0.25		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							サッカーⅠ			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							サッカーⅡ			1.0	1.0		
							計	1.5	2.25	2.5	6.25		
教授	さくどう まさお 作道正夫	男	57	1974/4/1	1993/4/1	体育学科	武道・稽古・修行論	0.5			0.5	有	東京教育大学大学院体育学研究科修了 体育学修士
							武道論	0.5			0.5		
							武道の形	1.0			1.0		
							種目別指導法	1.0			1.0		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							△ 武道論特論	0.5			0.5		
							△ 武道論特論演習		1.0		1.0		
							計	3.5	3.0	0.5	7.0		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	ししくら　やすお 宍倉　保雄	男	52	1974/4/1	1996/4/1	体育学科	体力動作分析法	2.0			2.0	無	大阪体育大学体育学部体育学科卒業 体育学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							教養演習Ⅱ		0.25		0.25		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							ハンドボールⅠ			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							計	3.0	2.25	1.5	6.75		
教授	すぎもと　まさしげ 杉本　政繁	男	57	1984/4/1	1990/10/1	体育学科	体育原論	0.5			0.5	有	東京大学大学院教育学研究科体育学専攻修士課程修了 体育学士 教育学修士
							体育・スポーツ史	1.0			1.0		
							スポーツ史	0.5			0.5		
							スポーツ文化研究	0.25			0.25		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							△ 体育スポーツ思想史特論	0.5			0.5		
							△ 体育スポーツ思想史特論演習		1.0		1.0		
							計	2.75	3.5	0.0	6.25		
教授	ちょうし　こうじ 調枝　孝治	男	66	2001/4/1	2001/4/1	体育学科	教養演習Ⅱ		0.75		0.75	有	広島大学大学院教育学研究科教育心理学専攻修士課程修了 教育学士 文学博士
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							△ スポーツ心理学特講	0.5			0.5		
							△ スポーツ科学研究論	0.07			0.07		
							△ スポーツ心理学特論演習		1.0		1.0		
							△ スポーツ心理学特講演習		1.0		1.0		
							計	0.57	4.75	0.0	5.32		
教授	とよおか　じろう 豊岡　示朗	男	57	1971/4/1	1990/4/1	体育学科	体力トレーニング論・同実習	1.0			1.0	有	東京教育大学大学院体育学研究科修士課程修了 体育学修士
							体力動作分析法	1.0			1.0		
							体力動作分析法	1.0			1.0		
							実践体力科学	0.5			0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							トレーニング実技			0.5	0.5		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ論特論	0.5			0.5		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ論特論演習		1.0		1.0		
							計	4.0	3.0	0.5	7.5		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	なかおおじ てつ 中大路 哲	男	53	1974/4/1	1995/4/1	体育学科	授業分析法	0.5			0.5	無	東京教育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							特別活動指導論	1.5			1.5		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							バスケットボールⅠ			2.0	2.0		
							計	2.0	2.5	2.0	6.5		
教授	はやし みちえ 林 信恵	女	64	1973/4/1	1985/4/1	体育学科	身体表現論	0.5			0.5	有	奈良女子大学 文学部教育学科専 攻卒業 文学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							教養演習Ⅱ		0.25		0.25		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							ダンスⅠ			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							△ 身体表現学特論	0.5			0.5		
							△ 身体表現学特論演習		1.0		1.0		
							計	2.0	3.25	1.5	6.75		
教授	ひろおか まさこ 廣岡 昌子	女	60	1969/4/1	1990/4/1	体育学科	英語Ⅰ	3.0			3.0	無	関西大学大学院 文学研究科英文学 専攻修士課程修了 文学修士
							英語Ⅱ	2.0			2.0		
							教養演習Ⅰ		1.0		1.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
											0.0		
							計	5.0	1.5	0.0	6.5		
教授	ふちもと たかふみ 淵本 隆文	男	48	1979/4/1	1999/4/1	体育学科	バイオメカニクス	1.5			1.5	有	大阪体育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							体力動作分析法	2.0			2.0		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							スポーツ情報処理実習			2.0	2.0		
							△ バイオメカニクス特論②	0.5			0.5		
							△ バイオメカニクス特論演習②		1.0		1.0		
							計	4.0	3.0	2.0	9.0		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	やべ　きょうのすけ 矢部京之助	男	66	2001/4/1	2001/4/1	体育学科	教養演習Ⅱ		0.75		0.75	有	東京大学大学院 教育学研究科博士課程単位取得退学 教育学博士
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							△ 障害者スポーツ論特論	0.5			0.5		
							△ 健康福祉科学特講	0.5			0.5		
							△ スポーツ科学研究論	0.07			0.07		
							△ 障害者スポーツ論特論演習		1.0		1.0		
							△ 健康福祉科学特講演習		1.0		1.0		
							計	1.07	4.75	0.0	5.82		
教授	やまざき　たけし 山崎　武	男	60	1968/4/1	1989/4/1	体育学科	教養演習Ⅱ		0.5		0.5	有	日本体育大学 体育学部体育学科 体育学士
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							保健の教材研究		0.5		0.5		
							保健体育科教育法Ⅰ		1.5		1.5		
							ハンドボールⅠ			0.5	0.5		
							△ スポーツ指導者論特論	0.5			0.5		
							計	0.5	4.5	0.5	5.5		
助教授	かわしま　やすひろ 川島　康弘	男	43	1992/4/1	2002/4/1	体育学科	体力トレーニング論・同実習	1.0			1.0	無	大阪体育大学 体育学部体育学科卒業 体育学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							水泳Ⅰ			3.0	3.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							臨海水泳実習			0.5	0.5		
							計	2.0	2.0	4.0	8.0		
助教授	かんざき　ひろし 神崎　浩	男	43	1985/4/1	1997/4/1	体育学科	運動学	1.0			1.0	無	筑波大学大学院 体育研究科修士課程修了 体育学修士
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							剣道Ⅱ			2.0	2.0		
							剣道Ⅰ			2.0	2.0		
							計	1.0	2.0	4.0	7.0		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
助教授	きむら じゅん 木村 準	男	50	1984/4/1	1997/4/1	体育学科	種目別指導法	1.0			1.0	無	大阪体育大学体育専攻科修了 体育学士
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							バスケットボールⅠ			2.5	2.5		
							スポーツ基本運動			1.0	1.0		
							バスケットボールⅡ			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							計	1.0	2.0	5.0	8.0		
助教授	くどう としお 工藤 俊朗	男	48	1986/4/1	2004/4/1	体育学科	心理学	1.0			1.0	無	京都大学大学院文学研究科修士課程修了 文学修士
							教育心理学	1.5			1.5		
							教養演習Ⅰ		2.0		2.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							統計処理実習			1.0	1.0		
							計	2.5	2.5	1.0	6.0		
助教授	ながお かよこ 長尾佳代子	女	38	2003/4/1	2003/4/1	体育学科	国語表現法	1.0			1.0	無	京都大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学 文学博士
							日本文学	1.0			1.0		
							教養演習Ⅰ		2.0		2.0		
							教養演習Ⅱ		1.0		1.0		
							計	2.0	3.0	0.0	5.0		
助教授	ひらの りょうさく 平野亮策	男	57	1990/4/1	1991/4/1	体育学科	武道の形	1.0			1.0	無	天理大学体育学部体育学科卒業 体育学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							体育学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							体育学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							柔道Ⅰ			1.0	1.0		
							柔道			1.0	1.0		
							柔道Ⅱ			2.0	2.0		
							柔道Ⅲ			1.0	1.0		
							指導実習			0.5	0.5		
							計	2.0	2.0	5.5	9.5		
助教授	みぎやま ただし 右山忠史	男	48	1990/4/1	1998/4/1	体育学科	宗教学	1.0			1.0	無	立教大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学 文学修士
							学校教育論	0.5			0.5		
							道徳教育の研究	1.5			1.5		
							教育原理	1.5			1.5		
							教養演習Ⅰ		2.0		2.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							計	4.5	2.5	0.0	7.0		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
講師	なかい　としゆき 中井　俊行	男	40	1988/4/1	1994/4/1	体育学科	体育測定評価	2.0			2.0	無	大阪体育大学 体育学部体育学科 卒業 体育学士
							種目別指導法	1.0			1.0		
							体育学演習Ⅰ		1.5		1.5		
							体育学演習Ⅱ		1.5		1.5		
							ラグビーⅠ			0.5	0.5		
							ラグビーⅠ			2.0	2.0		
							ラグビーⅡ			0.5	0.5		
							指導実習			0.5	0.5		
							計	3.0	3.0	3.5	9.5		
助手	たかもと　めぐみ 髙本　恵美	女	27	2003/4/1	2003/4/1	体育学科					0.00		筑波大学大学院 博士課程体育科学 研究科修了 体育科学博士
											0.00		
											0.00		
											0.00		
							計				0.00		
助手	たはら　ひろあき 田原　宏晃	男	29	2000/4/1	2002/4/1	体育学科					0.00		大阪体育大学 大学院体育学研究 科博士課程修了 体育学修士
											0.00		
											0.00		
											0.00		
							計				0.00		
助手	なかの　たかし 中野　尊志	男	35	1996/4/1	1996/4/1	体育学科					0.00		筑波大学大学院体 育研究科修士課程 修了 体育学修士
											0.00		
											0.00		
											0.00		
							計				0.00		
教授	あさの　さちこ 浅野　幸子	女	56	1997/4/1	1997/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	英語Ⅰ	3.0			3.0	無	国際基督教大学院 教育学研究科博士 課程単位取得満期 退学 教育学修士
							英語Ⅱ	2.0			2.0		
							教養演習Ⅰ		1.0		1.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							計	5.0	1.5	0.0	6.5		
教授	いわた　まさる 岩田　勝	男	63	1963/4/1	1989/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	リハビリテーション概論	0.5			0.5	無	関西大学文学部新 聞学科卒業 文学士
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							マッサージ法実習			1.0	1.0		
							アスレティックケア			1.5	1.5		
							テーピング・マッサージ法実習			1.25	1.25		
							計	0.5	2.0	3.75	6.25		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験実習実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	うめばやし かおる 梅林 薫	男	47	1981/4/1	2001/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	体力トレーニング論・同実習	2.0			2.0	有	筑波大学大学院体育研究科修士課程修了 体育学修士
							運動学概論	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							テニスⅠ			2.0	2.0		
							△ 体力科学特論	0.5			0.5		
							計	3.0	2.0	2.0	7.0		
教授	おかむら こうじ 岡村 浩嗣	男	45	2000/4/1	2003/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ栄養学	1.5			1.5	有	筑波大学大学院修士課程体育研究科修了 栄養学修士 学術博士
							栄養管理	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							健康科学実験実習			0.94	0.94		
							△ スポーツ栄養学特論	0.5			0.5		
							△ スポーツ栄養科学特講	0.5			0.5		
							△ スポーツ栄養学特論演習		1.0		1.0		
							計	3.0	3.0	0.94	6.94		
教授	かみ かつや 上 勝也	男	43	1988/4/1	2003/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	機能解剖学	1.5			1.5	有	和歌山県立医科大学研究生退学 体育学士 医学博士
							スポーツ生理学	1.0			1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							健康科学実験実習			1.4	1.4		
							△ 運動生化学特論	0.5			0.5		
							計	3.0	2.0	1.4	6.4		
教授	たきせ さだふみ 滝瀬 定文	男	54	1972/4/1	1991/10/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	健康指導管理論	1.0			1.0	有	大阪体育大学体育学部体育学科卒業 体育学士 医学博士
							衛生学（公衆衛生学を含む）	1.0			1.0		
							教養演習Ⅱ		0.25		0.25		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							健康科学実験実習		0.86		0.86		
							水泳Ⅱ			1.0	1.0		
							△ スポーツ環境論特論演習		1.0		1.0		
							計	2.0	4.11	1.0	7.11		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	はらだ むねひこ 原田 宗彦	男	50	1987/4/1	1995/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ経営論	0.5			0.5	有	ペンシルバニア州立大学健康・体育レクリエーション学部博士課程修了 Philosophy of Doctor in Recreation and Parts
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							レクリエーションⅢ			0.5	0.5		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ論特論	0.5			0.5		
							△ スポーツ経営学特講	0.5			0.5		
							△ スポーツ科学研究論	0.07			0.07		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾏﾈｼﾞﾒﾝﾄ論特論演習		1.0		1.0		
							△ スポーツ経営学特講演習		1.0		1.0		
							計	1.57	4.0	0.5	6.07		
教授	ひろはし けんじ 廣橋 賢次	男	69	1996/4/1	1996/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ医学	1.0			1.0	有	大阪市立大学大学院医学研究科外科系整形外科学専攻課程修了 医学博士
							救急処置Ⅰ	0.5			0.5		
							救急処置Ⅱ	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							△ スポーツ科学研究論	0.07			0.07		
							△ 臨床スポーツ医学特論演習		1.0		1.0		
							△ 臨床スポーツ医学特講演習		1.0		1.0		
							計	2.07	4.0	0.0	6.07		
教授	ふくだ よしのり 福田 芳則	男	50	1978/4/1	1997/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツプログラム開発論	0.5			0.5	有	東京大学大学院教育学研究科修了 教育学修士
							野外教育論	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							レクリエーションⅠ			2.0	2.0		
							レクリエーションⅢ			0.5	0.5		
							レクリエーション指導実習			0.25	0.25		
							海洋スポーツキャンプ実習			0.5	0.5		
							スキー実習			0.5	0.5		
							△ 野外スポーツ論特論	0.5			0.5		
							△ 野外スポーツ論特論演習		1.0		1.0		
							計	1.5	3.0	3.75	8.25		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
教授	まえしま　えつこ 前島　悦子	女	42	2003/4/1	2003/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ医学	0.5			0.5	有	和歌山県立医科大学大学院医学研究科修了 医学博士
							スポーツと疾病予防	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							△ 健康管理論特論演習		0.5		0.5		
							計	1.0	3.0	0.0	4.0		
教授	まつさか　としひと 松坂　寿仁	男	55	1976/4/1	1995/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	外国文学	0.5			0.5	無	関西大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学 文学修士
							英語Ⅱ	1.0			1.0		
							ドイツ語	2.0			2.0		
							外書購読（ドイツ語）	0.5			0.5		
							教養演習Ⅰ		2.0		2.0		
							計	4.0	2.0	0.0	6.0		
教授	まつむら　しんや 松村　新也	男	57	1969/4/1	1991/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	生理学	1.5			1.5	有	大阪体育大学体育学部体育学科卒業 体育学士 医学博士
							発育発達論	1.0			1.0		
							加齢と身体運動	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ	1.0			1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ	1.0			1.0		
							健康科学実験実習			0.43	0.43		
							健康科学実験実習			0.43	0.43		
							健康エクササイズ			0.25	0.25		
							計	5.0	0.0	1.11	6.11		
教授	よしだ　せいじ 吉田　精二	男	58	1975/4/1	1994/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	体育測定評価	1.0			1.0	無	大阪体育大学体育学部体育学科卒業 体育学士
							体力測定評価	2.0			2.0		
							スポーツ科学実験法	0.5			0.5		
							教養演習Ⅱ		0.5		0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							健康科学実験実習			0.86	0.86		
							計	3.50	2.50	0.86	6.86		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職年月日	現職就任年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験実習実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
助教授	つちや ひろのぶ 土屋 裕睦	男	39	1997/4/1	2002/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ心理学	0.5			0.5	有	筑波大学大学院修士課程体育研究科修了 体育学修士
							メンタル・トレーニング論	0.5			0.5		
							スポーツとメンタルヘルス	0.5			0.5		
							健康スポーツ指導論・同実習	1.0			1.0		
							スポーツカウンセリング	1.5			1.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							剣道			1.0	1.0		
							健康科学実験実習			0.86	0.86		
							臨海水泳実習			0.5	0.5		
							△ メンタルヘルス論特論演習		1.0		1.0		
							計	4.0	3.0	2.36	9.36		
助教授	ふじもと じゅんや 藤本 淳也	男	38	1991/4/1	2002/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ経営論	0.5			0.5	有	鹿屋体育大学大学院体育学研究科社会体育コース修士課程修了 体育学修士
							スポーツ・マーケティング	0.5			0.5		
							スポーツ行動分析法	0.5			0.5		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							レクリエーションⅡ			2.0	2.0		
							海洋スポーツキャンプ実習			0.5	0.5		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ論特論	0.5			0.5		
							△ ｽﾎﾟｰﾂﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ論特論演習		1.0		1.0		
							計	2.0	3.0	2.5	7.5		
助教授	ふるさわ こういち 古澤 光一	男	41	2003/4/1	2003/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	スポーツ施設管理運営論	0.5			0.5	無	インディアナ大学大学院臨床運動生理学修士課程修了
							教養演習Ⅱ		0.75		0.75		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							レクリエーションⅡ			1.0	1.0		
							ニュースポーツ			1.0	1.0		
							海洋スポーツキャンプ実習			0.5	0.5		
							計	0.5	1.75	2.5	4.75		

職名	ふりがな 氏名	性別	年齢	就職 年月日	現職就任 年月日	所属学科	授業科目 毎週授業時数 科目名	講義	演習	実験 実習 実技	計	大学院における研究指導担当の状況（有無）	最終学歴及び学位称号
講師	つるいけ まさあき 鶴池 政明	男	37	1997/4/1	1999/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	生涯スポーツ指導論・同実習	1.0			1.0	無	インディアナ大学ブルーミントン校大学院 理学修士
							ｱｽﾚﾃｨｯｸ・ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ	1.0			1.0		
							ｱｽﾚﾃｨｯｸ・ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝⅡ	0.5			0.5		
							比較体育・スポーツ論	0.06			0.1		
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							テーピング法実習			0.5	0.5		
							テーピング法実習			0.5	0.5		
							テーピング法実習Ⅱ			0.5	0.5		
							ｱｽﾚﾃｨｯｸ・ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ実習Ⅰ			0.5	0.5		
							ｱｽﾚﾃｨｯｸ・ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ実習Ⅱ			0.5	0.5		
							健康エクササイズ			0.25	0.25		
							テーピング・マッサージ法実習			1.0	1.0		
							スキー実習			0.5	0.5		
							計	2.56	2.0	4.25	8.81		
講師	まつなが けいこ 松永 敬子	女	34	2001/10/1	2001/4/1	生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	レクリエーション概論	1.0			1.0	無	大阪体育大学大学院体育学研究科修士課程修了 体育学修士
							生涯スポーツ学演習Ⅰ		1.0		1.0		
							生涯スポーツ学演習Ⅱ		1.0		1.0		
							レクリエーションⅠ			4.0	4.0		
							レクリエーション指導実習			0.5	0.5		
							スキー実習			0.5	0.5		
							計	1.0	2.0	5.0	8.0		

［注］1　「科目名」欄の△印は、大学院研究科の授業科目。
2　授業時数とは、授業の単位となる連続した授業時間（いわゆる「コマ」）の担当回数を指す。
3　1授業科目を複数の教員で担当する場合は、当該授業時数（コマ数）を担当者数で除して毎週授業時数を算出。

3　専任教員年齢構成

（表17）

学部・研究科	職位	71歳以上	66歳～70歳	61歳～65歳	56歳～60歳	51歳～55歳	46歳～50歳	41歳～45歳	36歳～40歳	31歳～35歳	26歳～30歳	計
体育学部	教　授		5	5	12	7	6	4				39
			12.8%	12.8%	30.8%	17.9%	15.4%	10.3%				100%
	助教授				1		3	3	3			10
					10%		30%	30%	30%			100%
	専任講師								2	1		3
									66.7%	33.3%		100%
	計		5	5	13	7	9	7	5	1		52
			9.6%	9.6%	25%	13.5%	17.3%	13.5%	9.6%	1.9%		100%
	助　手									1	2	3
										33.3%	66.7%	100%
合　計			5	5	13	7	9	7	5	2	2	55
			9.1%	9.1%	23.7%	12.7%	16.4%	12.7%	9.1%	3.6%	3.6%	100%

定 年
教授70才・教授以外62才

［注］1　「助手」は、専任教務補助員（いわゆる副手、実験補助員等）等は含まない。
　　2　各欄の下段にはそれぞれ「計」欄の数値に対する割合を記載。

4　専任教員の担当授業時間

体育学部（５２人）

（表18）

区分＼教員	教　授	助教授	講　師	備　考
最　高	8.5 授業時間	9.5 授業時間	9.1 授業時間	１授業時間90分
最　低	4.7 授業時間	4.8 授業時間	8.0 授業時間	
平　均	6.6 授業時間	7.4 授業時間	8.9 授業時間	

健康福祉学部（１４人）

区分＼教員	教　授	助教授	講　師	備　考
最　高	8.0 授業時間	1.3 授業時間	9.0 授業時間	１授業時間90分
最　低	2.0 授業時間	1.0 授業時間	1.0 授業時間	
平　均	5.0 授業時間	1.1 授業時間	2.8 授業時間	健康福祉学部は平成15年度開設の為

責任授業時間数	6	6	6	

［注］1　教員が当該大学において担当する１週間の最高、最低及び総平均授業時間を記載。
　　2　授業時間の計算は、１週間における１授業時間（授業の単位となる連続した授業時間ーいわゆる「コマ」を指す）の担当回数を基礎として算出。したがって、１授業時間（１コマ）90分の授業の場合は、90分を単位として計算。

5　専任教員の給与

（表19）

学部・研究科		専任教員俸給額（年収）（円）		
		教　授	助教授	講　師
体育学部	最　低	9,420,280	7,629,567	7,576,636
	平　均	11,945,092	9,277,867	8,549,076

［注］　平成１５年１月から12月の１年間を対象。

V　研究活動と研究体制の整備

1　専任教員の教育・研究業績

（表20）

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部	学　長	田村　清	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成16年4月	外書講読で、自己採点の授業法を試みている。
2　作成した教科書、教材、参考書 外書講読（英語）教材	平成16年4月	体育、スポーツに関する英語本より分り易い16編を収集している。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

〈学会活動〉

昭和41年　月～現在に至る	日本体育学会会員

所属	大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	職名	学部長	氏名	増原　光彦	大学院の授業担当の有無	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） スポーツ生理学（生涯スポーツ学科必須科目）	平成10年	スポーツを実践する原動力は、筋肉、神経、呼吸、心臓・循環器などの生理的な働きによってもたらされる。すなわち、神経の命令にしたがって筋肉が活動し、運動に必要な力を生み出す。また、その運動を持続するには、肺や心臓、血管、血液、ホルモンなどの協調的な働きが必要である。本講義では、関連する生理学的知識をはじめ、優れたスポーツ選手のもつ生理的資質はどのようなものか、また、トレーニングによって生理機能がどのように変化するのか、といった問題を含めて、スポーツ活動と生理機能との相互関係について言及する。従って、本講義のねらいは、スポーツの「科学的なものの見方、考え方」の基礎を教授し、体育・スポーツ指導を科学的論理に基づいて行う能力を身につけることである。
2　作成した教科書、教材、参考書 運動生理学読本	平成9年初版発行	上記内容を網羅した教科書として編集
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項 生涯スポーツ学演習Ⅰ・Ⅱを通じて卒業論文を多数指導		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
活性酸素と運動	共著	1999年	共立出版㈱	井上正康著　55名分担執筆	第2章2．4 第3章3．5
臨床病理レビュー　女の一生と臨床検査	共著	2004年	臨床病理刊行会	渡辺清明　高木　康 巽　典之編集　増原光彦分筆	P. 70-77
論文					
Effects of Exercise on the Vascular Disease of Hyperlipidemic Rats	共著	1999年	Japanese J. Judo Therapy 7（4),	滝瀬定文　川島康弘 増原光彦　岩田勝 木村道男	P. 425-434

動的膝伸展運動における運動強度と大腿直筋の酸素動態の関係について	共著	2000年	体力科学 49(1)	岡本孝信 増原光彦	P. 203-221
Differences in the oxygenation of quadriceps fenoris during dynamic knee extensions as determined by near-infrared spectroscopy、	共著	2001年	JOURNAL OF SPORT SCIENCES AND OSTEOPATHIC THERAPY, 3(1),	岡本孝信 増原光彦	P. 49-54
Relationship between muscle contractile velocity of m.quadriceps femoris and muscle oxygenation during eccentric knee extension、	共著	2002年	JOURNAL OF SPORT SCIENCES AND OSTEOPATHIC THERAPY, 3(3),	岡本孝信 増原光彦	P. 171-176
Effects of Periodic Physical Exercises on Body Fat and Aerobic Ability in Female College Students、	共著	2003年	Health Evaluation and Promotion, 30(2),	岡本孝信 増原光彦	P. 222-226
「インピーダンス法による高精度体成分分析装置を用いた体組成と健康評価法に関する一考察」	共著	2004年	Osaka Research Journal of Physical Education 大阪体育学研究　42	土肥啓一郎　梅林　薫 上　勝也　滝瀬定文 豊岡示朗　松生香里 松村新也　吉田精二 増原光彦	P. 81-91
Effects of active limb vascular occlusion on inactive limb peripheral circulation during intermittent handgrip exercise	共著	2004年	JOURNAL OF SPORT SCIENCES AND OSTEOPATHIC THERAPY, 5(3)	Takanobu OKAMOTO Mitsuhiko MASUHARA	P. 151-156
インピーダンス法による体組成成分の分析とそれを用いた健康評価法の一考察	共著	2004年	Health Evaluation and Promotion, 31(1)	Mitsuhiko MASUHARA Takanobu OKAMOTO Noriyuki TATSUMI	P. 321
定期的な運動習慣は若年者の動脈スティフネスを抑制する	共著	2004年	Health Evaluation and Promotion, 31(1)	Takanobu OKAMOTO Mitsuhiko MASUHARA	P. 291
Interrelationship of physical fitness of female college students with hidden obesity	共著	2004年	Health Evaluation and Promotion,　31(4)	Takanobu Okamoto Mitsuhiko Masuhara Komei Ikuta	P. 572-576
Effects of periodic physical exercise on pulse wave velocity in female college students	共著	2004年	Health Evaluation and Promotion,　31(4)	Takanobu Okamoto Mitsuhiko Masuhara Komei Ikuta	P. 577-581
The effect of eccentric contraction velocity on quadriceps oxygen dynamics	共著	2004年	lsokinetics and Exercise Science　12	Takanobu Okamoto Mitsuhiko Masuhara Komei Ikuta	P. 105-109

Localization of MyoD, myogenin and cell cycle regulatory factors in hypertrophying rat skeletal muscles	共著	2004年	Acta Physiol. Scand., 180	Minenori Ishido Katsuya Kami Mitsuhiko Masuhara	P. 281-290
In vivo expression patterns of MyoD, P21 and Rb proteins in myonuclei and satellite cells of denervated rat skeletal muscle	共著	2004年	Am J. Physiol.:Cell physiol., 287	Minenori Ishido Katsuya Kami Mitsuhiko Masuhara	C484-C493
その他					
伸張性収縮による筋の機能構造的変化とそれに伴う遺伝子発現について	共著	1999年	体力科学 第48巻　6号	太田雅弘 上　勝也 増原光彦	P. 719
伸張性収縮における収縮スピードの違いが大腿四頭筋の酸素動態におよぼす影響	共著	1999年	体力科学 第48巻　6号	岡本孝信 増原光彦	P. 726
筋損傷による神経栄養因子受容体発現の制御機構	共著	1999年	体力科学 第48巻　6号	上　勝也 増原光彦	P. 792

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

（学　会　活　動）	
昭和40年～現在に至る	日本生理学会会員
昭和40年～現在に至る	日本体力医学会会員、評議員
昭和40年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和40年～現在に至る	日本人間工学会会員
昭和55年～現在に至る	日本総合健診医学会会員、評議員
平成４年12月～現在に至る	日本運動生理学会会員、評議員
平成　年～現在に至る	日本スポーツ整復療法学会会員、理事、現副会長
（社　会　活　動）	
昭和56年～現在に至る	中高年雇用福祉社会ジェオントロジー研究委員会委員
昭和56年～現在に至る	ヘルスケア・リーダー養成研修会講師（労働省　中央労働災害防止協会）
昭和59年～現在に至る	大阪市民健康づくり相談センター技術管理委員会委員（大阪市環境保健局より委嘱）
平成５年～現在に至る	人間生活工学研究センター、身体機能データーバース委員会委員（通産省）
平成７年～現在に至る	ジャパン・アスレチック・トレーナーズ協会（JATAC）理事 その他運動生理学、健康科学に関する講演会の講師として活動

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	浅井　正仁	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書	平成14年	各種目（バレーボール、バスケット、サッカー、ハンドボール、ラグビー、その他）の日本体育学会大会号の研究抄録のデータベース作成（ゲーム分析的研究に関連する報告）
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
今季リーグ戦を振り返って	単著	平成11年2月	大阪体育大学コーチング系「櫂」第３号		P. 53-58
バレーボールのブロックに関するゲーム分析的研究 －リードブロックとコミットブロックの比較－	共著	平成11年7月	大阪体育大学紀要　第30巻	浅井正仁 柏森康雄	P. 13-23
バレーボールゲームの得点に関するゲーム分析的研究 －ラリーポイント制における得点構成及び連続得点について－	単著	平成13年7月	大阪体育大学紀要　第32巻		P. 13-24

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和55年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和63年～現在に至る	スポーツ運動学会会員
平成２年～現在に至る	日本スポーツ方法学会会員
平成５年～現在に至る	大阪府バレーボール協会代議員・指導普及委員

平成12年～現在に至る	関西大学バレーボール連盟　常任理事，強化指導普及副委員長
平成12年～現在に至る	全日本大学バレーボール連盟　男子強化副委員長
平成14年～平成15年	西日本大学バレーボール５学連男女選抜対抗戦　関西選抜男子チームコーチ
平成16年	西日本大学バレーボール５学連男女選抜対抗戦　関西選抜男子監督

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	荒木　雅信	（有）・無）

I　教育活動　（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 授業評価を実施し、教育内容等を吟味した	平成15年7月	大概、満足したとの評価と得たが、教室、プレゼンテーション機材等のインフラへの不満があり、整備したい。
2　作成した教科書、教材、参考書 各単元毎に資料を作成し、配布	毎　年	各単元毎に資料を作成し、書き込み形式による理解の促進を計っている。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項 研修会の実施	平成15年9月	授業以外で学外において宿泊を伴って研修会を実施している。

II　研究活動　（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
運動心理学の展開	共著	平成13年2月	㈱遊戯者	坂手照憲　　楠戸一彦	P. 40-53
論文					
大阪体育大学が行う心理的サポートと臨床スポーツ心理学構築の枠組み	単著	平成11年12月	コーチングクリニック 第13巻12号		P. 13-15

その他					
メンタルトレーニングスポーツライフを支える	単著	平成12年 4月	アエラムック 58号		P. 52-53

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　（平成11年4月1日～平成16年3月31日）	
昭和49年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和53年～現在に至る	日本スポーツ心理学会会員
昭和56年～現在に至る	日本バイオフィードバック学会会員
昭和58年～現在に至る	国際スポーツ心理学会会員
平成６年～現在に至る	日本生理心理学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	井田　国敬	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）		
教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・スポーツ社会学（講義）	平成11年4月～16年3月	スポーツをめぐる社会的、文化的な諸問題について、毎時１～２枚の資料の配布とＯＨＰを用いて講じた。大きな教室での講義で成果は不十分であり、改善の余地がある。
・スポーツ文化研究（講義）	平成11年4月～16年3月	主としてイギリス･スポーツの文化的特性について、ドキュメンタリー･フィルムを用いて講義し、文化としてのスポーツの意味の理解を進めた。
・体育学演習	平成11年4月～16年3月	主として、日本スポーツにおける社会的、文化的現象での特徴的な問題点について、具体的テーマごとに、学生の事前研究、発表、討論により、理解を計った。
・教養演習	平成11年4月～16年3月	新聞、評論文、ドキュメンタリー･フィルム等を用いて、スポーツマン、大学生、社会人、職業人としての生き方について発表･討論により問題意識を高めた。
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4　その他教育活動上特記すべき事項 B級スポーツ指導員養成講習会等講師 （日本体育協会、レク協会等）	平成11年4月～16年3月	地域スポーツの指導者としてのスポーツの社会学的領域についての基礎的知識を問題意識の向上のために、資料とＯＨＰを用いて講義する。

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
トニー・メイソン「1945年以降の英国スポーツ」	単著	平成11年7月	大阪体育大学紀要　第30巻		P. 85-95
文章資料に見る「アメリカ体育・スポーツ史」(３)	単著	平成11年7月	大阪体育大学紀要　第30巻		P. 127-134
文章資料に見る「アメリカ体育・スポーツ史」(５)	単著	平成12年7月	大阪体育大学紀要　第31巻		P. 67-76
文章資料に見る「アメリカ体育・スポーツ史」(７)	単著	平成13年7月	大阪体育大学紀要　第32巻		P. 115-125

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）

昭和41年４月～現在に至る	日本体育学会会員
平成８年８月～現在に至る	International Society for Comparative Physical Education and Sport 会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	伊藤　章	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 「スポーツのバイオメカニクス」の講義	平成16年4月	スポーツのバイオメカニクスの講義において、ややもすると理論に走りすぎる力学的内容を、グラウンドにデモンストレーションや実技を通して理解させる努力を行なった。
2　作成した教科書、教材、参考書 「短距離走のバイオメカニクス」	平成16年3月	世界一流短距離選手の疾走技術の特徴を明らかにし、その技術のメカニズムを解説した。そして、短距離走の指導に関するポイントを指摘した。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4　その他教育活動上特記すべき事項		
修士論文作成指導	平成11年～15年	修士論文５編の作成を指導し、合格させた。 修士論文を元に作成した論文２編が学術雑誌に掲載された。

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
スポーツバイオメカニクス	共著	平成12年9月	朝倉書店	３０名	6ﾍﾟｰｼﾞ
論文					
短距離走の筋活動様式	共著	平成12年3月	体育学研究　第45巻 第2号	馬場崇豪 和田幸洋 伊藤　章	P. 186-200
スプリント走にみられる伸張性筋活動の意味	単著	平成12年6月	体育の科学　第50巻 第6号		P. 459-462
短距離走におけるスナップの意味	共著	平成12年8月	バイオメカニクス研究 第4巻 第2号	伊藤　章 石川昌紀	P. 159-163
やり投げのパフォーマンスと動作の関係	共著	平成15年6月	バイオメカニクス研究 第7巻 第2号	村上雅俊 伊藤　章	
短距離走に関する研究	単著	平成15年7月	体育学研究　第48巻 第4号		
最高疾走速度と接地期の身体重心の水平速度の減速・加速	共著	平成16年1月	体育学研究　第49巻 第1号	福田厚治 伊藤　章	
走速度およびストライド変化が膝関節への力学的負荷に及ぼす影響	共著	平成16年2月	体力科学　第53巻 第1号	谷埜予士次　大工谷新一 田邉　智　伊藤　章	
その他					
陸上競技のサイエンス －ハードル－	共著	平成11年11月	陸上競技マガジン 第33巻 第12号	市川博啓 伊藤　章	P. 166-167
運動学とバイオメカニクスは融合できるか	単著	平成11年12月	バイオメカニクス研究 第3巻 第4号		P. 324
Sprint running mechanism	単著	平成11年12月	Proceedings of the symposium:Limiting Factors of Human Neuromuscular Performance		P. 65-66

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）	
昭和46年～現在に至る	日本体育学会会員　（代議員、編集委員として活動している）
昭和46年～現在に至る	日本体力医学会会員
昭和52年～現在に至る	日本バイオメカニクス学会会員　（理事、編集委員として活動している）
昭和56年～現在に至る	International Society of Biomechanics(ISB)会員
昭和63年～現在に至る	日本スポーツ方法学会会員
平成３年～現在に至る	日本スポーツ運動学会常任理事
平成５年～現在に至る	日本陸上競技連盟科学委員会技術研究部副部長
平成７年～現在に至る	日本スポーツ方法学会理事
平成７年～現在に至る	日本体育学会評議委員
平成７年～現在に至る	大阪体育学会理事　（副会長に選出され活動している）
平成９年～現在に至る	日本バイオメカニクス学会理事
平成11年～現在に至る	バイオメカニクス研究編集委員
平成11年	OSPAスポーツ大学（大阪市スポーツ振興協会）で大阪市民を対象に、走・跳・投のバイオメカニクスを講義

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	伊藤　美智子	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）		
教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
・大阪府立佐野養護学校教員研修会	平成14年1月16日	養護学校教員を対象に障害者のダンス指導について実技を含めた講演を行った。
・日本体育学会第54回研究発表	平成15年9月27日	「創作ダンス授業における運動有能感に関する研究―受講者はどのようなところに有能さを感じているのか―」と題した発表を行い、教育実践から導き出した教育内容の検討について述べた。

4　その他教育活動上特記すべき事項		
・第17-21回ダンス合同発表会の開催	平成11～15年 12月	本学でダンス授業を履修した者を対象に一同介して合同の発表会を開催した。半期もしくは通年授業の締めくくりとして、本学ダンス室を開場にして行った。会場は、舞台施設・照明機器も配置され、本格的なもので、毎年約400名の参加で行っており、その企画運営すべてを担当している。
・創作ダンス部の指導		
第12回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）創作コンクール部門　神戸市長賞受賞	平成11年8月	「歩きつづける…おれには家がない。～「赤い繭」安部公房の世界～」
第14回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）創作コンクール部門　神戸市長賞受賞	平成13年7月	「りんごの花の咲く日まで」
第15回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）創作コンクール部門　奨励賞受賞	平成14年8月	「Comfortable Place ―ワタシのここちよい場所―」
第16回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）創作コンクール部門　特別賞受賞	平成15年8月	「源『十牛図より』」
第4回アーティスティックイントヤマ少人数による創作ダンスコンクール	平成15年9月	「ココロノカケラ」
・公開講座　ダンスセミナーの開催（年１度）	平成11年より（現在に至る）	大阪府下の高校教員・創作ダンス部員を対象としたダンス指導
・大阪女子体育連盟体育指導者講習会講師	平成13年6月2日	大阪府下の教員を対象としたダンス指導法に関する講習
・兵庫県高体連ダンス部指導力向上事業 講習会講師	平成14年8月21日	兵庫県高体連ダンス部所属教員に対する指導
・兵庫県高等学校総合体育大会ダンス大会審査員	平成14年より（現在に至る）	ダンス発表の審査を行った。
・大阪女子体育連盟体育指導者講習会講師	平成15年5月17日	大阪府下の教員を対象としたダンス指導法に関する講習
・第16回全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）参加発表部門　コメンテーター	平成15年8月	
・体操リーダー連絡協議会講習会講師	平成15年8月31日	NPO法人MGLAのメンバーを対象としたダンス指導に関する講習

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
ダンス授業における教師行動に関する研究：ダンス授業と他の体育授業との関係	共著	平成12年7月	大阪体育大学紀要	◎伊藤美智子 林　信恵 岡澤祥訓 北島順子	9頁～17頁
生徒によるダンス授業評価の試み	共著	平成12年7月	大阪体育大学紀要	◎伊藤美智子 林　信恵	1頁～7頁
教師行動と生徒による授業評価から見たダンス授業の検討	共著	平成14年7月	体育学研究 第47巻第4号	◎伊藤美智子 林　信恵	333頁～346頁

スポーツシーンにおける言語的、身体的嫌がらせの実態－セクシュアル・ハラスメントに関する予備調査－	共著	平成14年7月	大阪体育大学紀要	倉地博美 林　信恵 ◎伊藤美智子	9頁～17頁
創作ダンス授業を対象とした運動有能感について（その１）－高校生（女子）を対象として－	共著	平成15年3月	大阪体育学研究 第41巻	◎伊藤美智子 林　信恵	1頁～6頁
その他					
Dance Assemble ルード・フェアリー第１回記念公演		平成15年3月	泉佐野市立文化会館	伊藤美智子（ダンス指導および芸術監督として）	

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月11日～平成16年3月31日）

昭和56年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和61年10月～現在に至る	舞踊学会会員
平成７年３月～現在に至る	日本スポーツ運動学会会員
平成12年４月～現在に至る	知的障害児・者を対象としたダンス指導（Dance Assemble ルード・フェアリー）
平成13年４月～現在に至る	大阪府スポーツ振興審議会理事

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	教　授	氏名	大西　仁久	大学院の授業担当の有無　（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
１　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） ・教育方法論はＯＨＰとプリント配布、発問を多くし学生とのコミュニケーションを図る。　各章ごとにレポートを書かせる。 ・スポーツ技術論は毎時間10～15分のまとめの小テストを行なう。できるかぎり実践に近づけるため、例を多く挙げる。 ・体操、集団行動、徒手体操、メディシンボール、なわの運動をグループ学習の形態で行なう。学生のアクティブラーニングを基本としている。 ・器械運動Ⅱ 技術体系指導法をプリントで配布。できるかぎる「技」の技術内容を理解させる。		
２　作成した教科書、教材、参考書 全授業、自作プリントの配布		

3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項 体操競技部の部長 監督としてトレーニング計画を立て、学生の自主的トレーニングをバックアップしている。		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和43年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和43年４月～現在に至る	大阪体育学会会員
平成元年～現在に至る	日本体操競技研究会会員
昭和50年４月～現在に至る	大阪体育大学体操競技部監督
昭和55年４月～現在に至る	関西学生体操競技連盟顧問
昭和55年４月～現在に至る	関西ジュニア体操クラブ協議会参与
平成元年～現在に至る	トップスポーツクラブ顧問

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	金子　公宥	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成11～16年の毎年度当初に新たな授業計画を立て、実施している。	少人数クラスの授業のみを担当しているため特別な授業評価は行っていない。 (1)学部３・４学年対象のゼミナール（演習Ⅰ、演習Ⅱ）では、毎年、各学生が興味を持つテーマでの卒業論文の作成に向けて指導している。 (2)大学院前期課程の学生には、修士論文の作成に向けた指導をしている。 (3)大学院後期課程では、平成16年3月（大学院後期課程の完成年度末）に本学大学院第１号の博士号取得者となる学生を指導した。

2　作成した教科書、教材、参考書	福永哲夫氏との共編著で「バイオメカニクス～身体運動の科学的基礎～」（杏林書院）」を編集すると共に、序文および第1章を執筆した (平成16年10月1日刊行)	(1)学部のゼミナールでは、拙著「スポーツ・バイオメカニクス入門」（昭和57年に初版、平成5年に改定）を中心に、最新の文献情報を加えて指導を行っている。 (2)大学院では内外の学術文献から最新の情報を入手し、それらを参考にしながらオリジナリティのある研究を行うべく、学生と共に努力している。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
高齢者の「意識歩行」による歩行運動の変化	平成11年	何らかの意識をもって歩く歩行を「意識歩行」と名付け、高齢者が歩行速度、歩調、歩幅のそれぞれを意識して歩いた場合にどのような変化が起こるかを解説した総説で、速度を速くするように意識すると歩幅と歩調が増加し、歩調を速めるように意識すると歩幅が増加しない。歩幅を広げるよう意識すると、効率が落ちずにパワーが増加することから、歩行能力の向上には速さまたは歩幅を意識することの重要性を論じた。
「加齢と身体活動」がメインテーマ～イスラエルでの国際会議から～	平成11年	1998年の国際体力研究学会(ICPAFR)大会のレポート。表題の会議がイスラエルのウインゲート研究所に於き、欧州高齢者研究学会との共催で開かれた。 会議に於けるトピックス（転倒、骨折、寿命と身体活動の関係）やイスラエルの様子を紹介した。
高齢者の歩行動作 ～足の動きに注目して～	平成11年	先に報告した「足を高く挙げて歩く高齢者の特徴」の直接的原因を明らかにするため、爪先の奇蹟が平均曲線とほぼ一致する典型例の股関節角、膝関節角、足関節角の変化を動作学的に比較した。その結果、高齢者の爪先が若年者より高い位置を移動するのは、膝や踵の引き上げが大きいからではなく、足背屈角が小さいためであると考えられた。また、高齢男性は若年男性より歩隔が大きく、高齢女性は若年女性より足向角が小さい（内股歩き）という特徴が認められた。
ゴルフスイングの「コイリング」と「コッキング」に関する動作学的研究	平成11年	プロゴルファー 1名を含む男子ゴルファー34 名につき、ハンディキャップ別にグループ分けしてスウィング動作を比較した。飛距離の指標にはクラブのヘッドスピード（Ｖ）を選んだ。上級群ほどV が速い原因は、体幹の捻りの大きさにあることを統計的に証明した。
社会と共に歩む－高齢者の歩行研究から－	平成12年	筑波大学におけるシンポジウム「高齢者の生活機能増進法」の原稿。寝たきりを避けるには歩行能力の向上が大切であるが、高齢者の歩行動作は若年者より床面の上方を通過し、その点では“つまづき”による転倒生じにくいと報告。また、エネルギー効率(振子効率)からみても必ずしも若者に劣らないことを示した。
からだの働きとゴルフスイング	平成12年	ゴルフスウィングにおける筋・腱のバネ作用（弾性エネルギー利用）とむち作用（バネ作用の連結）を中心としたスウィング理論を展開し、バネとむち作用は正確さより飛距離に関係することを論じた。

バイオメカニクスからみた 21世紀のスポーツ科学	平成13年	バイオメカニクスからみたスポーツ科学の過去を振り返り、21世紀におけるスポーツ科学のあり方において分化から総合化への努力が必要であること、及びその為にはどのようなシステムを構築すべきかを論じた。
調整力の発達と老化	平成14年	（財）体育科学センターの調整力委員会（５つの研究機関）による平成6～8年度の研究成果を（委員会委員長として）総括し、その概要を解説することによって研究成果の意義を述べた。
もう一つのシャトル：３分間の屋内持久走テスト(SST)	平成14年	本研究で1986年に開発した持久力テスト（シャトル・スタミナテスト；SST）の紹介。文部省テストである20mシャトルランと同等の妥当性をもちながら、①マイペースで②簡便で③短時間に④決まった時間内にできることを示した。
三次元空間におけるスイング動作のハーモニー：合理的なドライバーショット動作の一般化に向けて	平成14年	ゴルフのドライバーショットにおけるハーモニー（タイミング）を課題として与えられ、最近の研究データをもとに体幹部の肩・腰の回転する位相ずれや、上肢のダウンスウィングにおける肘・手頸のコック，アンコックのタイミングについて論じた。
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
高齢者の歩行能力に関する体力的・動作学的研究（第１報）：自由歩行における足運びについて	共著	平成11年	体育科学　第27巻	淵本隆文 長谷川　淳 金子公宥	p. 109-118
高齢者の歩行能力に関する体力的・動作学的研究（第２報）：脚伸展，足底屈，足背屈の筋力と歩行能力の関係	共著	平成11年	体育科学　第28巻	淵本隆文 加藤浩人 金子公宥	p. 108-115
跳躍運動における反動利用能力の発育・発達	共著	平成11年	大阪体育大学紀要　第30巻	林 美紀子 金子公宥	p. 7-12
学童期における20mシャトルランテスト(20ms)とシャトル・スタミナテスト(SST)との相関関係	共著	平成11年	大阪体育大学紀要　第30巻	中尾泰史 金子公宥	p. 1-6
高齢者の歩行能力に関する体力的・動作学的研究（第３報）－縦断的分析による歩行能力の加齢変化－	共著	平成12年	体育科学　第29巻	淵本隆文 松岡有希 金子公宥	

平地走における力学的エネルギーの計算法と種目差について	共著	平成12年	大阪体育大学紀要　第31巻	嶋野浩一郎　田邊　智 淵本隆文　金子公宥	p. 19-25
シャトル・スタミナテストの妥当性と20mシャトルランとの相関：小学生と大学生のデータから	共著	平成12年	体育学研究　第45巻3号	中尾泰史　金子公宥 豊岡示朗　田路秀樹 西垣利男　末井健作	p. 377-384
パワーアップに関する３種のアネロビック運動の特異性	共著	平成13年	体育・スポーツ科学　第10巻	田路秀樹　西垣利男 末井健作　金子公宥	p. 13-19
筋パワーに及ぼす複合トレーニング効果：特に力ー速度関係に及ぼす静的及び動的筋力トレーニングの影響について	共著	平成14年	トレーニング科学 第13巻3号	田路秀樹 金子公宥	p. 127-136
女子プロゴルファーによるドライバーショットの三次元動作分析：動作の時間的推移（タイミング）に着目して-	共著	平成14年	J. J. Golf Sciences　第15巻3号	野沢むつこ 金子公宥	p. 52-59
3次元動作解析による超一流大学野球投手のピッチングに関する事例的研究	共著	平成14年	大阪体育大学紀要　第33回	村上雅俊 淵本隆文 金子公宥	p. 1-8
高齢者の歩行運動における振子モデルのエネルギー変換効率	共著	平成15年	体力科学　第52巻 第5号	田中ひかる　淵本隆文 木村みさか　金子公宥	p. 621-630
高齢者の肘屈筋における力ー速度関係とパワー	共著	平成16年	体育学研究　第49巻 第1号	田路秀樹 金子公宥	p. 19-27
マシーン歩行の動作とエネルギー消費量	共著	平成16年	大阪体育学研究(投稿中)	村上雅俊 田中ひかる 金子公宥	
学会発表					
The elderly people lift the toe more than young adults when walking.	共著	平成11年	Abstract for XVII International Congress of Biomechanics	金子公宥　長谷川淳 淵本隆文　木村みさか	p. 209
A critical muscular strength reducing walking speed in the elderly.	共著	平成11年	Abstract for XVII International Congress of Biomechanics	淵本隆文　加藤浩人 木村みさか　長谷川淳、 金子公宥	p. 713
Effect of combined training on the force, velocity and power relationship using isotonic and isometric training loads.	共著	平成11年	Abstract for XVII International Congress of Biomechanics	田路秀樹 末井健作 金子公宥	p. 800
Comparison of kinetic parameters between young and elderly populations under the same walking conditions.	共著	平成11年	Abstract for XVII International Congress of Biomechanics	植松光俊 細田 金子公宥	p. 715

高齢者の平衡能と下肢筋力との関連	共著	平成11年	体力科学　第48巻6号	奥野直　永井由香 森本武利　木村みさか 岡山寧子　加藤浩人 淵本隆文　金子公宥	p. 772
加齢に伴う歩行能力の変化に関する横断的および縦断的分析：女性の急歩について	共著	平成11年	体力科学　第48巻6号	淵本隆文　金子公宥 森本武利　木村みさか	p. 783
高齢者における簡便な持久性テストSSTwと他の体力要因：歩行能および平衡能との関連について	共著	平成11年	体力科学　第48巻6号	田中靖人　木村みさか 岡山寧子　奥野直 永井由香　金子公宥 淵本隆文	p. 784
シャトル・スタミナテストの妥当性と20mシャトルランテストとの相関	共著	平成11年	体力科学　第48巻6号	金子公宥　中尾泰史 豊岡示朗　田路秀樹 西垣利男　末井健作	p. 864
消防職員の体力的特徴と加齢変化：横断分析と縦断分析	共著	平成11年	日本体育学会第50回記念大会号	石田秀欣 淵本隆文 金子公宥	p. 466
有酸素テストとしてのシャトル・スタミナテストの妥当性	共著	平成11年	日本体育学会第50回記念大会号	末井健作　中尾泰史 田路秀樹　西垣利男 豊岡示朗　金子公宥	p. 473
シャトル・スタミナテストと20mシャトルランテストの相関関係	共著	平成11年	日本体育学会第50回記念大会号	中尾泰史　金子公宥 豊岡示朗　田路秀樹 西垣利男　末井健作	p. 474
体育学・スポーツ科学における21世紀への課題	単著	平成12年	日本体育学会第51回記念大会号		p. 48
一流野球投手のピッチングフォームの動作分析	共著	平成12年	日本体育学会第51回記念大会号	金子公宥 淵本隆文 村上雅俊	p. 256
走運動の出力パワー評価法	共著	平成12年	体力科学　49巻6号	金子公宥 田邊智 淵本隆文	p. 860
Quantitative comparison of total mechanical work calculated by different methods	共著	平成13年	ISB Congress New Zealand	M.Kaneko　K.Shimano S. Tanabe　T. Fuchimoto	
宇宙飛行士による宇宙船内体操のエネルギー消費量	共著	平成13年	体力科学	金子公宥　宮辻和貴、 村上雅俊　田邊　智	
「マシーン歩行」の動作とエネルギー消費量	共著	平成13年	大阪体育学研究	村上雅俊 田中ひかる 金子公宥	
Muscle strength necessary to maintaine walking ability in elderly momen.	共著	平成14年	Proc. 7th Annual Congress of the European College of Sport cience. Thens, July 24-28.	Fuchimoto, T. Kato, H. Kaneko, M.	

Quantitative comparison of total mechanical work calculated by different ethods.	共著	平成15年	Proc. Int. Soc. Biomech. 19th Congr.: The human body in motion.	Kaneko, M. Tanabe, S.	Shimano, K. Fuchimoto, T.	
宇宙飛行士による宇宙船内「体操」のエネルギー消費量	共著	平成15年	体力科学　52巻号	金子公宥 村上雅俊	宮辻和貴 田邊　智	p. 796
アジア地域高齢者の体力に関するプロジェクト研究（日本と中国における高齢者体力の比較）	共著	平成15年	体力科学　52巻号	木村みさか 奥野直 淵本隆文 奥野直	岡山寧子 糸井亜弥 森本武利 金子公宥	p. 960
日本と中国に於ける60歳代高齢女性の生活状況の比較 （アジア地域高齢者の体力に関するプロジェクト研究から）	共著	平成15年	体力科学　52巻号	岡山寧子 金子公宥 森本武利	木村みさか 淵本隆文 金子公宥	p. 962
Association of critical muscle strength and reduced walking speed in elderly women.	共著	平成16年	J. Aging and Physical Activity Vol.12(3)	Kaneko, M. Kimura, M.	Kato, H. Fuchimoto, T.	pp. 381-382
A research project on fitness of Asian elderly populations (Comparison of fitness among Chinese, Korean, and Japanese elderly people.)	共著	平成16年	J. Aging and Physical Activity Vol.12(3)	Kimura, M. Kaneko, M. Morimoto, T. Itoi, A. Chen, P.	Okayama, Y. Fuchimoto, T. Okuno, T. Zhao, Q. Kim, H.	p. 384
Comparison of life among Japanese, Chinese, and Korean Women in their 60's: Analysis of data of the research project on fitness of Asian elderly populations.	共著	平成16年	J. Aging and Physical Activity Vol.12(3)	Okayama, Y. Kaneko, M. Kim, H. Zhao, Q. Okuno, T.	Kimura, M. Fuchimoto, T. Chen, P. Itoi, A. Morimoto, T.	p. 282

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和63年４月～現在に至る	日本体力医学会理事
平成６年４月～現在に至る	日本体育学会代議員
平成９年４月～平成15年３月	日本バイオメカニクス学会会長
平成10年４月～平成16年３月	大阪体育学会会長
平成14年３月	中富健康科学健康振興賞受賞

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	教　授	氏名	柏森　康雄	大学院の授業担当の有無	（(有)・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 保健体育科教育法Ⅱ 体育の教材研究	 15年7月・12月 15年7月・12月	授業評価のアンケート結果は、両科目とも大学の平均値より高い値を示し、学生の評価は高かった。ただ、学生の授業参加及び予習・復習を積極的に進めさせるなどに工夫が必要であることが明らかになった。
2　作成した教科書、教材、参考書 保健体育科教育法Ⅱ　講義テキスト改訂	 16年3月	講義を担当している保健体育科教育法Ⅱのテキストを授業の進め方に沿って内容を改訂した。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 学校体育指導者中央講習会　東部地区　講師 平成15年度県立高等学校10年経験者研修の講師	 15年5月20日～23日 15年8月4日	文部科学省が企画し、教員研修センターが実施している小・中・高等学校における体育指導者の資質向上を図るための講習会。バレーボール班の講義・実技担当。 兵庫県立教育研修所主催の県立高等学校10年経験者を対象とした研修事業で「これからの体育科教育」について講義する。
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
「最新」体育科教育法	共著	平成11年12月	大修館	杉山重利　園山和夫 本村清人　池田延行 朝倉正昭　井筒次郎 浦井孝夫　勝亦紘一 柏森康雄　寒川恒夫 中島一郎　平井　章 細川　磐　松本富子 宮本政明　向山貴仁	P. 108-113, P. 205-207

改訂高等学校指導要領の展開 保健体育科編	共著	平成13年3月	明治図書出版株式会社	本村清人　戸田芳雄 高松 薫　菊 幸一 三木四郎　柿添賢之 布浦 宏　五十嵐義昌 佐藤 靖　前田嘉昭 柏森康雄　沢井純子 渡辺雅之　上原建夫 落合 保　巽 申直 片岡康子　今関豊一 藤岡寿美子　関根正久	P. 184-194
新学習指導要領による高等学校体育の授業　下巻	共著	平成14年4月	大修館	杉山重利　高橋建夫 園山和夫　細江文利 木村清人　柏森康雄　他19名	P. 30-55
論文					
バレーボールのブロックに関するゲーム分析的研究	共著	平成11年8月	大阪体育大学紀要 第30巻	浅井正仁 柏森康雄	P. 13-23
バレーボールにおける攻撃力評価に関する研究　－攻撃組立状況別の攻撃力分析－	共著	平成13年5月1日	バレーボール学会 「バレーボール研究」 第3巻第1号	工藤健司 柏森康雄	P. 1-7
バレーボールにおける攻撃力評価に関する研究（2）－プレーヤーのポジション別攻撃力評価の試み－	共著	平成14年5月1日	バレーボール学会 「バレーボール研究」 第4巻第1号	工藤健司 田原武彦 柏森康雄	P. 9-15
バレーボールにおける攻撃力評価に関する研究（3）－2000オリンピック大会女子最終予選、日本チームと対戦チームの攻撃力比較－	共著	平成15年5月1日	バレーボール学会 「バレーボール研究」 第5巻第1号	工藤健司　島津大宣 泉川裔一　田原武彦 柏森康雄	P. 18-25

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和45年～現在に至る	日本体育学会会員
平成２年～現在に至る	日本バレーボール協会科学研究委員会体力部部員（現在に至る）
平成10年４月～平成12年３月	関西大学バレーボール連盟　常任理事
平成10年４月～現在に至る	バレーボール学会幹事（編集委員長）
平成11年４月～現在に至る	大阪府バレーボール協会　理事
平成11年４月～平成15年３月	日本バレーボール協会指導普及委員会指導者研修部部員
平成11年４月～現在に至る	バレーボール学会　幹事　編集委員会委員長
平成12年４月～平成16年３月	関西大学バレーボール連盟　副理事長
平成12年４月～平成15年３月	日本体育学会　評議員
平成15年４月～現在に至る	日本体育学会　代議員

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	教　授	氏名	河島　英隆	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 テニスのカリキュラムと指導法（河島英隆 編著）	平成15年3月	指導に役立つよう展開。テニスの特性、基本レッスンⅠ-Ⅶ、応用レッスンⅠ-Ⅱ、補習レッスンⅠ-Ⅳで構成
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
テニスのカリキュラムと指導法	共著	平成15年3月	大同印刷所	河島英隆編著　梅林　薫 畑山雅史　松原慶子	P. 1-29 P. 39-40 P. 45-47
論文					
コーチングメモ　ランダム Ⅳ	単著	平成12年2月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　櫂　第４号		P. 19-21
コーチングメモ　ランダム Ⅴ	単著	平成13年2月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　櫂　第５号		P. 33-37
コーチングメモ　ランダム Ⅵ	単著	平成14年2月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　櫂　第６号		P. 23-27
コーチングメモ　ランダム Ⅶ	単著	平成15年12月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　櫂　第７号		P. 17-20
コーチングメモ　ランダム Ⅷ	単著	平成16年2月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　櫂　第８号		P. 9-12

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）	
昭和45年４月～現在に至る	日本体育学会会員
平成元年４月～現在に至る	全日本学生テニス連盟部長監督会理事
平成３年４月～現在に至る	関西学生テニス連盟部長監督会理事長
平成12年４月～平成16年３月	全日本学生テニス連盟部長監督会副会長

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	栗山　佳也	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
基礎からの陸上競技ﾊﾞｲｵﾒｶﾆｯｸｽ	共著	平成11年9月	ﾍﾞｰｽﾎﾞｰﾙ・ﾏｶﾞｼﾞﾝ社	ﾄﾑ・ｴｯｶｰ著　澤村博監訳 安井年文　青山清英訳	P. 194-195
論文					
下股のﾊﾞﾘｽﾃｨｯｸな伸張－短縮ｻｲｸﾙ運動の遂行能力からみた槍投げ競技者の体力特性	共著	平成14年11月	体育学研究　第47巻 第6号 日本体育学会	田中健二　尹 聖鎮 栗山佳也　高松 薫	
やり投げの投能力を高めるｼﾞｭﾆｱのための専門的ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ	単著	平成16年3月	大阪体育大学体育学部紀要 第35巻		

やり投げにおける投射条件投てき距離との関係	共著	平成16年3月	大阪体育大学研究　第43巻 大阪体育学会	栗山佳也 村上雅俊 伊藤　章	

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和57年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和59年～現在に至る	関西学生陸上競技連盟コーチ
平成４年～現在に至る	トレーニング科学研究会会員
平成11年４月～現在に至る	日本陸上競技連盟強化部強化委員
平成12年12月～現在に至る	ＯＳＰＡスポーツ大学講師（ウエイト・トレーニング）
平成15年３月	日本スポーツ方法学会春季大会シンポジスト（陸上競技・投擲）
平成15年４月～現在に至る	関西学生陸上競技連盟ヘッド・コーチ
平成15年４月～現在に至る	日本学生陸上競技連合強化委員
平成15年11月～現在に至る	日本陸上競技学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	小久保　昇治	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 「学校保健概論」 「学校保健概論」改訂版	平成11年3月 平成16年3月	学校保健の授業用テキストとして作成 各種資料を多くして、就職してからも役立つ内容とした
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
その他					
学校保健活動推進マニュアル		平成15年2月20日	(財)日本学校保健会		

保健主事の手引＜三訂版＞		平成16年2月26日	(財)日本学校保健会		

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和59年４月～現在に至る	富田林市体育指導委員
昭和61年５月～平成11年５月	(財)全日本学校剣道連盟常務理事
平成５年４月～平成12年12月	大阪市スポーツ振興審議会委員
平成６年４月～現在に至る	(財)富田林市文化振興事業団理事
平成６年５月～平成16年５月	大阪学校剣道連盟副会長
平成11年５月～現在に至る	(財)全日本学校剣道連盟専務理事
平成12年４月～現在に至る	日本安全教育学会監事
平成12年４月～現在に至る	(財)日本学校保健会の保健主事資質向上委員会委員
平成15年７月～現在に至る	(財)全日本剣道連盟理事

所属　大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名　教　授	氏名　坂田　好弘	大学院の授業担当の有無　（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成16年	授業の評価は高い （比較体育・スポーツ論）
2　作成した教科書、教材、参考書	平成16年	テキスト作成。その内容に合ったビデオ・パワーポイントを準備し、講義を進めた。又、ゲストスピーカーを招いた。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等	平成16年	コーチング方法、コーチ養成について要望に応じ各県を巡回した。
4　その他教育活動上特記すべき事項	平成16年	一方的授業ではなく、学生参加の方法で行なった。 Tell me and I forget. Show me and I remember. Involve me and I understandである。

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
ラグビーの科学	共	1990年	大修館書店	辻野昭	

ラグビー教室	共	1988年	大修館書店	岡仁詩	
論文					
NSラグビーにおける普及・育成方法		2004年	大阪体育大学紀要		14頁
ラグビー競技に必要な声に関する研究	共	2002年	鳴門教育大学実技教育研究	山中一剛	6頁

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

平成３年４月～現在に至る	大阪体育大学教授　　日本ラグビーフットボール協会評議委員
＜海外＞	
平成15年４月～平成15年９月	ニュージーランド留学　　2007年ラグビーワールドカップフランス大会親善大使

所属　大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名　教　授	氏名　坂本　康博	大学院の授業担当の有無　（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 高等学校 保健体育（第一学習社）	平成16年2月10日	第6章 第2節 5　トレーニングと安全 用語解説　FIFA ワールドカップ
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 スポーツ指導者の表彰式 記念講演 （大阪府貝塚市 体育協会）	平成15年10月28日	「スポーツと人生」その気にさせるコーチング
4　その他教育活動上特記すべき事項 (財)健康体力づくり事業団 健康運動指導士養成講座 講師	平成1年～現在 年２回	「楽しいボール運動」実技指導

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
高等学校 保健体育	共著	平成16年2月10日	第一学習社	藤原喜悦 ほか18名	P. 154-156

その他					
球技スポーツの基礎動画と連続写真でみる球技	共著	平成14年1月	ﾚｲｼｽｿﾌﾄｳｪｱｻｰﾋﾞｽ(株)	梅林　薫 ほか	サッカー編

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和48年４月～現在に至る	日本体育学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	作道　正夫	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書	平成13年 平成14年2月 平成14年12月 平成11年～15年	・姿勢の研究「懸待一致を求めて姿勢を整える」（スキージャーナル） ・「身心の相関性を求めて－近代化の功罪を問う－」（「櫂」本学コーチング誌） ・「快剣撥雲－日々感思流汗之行－」（「櫂」本学コーチング誌） ・毎年10回位の講演・講習をセットの学外事業を展開している。その度に小冊子資料を作成し配布している。毎回ゼミ学生を２～３名アシスタントとして参加させ、研修の時間としている。 ・資料は大学での講義、ゼミ資料として活用している。 （文化論、稽古の修行論、技術論、指導法、その他の内容である）
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等	1986年～現在に至る 平成5年～現在に至る 平成5年～現在に至る 平成6年～現在に至る 平成12･13年 平成13年7月 平成13年～現在に至る 平成15年4月29･30日 平成15年10月 平成15年10月18日 平成15年11月16日	・フランス（マルセイユを中心とする南仏）にて「剣心去来講習会」主幹第8回を終了 ・全国中学校剣道練成大会　講師 （若鷲旗大会　上郡町→姫路市　平成16年より移行予定） ・長野県木曽郡玉滝村「おんたけ全国指導者講習会」（２日間）講師 ・香川大学教育学部卒業生の会（松楠会主催）「青少年剣道研修会」２日間　講師 ・大阪府学生剣道大会開会式「日本剣道形演武」 ・第２回パリ剣道祭、八段位模範試合（全日本剣道連盟派遣） ・全国高等学校・中学校剣道指導者研修会　講師（３日間－日本武道館　勝浦） ・石川県河北郡剣道連盟50周年記念講演・講習「武道の話－剣と禅－」 ・全日本学生剣道優勝大会　優勝（師範） ・大阪府学生剣道連盟「湯野正憲剣道論」講演（90分） ・富山県砺波市剣道連盟50周年記念講演 「剣道の競技文化としての特性をめぐって」

	平成15年11月19日 平成16年1月24日 平成16年5月15･16日	・国際日本文化研究センター第23回国際研究会 「21世紀の日本武道の行方 過去・現在・未来」 「武の文化性ーその経緯と理念をめぐってー」　シンポジストとして講演(50分) ・全日本剣道連盟ナショナルチーム強化講習会講演 「運動学的立場からの剣道上達技術論」 ・全日本剣道連盟四国地区講習会「懸待一致の上達論ー指導法」講師
	平成16年5月25日 平成16年6月10･11日	・「剣道・新八段の修行」富山幸二郎著 取材 スキージャーナル「作道正夫ー大きな剣道、これを学生達に提供しなければー」 (P. 327-342) ・全日本剣道連盟近畿地区講習会「懸待一致の上達論ー指導法」講師
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
武道の国際化に関する一考察	共著	平成14年3月	日本武道学会大阪支部 大阪武道学研究　第11巻1号	村上太一 作道正夫	P. 29-38

III　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和44年～現在に至る	日本武道学会会員
昭和55年～現在に至る	大阪学校剣道連盟常任理事
昭和62年～現在に至る	スポーツ運動学研究会会員
平成12年５月～現在に至る	大阪府剣道連盟理事
平成12年～現在に至る	日本武道学会評議員
平成15年10月～現在に至る	全日本剣道連盟普及委員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	宍倉　保雄	（有・(無)）

I　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		

2　作成した教科書、教材、参考書 各種防御方法に対する攻撃法（ハンドボール）のＤＶＤ作成	平成13年12月	平成13年の全日本インカレにおいて、特徴的な防御システムを用いていた６チームの映像を編集し、効果的攻撃方法をまとめたＤＶＤを作成した。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本協会コーチシンポジュームでのパネリスト	平成15年3月	パワープレー時における攻撃方法について映像を用いて講演した。
4　その他教育活動上特記すべき事項 兵庫県ハンドボール協会主催　講習会講師 岡山県ハンドボール協会主催　講習会講師	平成14年1月 平成14年3月	攻撃方法の考え方 同　上

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和49年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和49年～現在に至る	日本体力医学会会員
昭和54年～現在に至る	全日本学生ハンドボール連盟　理事
昭和57年～現在に至る	日本バイメカニクス学会会員

2　専任教員の教育・研究実績（芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員）

（表21）

所属	職名	氏名
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	宍倉　保雄

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　所	開催日時	発表・展示等の内容等
平成12年全日本学生ハンドボール選手権	広 島	平成12年11月	優　勝
平成13年全日本学生ハンドボール選手権	富 山	平成13年11月	優　勝

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	杉本　政繁	（有・無）

I　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成15年～	ビデオ必要箇所頭出しＤＶＤ化、パワーポイント
2　作成した教科書、教材、参考書	平成11年～	近世・近代・現代の体育・スポーツ年表（全27頁）と歴史基礎資料 木村吉次編「体育スポーツ史概論」共著（市村出版）
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
新世紀スポーツ文化論 体育学叢書	共著	2002年3月	タイムス	稲垣編　杉本 三井　稲垣　他	P. 59～81
論文					
文書資料に見る「アメリカ体育・スポーツ史」（２）H.G.スポルディング「我が国の国民的ゲーム」	単著	1999年	大阪体育大学紀要（30巻）		P. 117～127
ルキアーノスの『アナカルシス』	単著	2001年	大阪体育大学紀要（32巻）		P. 85～109
文書資料に見る「アメリカ体育・スポーツ史」トマス、W. ヒギンソン「聖者と肉体」	単著	2001年	大阪体育大学紀要（32巻）		P. 109～115

Concerning Physical Education's Thoughts of John Milton –Differences Treatment between Western Countries and Japan	単著	2002年	ISHPES－Studies・Vol.11		P. 393～399
文書資料に見る「アメリカ体育・スポーツ史」アン・オハーゲン「アスレチック・ガール」	単著	2002年	大阪体育大学紀要（33巻）		P. 83～90
T.D.Woodの健康教育論　―戦後の我が国の教育への影響と関わって―	単著	2004年	大阪体育大学紀要（35巻）		P. 69～80
ヒギンソン.T.Wの『聖者と肉体』に見る体育・スポーツ観	単著	2004年	大阪体育学研究（42号）		P. 1～8
その他					
加藤橘夫ノート 第４回「体育教材」	単著	1999年	大阪体育大学紀要（30巻）		P. 97～106
「第１回, 国際シルクロードスポーツ文化学術会議」に参加して	単著	1999年	大阪体育学研究（37号）		P. 38～41

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和47年～現在に至る	日本体育学会　体育史専門分科会会員
昭和58年～平成12年	日本体育学会体育原理専門分科会会員
昭和60年～現在に至る	日本オリンピックアカデミー（ＪＯＡ）会員
昭和62年～現在に至る	スポーツ史学会会員
平成３年～現在に至る	大阪体育学会理事
平成５年～平成14年	日本体育学会評議員
平成８年～平成12年	大阪体育学会『大阪体育学研究』編集委員会委員長
平成10年～平成12年	全国大学体育連合・近畿支部理事
平成16年～現在に至る	日本体育学会・評議員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	調枝　孝治	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		

2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去５年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
運動心理学の展開	共著	2001年2月	遊戯社	調枝孝治先生退官記念論文集刊行会編	P. 7-15
時間を作る、時間を生きる	共著	2004年3月	北大路書房	松田文子編著　調枝孝治 甲村和三　神宮英夫 山崎勝之　平　伸二	P. 63-83
論文					
Pattern formation in polyrhythmic tapping at a self-paced tempo	共著	1999年9月	Perceptual and Motor Skills, 88,	Tajima, . M. Choshi, K.	P. 1160-1168
Effects of learning and movemnt frequency on polyrhythmic tapping performance	共著	2000年3月	Perceptual and Motor Skills, 90,	Tajima, . M. Choshi, K.	p. 675-690
Aprendizagem motora como um problema mal-definido	単著	2000 年 3 月	Revista Paulista de Educação Física, Suplemento, no.3	Choshi, K.	P. 16-23
両手協応運動のタイミング制御に対する運動振幅の役割	共著	2001年3月	岡山体育学研究、第8号	田島　誠 調枝孝治	P. 21-28
生存秩序としての体育・スポーツ心理学	単著	2001 年 1 月	体育の科学、第 51 巻	調枝孝治	P. 21-24
運動学習からみた動作の評価	単著	2003 年 1 月	体育の科学、第 53 巻	調枝孝治	P. 9-12
トライアスロン選手のレースタイプと心理的競技能力の関係	共著	2003 年 3 月	大阪体育大学紀要、第 34 巻	和多野　大 調枝孝治	P. 55-61

自信形成が空間位置決め課題の習得と保持過程に与える効果	共著	2004年3月	大阪体育大学紀要、第35巻	木島章文 荒木雅信 調枝孝治	P. 59-67
その他					
自己学習による運動パターンの形成	共著	2000年3月	広島スポーツ科学研究、第10巻	◎調枝孝治　坂手照憲 関矢寛史　橋本晃啓	P. 17-23
ユースサッカーチームにおけるメンタルトレーニング効果	共著	2001年3月	広島スポーツ科学研究、第11巻	関矢寛史　調枝孝治 坂手照憲　橋本晃啓	P. 13-19
スポーツ選手強化に対する科学的研究の効用と限界	単著	2001年3月	広島県体育協会スポーツ科学委員会講演・シンポジウム報告書	調枝孝治	P. 1-15

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和41年４月～現在に至る	日本心理学会会員
昭和41年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和51年９月～現在に至る	日本バイオメカニクス学会会員
平成９年４月～現在に至る	疲労研究会運営委員
平成13年12月～現在に至る	日本スポーツ心理学会副会長

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	豊岡　示朗	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 体力トレーニング論ノート（教材）	平成11年4月	体力トレーニング論・同実習の授業時に役立てるため作成。 ページ数212ページ　毎年改訂
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
Training for Young Distance Runners	単訳	平成11年4月	大修館，東京，中高校生の中長距離走ﾄﾚｰﾆﾝｸﾞ		P. 9-54
人間はどこまで速く走れるか	単	平成12年7月	ベースボールマガジン，東京，マラソン最強伝説		P. 136-141
確実に記録が伸びるトレーニング法	単	平成13年3月	山海堂，東京 実践ランニング読本	ランニング学会編	P. 71-92
求められる日本女子ランナーの選手生命	単	平成13年5月	日本陸上競技連盟など 大阪国際女子マラソン20年誌		P. 76
論文					
シャトルスタミナテストの妥当性と20mシャトルランテストとの相関：小学生と大学生のデータから	共	平成12年5月	体育学研究 第45巻　第３号	◎中尾泰史　金子公宥　豊岡示朗　田路秀樹　末井健作	P. 377-384
暑熱環境下走行時における含水スポンジによる身体冷却効果	共	平成12年6月	ランニング学研究 第11巻　第１号	◎石井好二郎　松生香里　福嶋利浩　和田光代　豊岡示朗	P. 34-41
女性ランナーの暑熱環境下走行時における含水スポンジの身体冷却効果	共	平成12年6月	ランニング学研究 第11巻　第１号	◎石井好二郎　松生香里　福嶋利浩　和田光代　豊岡示朗	P. 42-48
マラソン競技記録と平均マラソンスピードでの酸素摂取量，固定血中乳酸濃度の関係	共	平成12年7月	大阪体育大学紀要 第31巻	◎豊岡示朗　足立哲司　宮原清彰　松生香里　福嶋利浩　鈴木従道	P. 27-38
男子長距離ランナーのOBLAスピード推定簡便法	共	平成13年7月	大阪体育大学紀要 第32巻	◎松生香里　福嶋利浩　和田光代　豊岡示朗	P. 33-39
男子長距離ランナーの5000m競技記録の差異を決定する生理学的要因	共	平成14年3月	陸上競技紀要 第15巻	◎松生香里　福嶋利浩　和田光代　豊岡示朗	P. 48-56
中年女性のエネルギー代謝に及ぼすウォーキングスピードの影響	共	平成14年8月	体力科学 第51巻　第4号	◎足立博子　足立哲司　豊岡示朗	P. 385-392
マラソン競技レベルの決定因子	共	平成15年3月	陸上競技紀要 第16巻	◎足立博子　足立哲司　豊岡示朗	P. 11-18

マラソンレースにおける視覚障害者ランナーの給水状況と脱水状態の調査	共	平成15年11月	ランニング研究 第15巻　1号	◎福嶋利浩　松生香里 湯川静信　豊岡示朗 矢部京之助	P. 1-10
運動強度と運動時間から見た脂質代謝特性	共	平成16年3月	大阪体育大学紀要 第35巻	◎豊岡示朗 荒松　馨 松生香里	P. 39-50
その他					
高橋尚子，マラソン2時間20分突破の可能性	単	平成11年6月	ランナーズ 第24巻　6月号		P. 39
朝走れば脂肪が燃焼する	単	平成11年7月	ランナーズ 第24巻　7月号		P. 12
ジュニア期の持久力トレーニング	単	平成11年7月	コーチング・クリニック 第13巻　7月号		P. 56-59
最新の走ってやせるタイミング走法	単	平成11年8月	シティランナー 第17巻　8号付録		P. 8-33
トラック記録の向上	単	平成12年1月	産経新聞		
欠点補う練習実る	単	平成12年1月	産経新聞		
体育大学におけるFat Burningに関する授業への取り組み［その2］	共	平成12年3月	日本私学振興共済事業 団補助対象研究報告書	豊岡示朗 編著	
疲労は脳が疲れること	単	平成12年4月	ランナーズ 第25巻6月号		P. 7
大会の歴史示す 「覇者＝長い競技生活」	単	平成13年1月	産経新聞		
じっくり育てたい逸材	単	平成13年1月	産経新聞		
全身持久力の生理学的尺度は現場のトレーニングに生かされているのか？	単	平成13年2月	合同学会大会大阪2000論集		P. 220-225
トレーニング科学とは	単	平成13年3月	OSPAスポーツ大学講義録		P. 97-111
高橋尚子 世界記録樹立の可能性を探る	単	平成13年10月	陸上競技マガジン 第51巻　10号		P. 9-12
データで検証する世界最高レースと2時間17分台への期待	単	平成13年11月	陸上競技マガジン 第51巻　11号		P. 26-29
夢でない2時間16分台	単	平成14年1月	産経新聞		
「勝負」にスピード不可欠	単	平成14年1月	産経新聞		

ウォーキングスピードの違いが体脂肪燃焼におよぼす影響	共	平成14年2月	大和証券ヘルス財団	◎豊岡示朗 松生香里 足立博子	P.136-139
ウォーキングで脂肪を燃やすには	単	平成14年4月	関西ウォーク,山と渓谷社		P.116-117
マラソン中継:解説者としての立場と満足感	単	平成14年8月	ランニング学会会報 第21号		P.6-8
長距離ランナーのトレーニング効果	単	平成14年8月	日本醫事新報 №4087		P.94-95
体育大学におけるFat Burningに対する授業への取り組み［その3］	共	平成14年12月	平成13年度「高等教育研究改革推進経費」報告書	豊岡示朗 編著	
カナダ遠征合宿報告	単	平成14年12月	櫂　第7号		P.43-52
「2時間21分台」支えた練習量	単	平成15年1月	産経新聞		
ラドクリフの大記録誕生の背景	単	平成15年6月	月刊 陸上競技 第37巻　7号		P.88-90
大阪体育大学学生の体力測定	共	平成15年7月	大阪体育大学　紀要 Vol.34	◎岡村浩嗣　浅井正仁 豊岡示朗　中井俊行 淵本隆文　吉田精二	P.107-114
長距離ランナーの貧血とその予防ーフェリチン検査の重要性ー	単	平成15年8月	月刊スポーツメディスン 8月号		P.11-15
女子マラソン世界最高記録をマークしたラドクリフのトレーニング	単	平成15年9月	ランニング学会会報　23号		P.1
アテネの「金」へ必須条件	単	平成16年1月	産経新聞		
後半5キロ「15分台」世界への資質	単	平成16年1月	産経新聞		
「エネルギー切れのメカニズム」高橋尚子選手のケースをもとに	単	平成16年1月	月刊 陸上競技 第38巻　1号		P.26-28
ユニバーシアード テグ（韓国）大会レポート	単	平成16年1月	櫂　第8号		P.18-22

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和46年～現在に至る	日本生理学会，日本体力医学会，日本体育学会会員
昭和60年～現在に至る	関西学生陸上競技連盟評議員
昭和61年１月～現在に至る	大阪国際女子マラソン，テレビ解説者
昭和62年３月～現在に至る	名古屋国際女子マラソン，ラジオ解説者
昭和63年４月～現在に至る	ランニング学会理事
平成３年４月～現在に至る	日本体力医学会評議員

平成５年４月～現在に至る	大阪体育協会スポーツ医・科学委員
平成５年４月～現在に至る	日本運動生理学会会員
平成６年４月～現在に至る	大阪体育学会評議員
平成13年９月～現在に至る	日本肥満学会会員
平成14年４月～現在に至る	ランニング学会理事長
平成14年４月～現在に至る	日本陸上競技連盟企画情報部員
〈その他〉	
平成12年２月～現在に至る	大阪体育大学公開講座，くまとりロードレース攻略法を主宰

2　専任教員の教育・研究実績（芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員）

（表21）

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	教　授	氏名	豊岡　示朗

展覧会・演奏会・競技会等の名称	場　所	開催日時	発表・展示等の内容等			
			《コーチング》			
第71回 日本学生陸上対抗選手権	国 立	2002.9.8	女子 5,000m	３位	16'16"39	堀岡 智子
第72回 日本学生陸上対抗選手権	横 浜	2003.7.5	女子10,000m	２位	32'33"66	堀岡 智子
第22回 ユニバーシヤード	テグ（韓国）	2003.8.25 2003.8.29	女子10,000m 女子 5,000m	５位 ８位	34'12"37 16'22"17	堀岡 智子 堀岡 智子
第81回 関西学生陸上対抗選手権	長 居	2004.5.20～23	女子 800m 女子 1,500m 女子 5,000m 女子10,000m	優勝 優勝 優勝 優勝	2'10"77 4'26"28 15'47"54 32'22"08	山下 沙織 山下 沙織 堀岡 智子 堀岡 智子
第88回 日本陸上競技選手権	布 勢	2004.6.6	女子 800m	２位	2'06"62	山下 沙織
第73回 日本学生陸上競技対抗選手権	国 立	2004.7.3～4	女子 800m 女子 5,000m 女子10,000m	３位 優勝 優勝	2'06"80 16'00"98 32'29"33	山下 沙織 堀岡 智子 堀岡 智子
第59回 国民体育大会	熊 谷	2004.10.25	女子 5,000m	３位	15'35"31	堀岡 智子

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	教　授	氏名	中大路　哲	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

I　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成15年4月～	特別活動指導論 バスケットボールなど授業評価を実施
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等	平成14年7月 平成16年6月	OSPAスポーツ大学で、コーチング指導論の特別講義
4　その他教育活動上特記すべき事項	平成11年2月	兵庫県 C級スポーツ指導員養成講習会　講師

II　研究活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

III　学会等および社会における主な活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和49年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和52年４月～現在に至る	日本学生バスケットボール連盟理事　強化委員
昭和55年４月～現在に至る	日本体育協会公認スポーツ指導者　バスケットボールＢ級コーチ

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	林　信恵	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 課題のパフォーマンスにおける視聴覚的フィードバックの効果について	2003年4月～7月	各自が設定した課題について調査し、資料作成して8～10分のパフォーマンスを行う。内容、言語表現、非言語表現、資料作成等、ＶＴＲ撮影によって本人にフィードバックする。それを自己分析して他者の評価と比較する。
2　作成した教科書、教材、参考書 「実践!踊る心こころ　踊るからだ　創作ダンスの指導」ＣＤ－ＲＯＭ添付（レイシスソフトウエアーサービス発行）	2004年4月1日	やさしい運動学習から応用発展、創作法の開発へと具体的な実践例をＣＤ－ＲＯＭに収録し、学生が興味をもってダンス学習に取り組めるよう工夫した。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 ・女性スポーツセミナー・大阪「これからの学校体育の役割とは」 ・大阪女子体育連盟主催 体育指導者講習会で指導	2000年6月10日 2004年5月22日	生涯にわたる女性スポーツ環境を見据え今後の学校体育のあり方はどうなければならないかについてのシンポジュームで発表 女子体育指導者講習会で「からだーはずむ」の作品発表およびワークショップ助言および指導
4　その他教育活動上特記すべき事項 全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）コンクール部門参加指導	2001年8月 2002年8月 2003年8月	神戸市長賞受賞 奨励賞受賞 特別賞受賞

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
ダンス授業における教師行動に関する研究;ダンス授業と他の体育授業との比較	共著	2000年12月	大阪体育大学紀要　第31巻	伊藤美智子 岡沢祥訓 北島順子	P. 9-17
生徒によるダンス授業評価の試み	共著	2000年12月	大阪体育大学紀要　第31巻	伊藤美智子	P. 1-7
ダンス授業における楽しさを規定する要因	共著	2000年12月	大阪体育大学紀要　第31巻	北島順子	P. 77-86

スポーツシーンにおける言語的身体的嫌がらせの実態―セクシャルハラスメントに関する予備調査―	共著	2002年12月	大阪体育大学紀要　第33巻	倉地博美	P. 9-17
教師行動と生徒による授業評価からみたダンス授業の検討	共著	2003年7月	体育学研究　第47巻 第4号	伊藤美智子	P. 333-346
創作ダンス授業を対象とした運動有能感について（その１）－高校生女子を対象として－	共著	2003年3月	大阪体育学研究　第41巻	伊藤美智子	P. 1-6
その他					
表現するからだ育て	単著	2001年1月	女子体育　第43巻 第1号		P. 20-23

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

昭和48年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和53年～現在に至る	日本舞踊学会会員
平成元年～現在に至る	大阪女子体育連盟理事
平成11, 12, 13, 15, 16年	全日本高校・大学ダンスフェスティバル（神戸）審査員
平成５年～現在に至る	大阪女子体育連盟副会長
平成８年～現在に至る	国際パフォーマンス教育協会会員
平成12年～現在に至る	ダンスセラピー協会会員
平成14年～現在に至る	ダンスセラピー協会理事
平成16年～現在に至る	熊取町図書館運営委員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	廣岡　昌子	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 英語の能力別クラス分けの実施	平成13年4月1日より	学生の英語力は本学入学時に、中学・高等学校の６年間の学業による能力差が非常に高い。よって能力別にクラスを分け、レベルに応じた授業を導入した。学生の評価も心理面、実力向上面で良い。
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4　その他教育活動上特記すべき事項 教養演習の授業に於ける「ナショナル・トラスト講座」の導入	毎年　前期終了時	教養演習に於て環境教育の一環として、前期の最後の授業又は、試験中にナショナル・トラスト協会の理事を招いて「英国及び日本のナショナル・トラストについて」講義して頂き、日本の環境保全について学生に訴え、考えてもらう機会を毎年設ける

II　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
英国の方言詩について —William BarnesとThomas Hardyを中心にした一考察—	単著	2003年3月	大阪体育大学紀要　第34巻		P. 11-40
その他					
関西大学大学院文学部英文学科博士後期課程に於て織田稔教授の元で英国詩研究		2001年4月～2002年3月			

III　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

昭和48年４月～現在に至る	日本英文学会会員　中国四国支部に所属
昭和48年４月～現在に至る	日本中世英語英文学会
平成３年４月～現在に至る	交野市図書館等建設検討委員会委員
平成６年４月～現在に至る	交野市文化財事業団評議員（平成 13 年より同 理事）
平成８年５月～平成16年７月	交野市女性政策懇話会委員
平成14年３月	関西大学英語学会にて「英国の方言詩について」発表

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	淵本　隆文	（有・無）

I　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		

3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
スポーツバイオメカニクス	共著	平成12年9月	朝倉書店、東京	深代千之　桜井伸二 平野裕一　阿江通良　編著	p. 95-98
論文					
高齢者の歩行能力に関する体力的・動作学的研究（第一報）～自由歩行における足運びについて～	共著	平成11年	体育科学 第27巻	◎淵本隆文 長谷川　淳 金子公宥	p. 109-118
高齢者の歩行能力に関する体力的・動作学的研究（第二報）～膝伸展，足底屈の筋力と歩行能力の関係～	共著	平成11年	体育科学 第28巻	◎淵本隆文 加藤浩人 金子公宥	p. 108-115
高齢者の歩行動作:足の運びに注目して	共著	平成11年4月	バイオメカニクス研究概論、第14回日本バイオメカニクス学会論文編集委員会	◎長谷川淳　淵本隆文 木村みさか　金子公宥	p. 127-131
短距離疾走における下肢筋群の筋長変化について	共著	平成11年4月	バイオメカニクス研究概論、第14回日本バイオメカニクス学会論文編集委員会	◎馬場崇豪　田邊智 淵本隆文　伊藤章	p. 213-217
視覚および筋感覚情報への負荷が歩行パターンに及ぼす影響	共著	平成11年7月	大阪体育大学紀要 第30巻	◎荒木雅信　淵本隆文 崔　聖兎　西野　明	p. 139-150
高齢者の歩行能力に関する体力的・動作学的研究（第3報）～縦断的分析による歩行能力の加齢変化～	共著	平成12年3月	体育科学　第29巻	◎淵本隆文 松岡有季 金子公宥	p. 124-132
平地走における力学的エネルギーの計算法と種目差について	共著	平成12年7月	大阪体育大学紀要 第31巻	◎嶋野浩一朗　田邊　智 淵本隆文　金子公宥	p. 19-25
人力飛行機の女性パイロットにおける体力トレーニング手法	共著	平成12年12月	第６回スカイスポーツシンポジウム講演集	◎隅川真由美　堀琴乃 吉川俊明　淵本隆文	p. 43-46

3次元動作解析による超一流大学野球投手のピッチングに関する事例的研究	共著	平成14年7月	大阪体育大学紀要第33巻	◎村上雅俊　淵本隆文 金子公宥	p. 1-8
高齢者の歩行運動における振子モデルのエネルギー変換効率	共著	平成15年10月	体力科学　第52巻　第5号	◎田中ひかる　淵本隆文 金子公宥　木村みさか	p. 621-630
その他					
歩行とランニングにおけるエネルギー変換	単著	平成12年1月	体育の科学　第50巻 第1号		p. 20-24
250mトラックにおける自転走行中のパワーと速度変化	共著	平成12年3月	平成11年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告No. Ⅱ競技種目別競技力向上に関する研究 Vol. 1	◎淵本隆文 形本静夫 小林裕幸	p. 143-151
オリンピックスプリントレースにおける第一走者の重要性に関する研究	共著	平成12年3月	平成11年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告No. Ⅱ競技種目別競技力向上に関する研究 Vol. 1	◎形本静夫 淵本隆文 小林裕幸	p. 151-153
高齢者の歩行能力を評価することの意義～バイオメカニクス的視点から～	単著	平成12年5月	日本生理人類学会誌 第5巻、第2号		p. 25-30
大阪体育大学学生の体力を測る－平成11年度体力測定の学年別・運動クラブ別集計結果－	共著	平成12年7月	大阪体育大学紀要、第31巻	◎淵本隆文　上　勝也 中井俊行　鶴池政明 木谷法子　滝瀬定文 吉田精二　川島康弘	p. 107-116
大阪体育大学学生の体力を測る－平成12年度体力測定の学年別・運動クラブ別集計結果－	共著	平成13年7月	大阪体育大学紀要、第32巻	◎川島康弘　滝瀬定文 吉田精二　淵本隆文 中井俊行　木谷法子 豊岡示朗	p. 127-135
大阪体育大学学生の体力を測る－平成13年度体力測定の学年別・運動所属別集計結果－	共著	平成14年7月	大阪体育大学紀要、第33巻	◎吉田精二　淵本隆文 中井俊行　浅井正仁 岡村浩嗣　滝瀬定文 川島康弘　木谷法子 豊岡示朗	p. 47-55
大阪体育大学学生の体力を測る－平成14年度体力測定の学年別・運動所属別集計結果－	共著	平成15年3月	大阪体育大学紀要、第34巻	◎岡村浩嗣　浅井正仁 豊岡示朗　中井俊行 淵本隆文　吉田精二	p. 107-114
自転車競技における短距離選手の走行速度とパワー	単著	平成16年3月	バイオメカニクス研究 第8巻　第1号		p. 52-55

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

昭和54年4月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和54年4月～現在に至る	日本体力医学会会員
昭和54年4月～現在に至る	日本バイオメカニクス学会会員
昭和56年4月～現在に至る	国際バイオメカニクス学会会員

平成５年4月～現在に至る	日本運動生理学会　評議員
平成10年4月～現在に至る	日本体力医学会　評議員
平成10年4月～現在に至る	大阪体育学会　理事
平成11年4月～現在に至る	日本自転車競技連盟選手強化以下学部会部員
平成11年4月～平成14年3月	日本オリンピック委員会トレーニングドクター（自転車競技）
平成12年3月	全日本自転車競技指導者講習会　講師
平成12年4月～現在に至る	OSPAスポーツ大学（大阪市）　講師
平成12年4月～7月	第8回日本運動生理学会／第16回日本バイオメカニクス学会合同大会　組織委員、実行委員
平成13年11月～現在に至る	日本体育協会Ｂ級スポーツ指導員養成講習会　講師
平成15年4月～現在に至る	日本オリンピック委員会強化スタッフ（自転車競技、医・科学スタッフ）

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	矢部　京之助	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 体育学演習（Ⅰ、Ⅱ）について２年一貫教育を試行した	平成13年4月1日	体育学演習Ⅰでは、身体機能の測定技術を修得する実験実習を主体とし、体育学演習Ⅱでは各人の企画に基づく研究の遂行、論文作成の学習、学期末に発表会を開催した
2　作成した教科書、教材、参考書 入門　運動神経整理学～ヒトの運動の巧みさを探る～（編著）を出版した	平成15年12月	本書は、科研費報告書を基盤とする運動神経生理学に関する入門書である
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項 ・フェイス トゥ フェイス教育	平成13年4月	学生の創造性、積極性を育み、教員とのコミュニケーションを図る
・入力型学習から出力型学習	平成14年1月	講義を受講する受動的学習から、自発的な研究企画・実践・発表する能動的学習を修得させる

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
脳・神経の働き	単著	1999年10月	スポーツ医科学 杏林書院	中野昭一　編	P. 76-95
スポーツ医学キーワード	単著	1999年12月	臨床スポーツ医学・臨時増刊号 文光堂		
疲労によって体力は向上する	単著	2000年1月	スポーツ科学・入門、PART2スポーツとからだの最新理論 宝島社	別冊宝島編集部編	P. 153-168
第３編からだと障害、第３章からだの仕組	単著	2000年9月	最新版障害者のスポーツ、指導の手引き ぎょうせい	(財)日本障害者スポーツ協会編	P. 165-219
Ⅷ 対象者別にみた身体活動、障害者と身体活動	単著	2000年9月	身体活動と生活習慣病、日本臨床58巻・増刊号（通巻769号） 日本臨床社		P. 307-311
障害者のためのハロウイック水泳法	単著	2000年9月	文理閣	英国水泳療法協会著（監訳）	
Trainability found in people with disability.	単著	2001年	Proceedings of the 6th International Congress of Asian Socity for Adapted Physical Education and Exercise. Rung Wei Printing Co.Ltd., Taipei	Lin,M.H.(Ed)	P. 4-10
Kinematic analysis of the 100m sprint start of ice sledge racing at the 1998 Winter Paralympic Games in Nagano	共著	2001年	New Horizons in Sport for Athletes with a Disability, Vol.1. Proceedings of the International VISTA `99 Conference. Meyer & Meyer Sport., Aachen,	Yabe, K.　Y. Ikegami S. Sakurai　H.Nunome W.Doyo　T.Terashima Doll-Tepper, G., M. Kroner W. Sonnenschein (Eds)	P. 121-126
１部 随意運動の基本的な神経制御機構とその構造、1章随意動作の発現機構、3部障害者・高齢者の随意動作、9章障害者の運動機能と体力特性、	単著	2003年12月	入門 運動神経生理学～ヒトの運動の巧みさを探る～ 市村出版	矢部京之助 大築立志 笠井達哉　編	P. 3-29 P. 89-101
第1編地域社会と障害者、第2章スポーツを楽しむために、第３編からだと障害、第３章からだの仕組	単著	2004年2月	障害者のスポーツ、指導の手引ぎょうせい（第２次改訂版）	(財)日本障害者スポーツ協会編	P. 22-30 P. 155-209

論文					
Bone mineral density differences between paraplegic and quadriplegic patients: a crosssectional study	共著	1999年	Spinal Cord,Vol37	Tsuzuku,S. Y.Ikegami K.Yabe	P. 358-361
Comparison of shot put motion among male athletes with various competing level	共著	1999年3月	総合保健体育科学　23巻 第1号	Sakurai,S.　Y.Ikegami K.Yabe　A.Wakayama I.Hashimoto	P. 49-54
障害者の体力評価（第２報） ー背損を対象として持久力評価方法の検討ー	共著	1999年6月	医療体育　第18巻 第1号	伊佐地隆　矢部京之助 尾鷲　誠　塚越和己 増田和茂　近藤照彦 池田恭敏	P. 19-24
ゴルフスイングにおける腕とクラブの関係	共著	1999年	ゴルフの科学　第2巻 第3号	池上久子　島岡清 池上康男　矢部京之助 岡本敦　坪田暢充	P. 52-62
Mechanomyographic investigationof muscle contractile properties in preadolescent boys	共著	2000年	Electromyogr. Clin. Neurophysiol., Vol. 40	Nonaka,H.　K.Mita K.Akataki　M.Watakabe K.Yabe	P. 287-293
Age-related changes in gait velocity and leg extension power in middle-aged and elderly people	共著	2000年	J. Epidemiol., Vol. 10, No. 1	Kozakai,R.　S.Tsuzuku K.Yabe　F.Ando N.Niino　H.Shimokata	P. 77-81
随意動作の神経系と筋機能について－動作前silent periodを中心にしてー	単著	2000年	日本体育大学体育研究所雑誌 第 25 巻		P. 315-324
100mアイススレッジスピードレースにおけるスタート動作の三次元映像解析　—1998年長野冬季パラリンピック大会のレース分析—	共著	2000年3月	総合保健体育科学 第23巻 第1号	道用亘　布目寛幸 桜井伸二　池上康男 矢部京之助	P. 23-27
骨格筋における筋崩壊後の活動量の変化と筋線維タイプ移行	共著	2000年3月	総合保健体育科学 第23巻 第1号	小坂井留美　小笠原仁美 西沢富江　平野朋枝 春日規克　矢部京之助	P. 49-54
Automatic postural response systems in individuals with congenital total blindness	共著	2001年	Gait and Posture, Vol. 14	Nakata,H. K.Yabe	P. 36-43
Effects of high versus low-intensity resistance training on bone mineral density in young males	共著	2001年	Calcif. Tissue Int.,Vol.68	Tsuzuku,S.　H.Shimokata, Y.Ikegami　K.Yabe R.D.Wasnich	P. 342-347
現代人の生活リズム	単著	2001年1月	教育と医学　第49巻 第1号		P. 14-21

加齢に伴う歩行動作の変化	共著	2001年	バイオメカニクス 第5巻 第3号	小坂井留美 下方浩史 矢部京之助	P. 162-167
足関節テーピングおよびブレースの装着が運動能力に及ぼす影響	共著	2001年	関西臨床スポーツ　第11巻	島典広 廣橋賢次 矢部京之助	P. 5-6
Cortical and spinal motor excitability during the premovement EMG silent period prior to rapid voluntary movement in humans	共著	2002年	Brain Res.,Vol.949	Aoki,H. R.Tsukahara K.Yabe	P. 178-187
Age-related changes in the interactive mobility of the hip and knee joints: a geometrical analysis	共著	2002年	Gait and Posture,Vol.15	Nonaka,H.　K.Mita, M.Wakatabe　K.Akataki, N.Suzuki　T.Okuwa, K.Yabe	P. 236-243
A kinematic study of the upper-limb motion of wheelchair basketball shooting in tetraplegic adults	共著	2002年	J.Rehabil.Res.Dev.,Vol.39, No.1	Nunome,H.　W.Doyo S.Sakurai　Y.Ikegami K.Yabe	P. 63-71
Effects of physical activity on physical fitness and motor performance in persons with disabilities	単著	2003年	障害者スポーツ科学(第1巻1号)		P. 2-15
Age comparison of H-reflex modulation with the Jendrassik maneuver and postural complexity	共著	2003年	Clin. Neurophysiol.,Vol.114	Tsuruike,M.　D.M.Koceje, K.Yabe　N.Shima	P. 945-953
マラソンレースにおける視覚障害者ランナーの給水状況と脱水状態の調査～第12回福知山マラソン・第3回全日本盲人マラソン選手権～	共著	2003年	ランニング学研究 第15巻 第1号	福嶋利浩　松生香里 湯川静信　豊岡示朗 矢部京之助	P. 1-9
痴呆性老人のキャンプ体験における自己表現に及ぼす効用	共著	2003年9月	キャンプ研究　第7巻 第1号	田中利明 石田易司 矢部京之助	P. 3-8
その他					
健康なエイジング	単著	1999年6月	月刊健康（第494号）		P. 16-17

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

学 会 等	
昭和38年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和39年４月～現在に至る	日本体力医学会員

昭和41年４月～現在に至る	日本生理学会会員
昭和47年４月～現在に至る	日本臨床神経生理（旧脳波・筋電図）学会会員
昭和50年４月～現在に至る	国際バイオメカニクス学会会員
昭和54年４月～現在に至る	日本バイオメカニクス学会会員
昭和60年４月～現在に至る	日本障害者体育・スポーツ研究会会員
昭和61年４月～現在に至る	アジア障害者体育・スポーツ学会（ASAPE）会員
平成２年４月～現在に至る	国際障害者ヘルスフィットネス連盟（IFAPA）会員
平成３年４月～平成15年３月	日本特殊教育学会会員
平成３年11月～現在に至る	日本障害者スポーツ（旧車椅子スポーツ）研究会会員
平成５年４月～現在に至る	日本リハビリテーション医学会会員
平成５年４月～現在に至る	日本運動生理学会会員
平成６年４月～現在に至る	日本ハロウイック水泳法協会会員
平成７年４月～現在に至る	日本運動療法研究会会員
役　員	
平成３年１月～平成11年12月	国際障害者ヘルスフィットネス連盟（IFAPA）理事
平成３年11月～現在に至る	日本障害者スポーツ（旧車椅子スポーツ）研究会理事
平成５年４月～現在に至る	日本運動生理学理事
平成６年５月～現在に至る	日本バイオメカニクス学会理事
平成６年４月～現在に至る	日本ハロウイック水泳法協会会長
平成９年４月～平成16年３月	日本運動療法研究会理事
平成12年４月～平成14年３月	東海体育学会理事長
平成14年４月～現在に至る	（財）日本障害者スポーツ協会理事・科学委員長
平成15年４月～現在に至る	（社）日本体育学会副会長

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	教　授	山崎　武	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成12～14年 平成15～16年	個人的に「学生による授業評価」を行い、授業に生かしている。 ＦＤ委員会として、全学による授業評価を行っている。 教育内容…教科教育法、教材研究、保健の授業研究（演習Ⅰ・Ⅱ）、 実技（ハンドボール）
2　作成した教科書、教材、参考書	平成11～16年 平成13～15年 ～16年	「保健の学習指導案」製本…（参考書として） 演習担当学生の「論作文集」 〔教材〕― 毎時間講義に「ハンドアウト」プリント作成し、講義を進めている。 〔教具〕― ハンドアウトに記入する板書用プリント

3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		な　し
4　その他教育活動上特記すべき事項		な　し

II　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

III　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

昭和43年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和43年～平成11年	日本体力医学会会員
昭和45年～現在に至る	大阪ハンドボール協会理事（平成３年～常務理事）
昭和47年～現在に至る	関西学生ハンドボール連盟理事（昭和61年から副理事長、平成５、６年理事長）

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助教授	川島　康弘	（有・(無)）

I　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 授業評価の実施	平成15年7月 平成16年7月	担当授業（水泳、体力トレーニング論、同実習）の授業評価を行うと共にその評価に対するコメントを学部長に提出した
2　作成した教科書、教材、参考書 体育方法実習　水泳Ｉ 水泳実習テキスト	平成13年～平成16年 平成11年～平成16年	㈱大同印刷所にて教材を作成し、授業に使用している ㈱大同印刷所にて教材を作成し、授業に使用している
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
Effects of Exercise on the Vascular Diseases of Hyperlipidemic Rats	共著	平成11年３月	柔道整復・接骨医学７	S.Takise　Y.Kawashima M.Masuhara　M.Iwata M.Kimura	P. 10
大阪体育大学学生の体力を測る	共著	平成13年７月	大阪体育大学紀要 32	川島康弘　瀧瀬定文 吉田精二　淵本隆文 中井俊行　木谷法子 豊岡示朗	P. 9
大阪体育大学学生の体力を測る	共著	平成14年７月	大阪体育大学紀要 33	吉田精二　淵本隆文 中井俊行　浅井正仁 岡村浩嗣　瀧瀬定文 川島康弘　木谷法子 豊岡示朗	P. 9
大学競泳チームにおける心理的サポートの実践	共著	平成15年３月	大阪体育大学紀要 34	土屋裕睦 川島康弘 瀧瀬定文	P. 12
その他					
‘９８年　熱き戦い	単著	平成11年２月	櫂　第３号（大阪体育大学）		P. 6
記録短縮を目指して	共著	平成14年２月	櫂　第６号（大阪体育大学）		P. 6

III　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

平成２年７月～現在に至る	日本体力医学会会員
平成３年２月～現在に至る	日本体育学会会員
平成４年９月～現在に至る	日本運動生理学会会員
平成９年～現在に至る	日本バイオメカニクス学会会員
平成10年～現在に至る	日本水泳・水中運動学会会員

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	助教授	氏名	神﨑　浩	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
剣道（実技）	平成11年～	剣道の伝統性を授業生に体験させるために「剣道形」を取り入れた。
運動学	平成11年～	パワーポイントを用いて運動シーンを視覚的に理解させる試みを行なっている。
2　作成した教科書、教材、参考書		
運動学・運動学概論講義ノート	平成15年～	運動学及び運動学概論で取り扱う内容は主にパワーポイントによって視覚に訴えながら展開するが、その補足分を含めた授業内容を講義ノートとしてまとめた。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
日本の伝統文化としての剣道指導	平成15年12月20日	広島市教育委員会からの要請で、中高生の剣道指導のあり方を講演・実技指導した。
日本剣道形の指導	平成16年3月18日	徳島県学生剣道連盟からの依頼で、剣道形の学習をどのように展開するかについて講習を行なった。
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
日本剣道形に見られる脳波の研究	単著	2002年6月	スキージャーナル 剣道日本　27-6		2
特集「乗る」その気分と技法	単著	2002年6月	体育とスポーツ出版社 剣道時代　29-6		1
試合観戦の技術	単著	2003年1月	体育とスポーツ出版社 剣道時代　30-1		2
右手の技術	単著	2003年12月	体育とスポーツ出版社 剣道時代　30-12		2
特集「攻めの剣道」	単著	2003年12月	スキージャーナル 剣道日本　28-12		5

論文					
柔道の国際化に関する一考察	共著	2002年	大阪体育大学紀要（33）2002	平野亮策 松田基子	9
剣道選手の対峙場面における心理作用機序に関する実験的研究	共著	2003年	大阪武道学研究　12-1	荒木雅信	8

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和60年４月～現在に至る	大阪市立修道館師範
昭和60年４月～現在に至る	日本武道学会会員
平成７年４月～現在に至る	大阪武道学会理事
平成14年４月～現在に至る	日本武道学会評議院

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助教授	木村　準	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
その他					
バスケットボール ベアーズカップ（中学生の部）	単	平成12年 2月	大阪体育大学コーチング系 教育研究誌　　櫂　第４号		P. 95-97

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)	
昭和59年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和59年４月～現在に至る	関西学生バスケット連盟理事。強化部強化委員
平成８年４月～現在に至る	日本バスケットボール協会，日本バスケットボールコミッティー会員
平成12年３月	和歌山県教育委員会中学・高等学校指導者講習会（バスケットボール）講師

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助教授	工藤　俊郎	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)		
教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 大阪國學院通信教育部学習指導書「心理学」	平成15年4月	心理学における、学習、パーソナリティ、適応およびカウンセリング活動の領域に関する通信教育講座テキスト
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)					
著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
教育心理学のエッセンス	共著	平成13年4月	八千代出版	◎木村忠雄編著　西本　望 工藤俊郎　山本昌輝 森茂起　吉岡昌紀	第３章 学習（P71-130）
基礎から学ぶ教育心理学	共著	平成16年3月	八千代出版	◎工藤俊郎　高井直美 上田恵津子　菅原康二	第１章（P.1-12） 第３章（P.69-134）

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)	
昭和59年４月～現在に至る	日本心理学会会員
昭和63年４月～現在に至る	日本認知科学会会員

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	助教授	氏名	長尾　佳代子	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

I　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
「国語表現法」授業での作文実習の強化	平成 15 年度前後期	データ読み取り管理ソフト DYNEYE で活用可能な原稿用紙フォーマットを作成し、毎回の授業で作文実習を添削指導した。「国語表現法」では就職等を目的に実際の作文力を養成したいと希望する学生が多く、これに応えるためには講義だけでなく演習を必要としたが、大人数一斉授業で作文実習を導入することは難しかった。しかし、授業で書かせた作文を画像データとして保存し、これを使って出欠管理・成績集計の作業を合理化したので、毎回の添削指導が可能になった。
「日本文学」授業での小レポート作成指導	平成 15 年度後期	毎回の授業で課題回答型の小レポートを課して授業の理解度を確認すると同時に、これによって学生の質問、討論を促した。この小レポートは前述の DYNEYE で管理して成績評価の参考にした。
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
庚申会とウパヴァーサ	単著	1999. 4. 25	説話伝承学会『説話伝承学』7 号		pp. 116-130
漢訳仏典における『倶生神』の解釈	単著	1999. 12. 20	パーリ学仏教文化学会『パーリ学仏教文化学』13 号		pp. 1-13
倶生神の展開	単著	2000. 3. 10	九州龍谷学会『仏教文化』10 号		pp. 1-16
日本に伝えられた倶生神(くしょうじん)の前史－インドに見られる祖形と中国での展開－	単著	2001. 7. 10	桃山学院大学国際文化学会『国際文化論集』24 号		pp. 168-169

現代文指導における情報多様化の試み －パワーポイントを用いた文学作品紹介－	単著	2002.8.27	高等専門学校情報処理研究会『情報処理教育研究発表会論文集』22号		pp.115-118
芥川龍之介 『蜘蛛の糸』原作の主題	単著	2003.3.31	仏教文学会『仏教文学』27号		pp.161-172
その他					
日本に伝えられたる倶生神の前史－インドに見られる祖形と中国での展開－（口頭発表）	単著	2000.11.19	桃山学院大学国際文化学会、人間科学会・英文学会合同研究発表会		
札を抱えた倶生神（口頭発表）	単著	2000.1.21	共同研究会「民族間関係・移動・文化再編」		
芥川龍之介『蜘蛛の糸』で無視された原作の主題（口頭発表）	単著	2002.6.2	仏教文学会		
現代文指導における情報多様化の試み（口頭発表）	単著	2002.8.27	高等専門学校情報処理教育研究会		
芥川龍之介 『蜘蛛の糸』原作の主題	単著	2003.3.31	仏教文学会 『仏教文学』　27号		pp.161-172

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

(所属学会)

説話伝承学会、仏教文学会、パーリ学仏教文化学会、早稲田大学東洋哲学会、九州龍谷学会、日本仏教綜合研究会

(学会活動)

平成14年４月	説話伝承学会大会第２分会司会
平成14年４月	説話伝承学会大会第２分会司会
平成15年６月	仏教文学会大会第２分会司会

(社会活動)

平成14年８月	文部科学省予算による舞鶴高専公開講座「英語学習の動機・興味を高める工夫」共催
平成14年11月	文部科学省留学生交流関係予算による舞鶴高専学生と地域管弦楽団の合同演奏会　「小さな秋のコンサート」企画・合唱指導

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助教授	平野　亮策	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 授業評価の実施	平成15年7月 平成16年7月	担当授業（柔道Ⅱ Ⅲ）の授業評価の実施

2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
柔道の国際化に関する一考察	共著	平成14年3月	大阪体育大学紀要　33	平野亮策 神崎　浩 松田基子	P. 19～27
その他					
JUDOと柔道―その３	単著	平成12年2月	櫂　第４号（大阪体育大学）		P. 22
JUDOと柔道―その４	単著	平成13年2月	櫂　第５号（大阪体育大学）		P. 38
柔道とJUDO―その５	単著	平成14年12月	櫂　第６号（大阪体育大学）		P. 21
柔道とJUDO―その６	単著	平成16年2月	櫂　第８号（大阪体育大学）		P. 13
私のフランス柔道指導	単著	平成15年4月	第26号　大阪の柔道		P. 1

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

平成２年４月～現在に至る	関西学生柔道連盟理事・同強化委員
平成４年４月～現在に至る	大阪府柔道連盟強化委員
平成７年４月～現在に至る	大阪府柔道連盟審判員
平成８年～現在に至る	大阪学生柔道連盟常任理事
平成15年４月～現在に至る	大阪府柔道連盟評議委員・審議委員
平成12年３月８日～３月19日	(社)全日本学生柔道連盟ドイツ・フランス海外研究遠征監督

所属	大阪体育大学 体育学部　体育学科	職名	助教授	氏名	右山　忠史	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

I　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本教育学会第62回大会で「共苦について」というタイトルでの発表と司会	平成15年8月	現代の生徒指導で大切なことの一つは、生徒の悩み、苦しみを共にすることではないかという教師論の観点からの学会発表と教育哲学分科会での司会
4　その他教育活動上特記すべき事項 21st World Congress of Philosophyで「Nihilism and Education」というタイトルでの学会発表	平成15年8月	トルコ、イスタンブール大学でニヒリズムに陥っている現代の状況を克服する方法として、教育はいかなる役割を果たすべきか、についての英語についての英語による学会発表

II　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
道徳教育の根本	単著	1999年3月	大阪体育大学紀要　第30巻		P.45-53
What is Moral Behavior?	単著	2000年3月	大阪体育大学紀要　第31巻		P.55-57
教師論に関する一研究 ―教師の資質とは何か―	単著	2001年3月	大阪体育大学紀要　第32巻		P.51-57
大阪体育大学学生にみる学ぶ意志	単著	2002年3月	大阪体育大学紀要　第33巻		P.77-82

教育方法の原理に関する一研究 —「みなす」についての考察—	単著	2004年3月	大阪体育大学紀要　第35巻		P.51-58
その他					
The Problem of Existential Vacuum and Education	単著	1999年7月	Mosaic（国際道徳学会）於 オランダ,ユトレヒト大学での学会発表		
What is Moral Behavior?	単著	2000年7月	Mosaic（国際道徳学会）University of Glasgow,Scotland		
Education for Conscience	単著	2001年7月～8月	The Second International Conference Children's Spirituality University of Haifa,Israel		
Nihilism and Education	単著	2003年8月	21st World Congress of Philosophy		
共苦について	単著	2003年8月	日本教育学会　第62回大会		

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)	
平成２年４月～現在に至る	教育哲学会会員
平成３年４月～現在に至る	日本教育学会会員
平成４年４月～現在に至る	日本道徳教育学会会員
平成５年４月～現在に至る	実存思想協会会員
平成５年９月～現在に至る	日本宗教学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	講　師	中井　俊行	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)		
教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		

2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
大阪体育大学学生の体力を測る－平成15年度体力測定の学年別・運動所属別集計結果－	共著	平成16年3月	大阪体育大学 紀要　第35巻	中井俊行　岡村浩嗣 平野亮策　豊岡示朗	P. 173-179

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

昭和61年４月～平成15年3月	大阪体育大学ラグビー部コーチ
平成元年４月～現在に至る	日本体育学会
平成７年４月～現在に至る	関西ラグビーフットボール協会コーチソサエティ委員
平成13年４月～現在に至る	関西大学ラグビーフットボールリーグ委員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助　手	髙本　恵美	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		

4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去５年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
中距離ランナーの科学的トレーニング（翻訳）	共著	2001年7月	大修館書店	征矢英昭　尾縣貢監訳	191頁～232頁
全米陸上競技連盟コーチングマニュアル（翻訳）	共著	2004年3月	出版芸術社・陸上競技社	澤村博　沢木啓祐 尾縣貢　青山清英監訳	232頁～241頁
論文					
Shoutがプライオメトリックジャンプに及ぼす影響	共著	1999年9年	陸上競技研究（第38号）	高本恵美　尾縣貢 大山卞圭悟　高松潤二 勝田茂	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
一流 400mランナーにおける体力的特性とレースパターンとの関係	共著	2000年5月	体育学研究（第45巻第3号）	尾縣貢　安井年文 大山卞圭悟　山崎一彦 苅部俊二　高本恵美 伊藤穣　森田正利 関岡康雄	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
下肢関節の等速性筋力とWingate test により測定された無酸素性パワーとの関係	共著	2000年8月	体力科学（第49巻第4号）	尾縣貢 大山卞圭吾 高本恵美	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
国内一流女子七種競技者におけるトレーニング期前後の下肢筋力と筋横断面積の変化	共著	2000年6月	陸上競技研究（第41号）	渡邉信晃　高本恵美 真鍋芳明　久野譜也 尾縣貢	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
オーバーハンドスロー能力改善のための学習プログラム作成：小学校２・３年生を対象として	共著	2001年5月	体育学研究（第46巻第3号）	尾縣貢　高橋健夫 高本恵美　細越淳二 関岡康雄	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
エリート 400m系スプリンターの体力特性：十種競技者との比較	共著	2001年9月	陸上競技研究（第46号）	山崎一彦　尾縣貢 高本恵美　伊藤穣 澤木啓祐	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
棒高跳びの助走におけるポール操作と助走速度勾配の相互関係	共著	2002年12月	陸上競技研究（第47号）	木越清信　遠藤俊典 羽田雄一　高本恵美 真鍋芳明　尾縣貢	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
小学校児童における走，跳および投動作の発達：全学年を対象として	共著	2003年5月	スポーツ教育学研究（第23巻第1号）	高本恵美 出井雄二 尾縣貢	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）

400m走中の下肢関節トルク持続能力と下肢の筋持久性との関係	共著	2003年8月	体力科学（第52巻第4号）	尾縣貢　真鍋芳明 高本恵美　木越清信	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
上肢の無気的作業能が400m走タイムおよび走速度逓減に及ぼす影響	共著	2003年9月	体育学研究（第48巻第5号）	尾縣貢 高本恵美 伊藤新太郎	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
小学校児童の模倣能力と走・跳・投能力および動作との関係	共著	2003年10月	いばらき健康・スポーツ科学（第21号）	高本恵美 出井雄二 尾縣貢	（共同研究につき本人担当部分抽出不可能）
その他					
小学校体育シリーズ陸上運動学研ビデオ（全８巻）		2003年3月	学習研究社	尾縣貢監修　出井雄二 赤津利治　高本恵美指導	
小学校体育シリーズ陸上運動DVDsoft（全４巻）		2003年3月	学習研究社	尾縣貢監修　出井雄二 赤津利治　高本恵美指導	

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

平成11年４月～現在に至る	日本体育学会会員
平成12年４月～現在に至る	日本体力医学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助　手	田原　宏晃	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成14年4月～(非常勤) 平成15年4月～(専　任)	器械運動Ⅰ：器械運動の基本的な「技」の習得を目的とし、マット運動、とび箱、鉄棒、更に女子は平均台運動を行なっている。各種目とも課題を設定し、学生に目標をもたせ授業を展開している。
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項	平成15年4月～	体操競技部のコーチとして、クラブ活動を指導。 関西、西日本、全日本インカレに毎年出場させている。

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
鉄棒の後方宙返りおり系の指導について	単著	平成13年2月	修士論文発表会		

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

平成10年４月～現在に至る	浪商学園　トップスポーツクラブで、ジュニア選手の育成に貢献 関西ジュニア競技大会、西日本ジュニア体操競技大会、全日本ジュニア体操競技大会、全国中学選抜大会に多数の選手を出場させ、顕著な成績を収めた

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　体育学科	助　手	中野　尊志	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項	2001年度8月 2002年度4～5月 2003年度4～5月 9～10月 11月 3月	天皇杯大阪予選優勝・本大会出場（監督） 関西学生サッカー春季１部リーグ８位（監督） 関西学生サッカー春季１部リーグ５位（監督） 関西学生サッカー秋季１部リーグ３位（監督） 全日本大学サッカー選手権大会出場（監督） 関西学生選抜Ａチーム監督

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
2000年のチームづくり	単著	2000年2月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　　櫂　第４号		P. 49-52
「一本」をとれるチームに！	単著	2001年2月	大阪体育大学コーチング系教育研究誌　　櫂　第５号		P. 41-44

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

～現在に至る	日本体育学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学　体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	浅野　幸子	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成11年4月より現在	1-1　英語視聴覚教育：　英語指導の場において学習者の特性に適した教材の利用と指導方法の改善と実践に努めてきた。常に、Aptitude-Task-Treatment Interactionと授業のシステム化の考え方を基本に、学習効果の科学的な測定を実施し、その結果を分析して授業内と方法の改善･向上に努めている。現在は、インターネットやＰＣ関連機器の利用により、さらに豊かな情報を学習者に与えて意味の理解を促すと同時に、学習の効率化を図った授業の実践に試みている。 1-2　様々な外国語教授法による英語教育：　学習者の心理的特性が学習効果に影響を及ぼす重要な要因であるという観点から、Silent Way, Suggestopediaなどの外国語教授法の理論に基づいて、既存の外国語教授法の概念にとらわれることなく、独自の指導技法を開発して英語教育の場で応用・実践している。学習効果については，紀要や学会誌において発表している。
	平成15年7月および12月	ＦＤ委員会による授業評価アンケート調査の結果では、厳しい授業をする教員として評価されている。また、視聴覚機器を利用した理解しやすい、参加しやすい授業という評価である。

2　作成した教科書、教材、参考書	平成11年4月より現在	上記1-1及び1-2の理論と実践に基づいて視聴覚教材の開発と作成を行っている。そのために、認知心理学の概念である認知的不調和（Cognitive Dissonance）を理論基盤とし、同時に，心理学者Reuven Feurersteinの能力開発の理論と技法を取れ入れて、学習者の認知・情意的活動を高めるための言語・非言語教材を作成している。特に、体育系学生が得意とする非言語的な能力を伸ばしながら英語のコミュニケーション能力を伸ばすような教材の開発と作成を行っている。さらに、上記の授業評価アンケート調査の結果や学生の成績などをもとに、教材の改善に努めている。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等	平成 13 年 8 月	平成13年度高専情報処理教育研究発表会において、「高専生の英語学力の諸相，特に，聴解力・読解力」の学力水準やそれらの実態を示し、学生の英語学力を正確に掌握する必要性と今後の英語教育に関連あるハードとソフトをいかに利用するかについての基礎的資料を提供した。
	平成 13 年 10 月	情報処理教育研究集会において、大学・短大・高専生の英語学力測定とコンピューターを利用した英語教育の方向性について発表した。音声＋動画で提示された教材を理解する聴解力、音声のみを理解する聴解力、文字のみを理解する読解力の比較分析と、さらに、学生の授業への要望や英語学習動機の調査結果とこれらの学力との関連を分析し、マルチメディア学習環境での英語指導の方向性として，２つのスキルの高低に応じた指導に留意すべきことを強調した。
4　その他教育活動上特記すべき事項	平成 14 年 12 月	ブリティッシュ・コロンビア大学において客員教授（至平成 15 年 4 月）として同大学教育学部教授のリンダ・シーゲル博士のもとで外国語学習と音声知覚および作動記憶に関して共同研究を行った。

II　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
サジェストペディア授業の効果について	共著	平成11年3月	『日本サジェストペディア学会紀要』第5号	浅野紀和	P. 19-34. 16ページの中5ページ,
短大・大学生の英語学習ニーズの分析と英語学力について	共著	平成 12 年 12 月	『産能短期大学紀要』創立 50 周年記念第 34 号. 1-19	浅野紀和	P. 26-36.
体育系大学生の英語学習に対するﾆｰｽﾞ分析と英語学力について -他学部学生との比較において-	単著	平成 13 年 7 月	大阪体育大学紀要 32 号		

高専生の英語聴解力・読解力の諸相	共著	平成 13 年 8 月	平成13年度 高専情報処理教育研究発表会論文集 No. 21	浅野紀和	P. 134-137. 4ページの中2ページ
大学・短大・高専生の英語学力測定とコンピュータを利用した英語教育の方向性	共著	平成13年10月	情報処理教育研究集会 論文集	藤田　祐 浅野紀和	P. 176-179. 共同研究につき，本人担当分の抽出不可能
マルチメディア学習環境における外国語指導法について	単著	平成 14 年 2 月	『教育メディア』 財団法人日本視聴覚教育協会		P. 11-21.
Some effects of audio-visual approaches on foreign language anxiety 外国語不安感に及ぼす視聴覚的指導法の効果に関する一考察	単著	平成15年3月	大阪体育大学紀要34号		P. 65-82.
Phonological awareness, working memory, and non-verbal factors in foreign language word learning under different task conditions. 外国語語彙学習に関わる音韻知覚と作動記憶および非言語的要因について	単著	平成16年3月	大阪体育大学健康福祉学部紀要創刊号		P. 133-158.

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和61年７月～現在に至る	日本サジェストペディア学会会員
平成12年４月～現在に至る	大学英語教育学会(JACET)会員
平成15年４月～現在に至る	全国語学教育学会(JALT)会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	岩田　勝	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 スポーツ科学講習会標準テキスト	平成14年6月15日発行	運動・スポーツの指導者としての知識・実技の修得に主眼を置き、スポーツ医学、スポーツ科学としては体育系大学で教育される教科を共編。 担当は活法と救急処置

3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

III　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

（学 会 活 動）	
昭和42年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和47年～現在に至る	日本武道学会会員
平成５年～現在に至る	日本柔道整復・接骨医学会会員（平成９年３月まで評議員）
平成５年～現在に至る	日本体力医学会会員
（社 会 活 動）	
昭和54年４月～現在に至る	関西学生柔道連盟（平成 14 年４月より理事長）
平成２年４月～現在に至る	（財）大阪府高槻市体育協会（平成４年３月まで理事）
平成７年７月～現在に至る	NPO 法人 ジャパン アスレチックトレーナズ協会　副会長
平成８年４月～現在に至る	（社）全日本学生柔道連盟（平成14年４月より理事）
平成14年４月～現在に至る	近畿柔道連盟評議員（トレーナー部長）
平成15年４月～現在に至る	NPO法人 大阪国際柔道友好会　会長

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	梅林　薫	（有）・無）

I　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） 「テニスⅠ」実技でのグループ学習の実施	平成15年4月～12月	「テニスⅠ」（実技）において、６人程度のグループを形成し、テキスト・資料を参考にし、練習方法、指導法を中心としたグループ学習を実施した。学生の自主的な活動をねらいとしている。

2　作成した教科書、教材、参考書 運動学・運動学概論講義ノート	平成15年3月	生涯スポーツ学科の「運動学概論」のテキストとして活用。 運動学とは何か、運動の構造、体力・技術の運動学的認識技術トレーニング、運動学習の位相理論等の章に分かれている。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
プレイヤーズノート（コーチ編）	共	平成11年1月	遊戯社	梅林　薫　及能茂道 佐藤陽治　蝶間林利男 徳永幹雄　別府諸兄 森山朝正	第Ⅰ，Ⅱ，Ⅴ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ章担当。
『クロストレーニング』	共	平成13年3月	大修館書店	梅林　薫 須田和裕 畑山雅史	
論文					
テニス競技における筋痙攣に関する調査研究	共	平成11年3月	日本オリンピック委員会スポーツ　医・科学研究報告		P.81-92
暑熱環境下走行時における含水スポンジによる身体冷却効果	共	平成12年6月	ランニング学研究 第11巻　第1号	石井好二郎 梅林　薫 豊岡示朗	P.34-41
テニス競技におけるラリーテンポの加速化について	共	平成12年2月	学習院大学スポーツ・健康科学センター紀要　第8号	佐藤陽治　梅林　薫 岩本　淳　久保田秀明 道上静香	P.25-34
男子プロテニス選手におけるサービス速度変化の戦術的効果に関する一考察	共	平成15年3月	学習院大学スポーツ・健康科学センター紀要　第11号	佐藤陽治　梅林　薫 岩本　淳　久保田秀明 江口淳一　岩嶋孝夫	P.1-26
球技スポーツ戦術の一般化及び統一理論	共	平成15年3月	学習院大学スポーツ・健康科学センター紀要　第11号	佐藤陽治　梅林　薫 岩本　淳　久保田秀明 西村　覚　岩嶋孝夫	P.27-46

テニス競技における敏捷性、スピード、筋力評価のためのコントロールテストの検討	共	平成15年3月	大阪体育学研究　第41巻	木内真弘　梅林　薫 畑山雅史　中井　功 三村寛一	P. 45-51
成人女性テニスプレイヤーのコンディショニングおよび傷害に関する実態調査	共	平成16年3月	大阪体育学研究　第42巻	松原慶子 梅林　薫 濱田繁夫	P. 93-99
『インピーダンス法による高精度体成分分析装置を用いた体組成を健康評価法に関する一考察』	共	平成16年3月	大阪体育学研究　第42巻	土肥啓一郎　梅林　薫 上　勝也　滝瀬定文 豊岡示朗　松生香里 松村新也　吉田精二 増原光彦	P. 81-91
その他					
テニス競技における筋疲労と筋痙攣に関する一考察	共	平成12年3月	日本オリンピック委員会 スポーツ医・科学研究報告№Ⅱ 競技種目別競技力向上に関する研究　第23報	梅林　薫　渡辺斡彦 佐藤陽治　斉藤明義	P. 77-87
大学男子テニス選手の等速性筋力発揮特性について	共	平成11年10月	日本体育学会 第50回記念大会	梅林薫 木内真弘 畑山雅史	
女子ソフトテニスプレーヤーのコンディショニング，傷害に関する調査研究	共	平成11年	日本体育学会 第50回記念大会	濱田繁雄 松原慶子 梅林薫	

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

＜学会活動＞

昭和57年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和58年４月～現在に至る	日本体力医学会会員
平成元年４月～現在に至る	日本テニス協会医科学委員会委員
平成２年７月～現在に至る	日本生理学会会員
平成２年９月～現在に至る	日本気象学会会員
平成６年～現在に至る	日本オリンピック委員会強化スタッフ（フィットネスコーチ）
平成11年７月～現在に至る	日本テニス協会強化本部スポーツ科学委員会委員長
平成11年７月～現在に至る	日本テニス協会競技者指導推進委員会委員
平成11年７月～現在に至る	日本オリンピック委員会強化スタッフ（トレーニングドクター）
平成12年４月～現在に至る	関西テニス協会強化本部スポーツ科学委員会委員長
平成14年７月～現在に至る	日本オリンピック委員会強化スタッフ（スポーツ医科学）

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	江刺　正吾	（有）・無

（平成16年4月1日より就任）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	平成16年4月	学生の学問に対する興味や関心を維持するために、ビデオ教材の使用、新聞記事の輪読、学生の議論を中心とする教育を行っている
2　作成した教科書、教材、参考書 ・『運動文化の社会学』上・下 ・授業内容に関連した独自資料の作成	平成16年3月 随　時	
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 「全国みんなのスポーツ研究会」等におけるスポーツ指導の講演	随　時	
4　その他教育活動上特記すべき事項	毎　年	例えば、(財)日本体育協会主催のスポーツ指導者養成の講師を務める　など

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
体操・薙刀からスポーツへ －戦前の女子高等教育機関における身体教育－	単著	2003年10月	道和書院　全179頁		
運動文化の社会学	単著	2004年3月	自費出版　上下		
論文					
現代日本におけるスポーツ人口の受容	共著	2000年3月	奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編 スポーツ科学研究　第２号	望月　慶子 江刺　正吾	P. 23-32

現代日本におけるギャンブル観	共著	2000年3月	奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編 スポーツ科学研究　第２号	江刺 正吾 金　惠子 田中 励子	P.71-81
現代における競技スポーツの課題	共著	2001年3月	奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編 スポーツ科学研究　第３号	江刺 正吾 金　惠子	P.41-51
現代におけるスポーツと社会的諸制度との関連	単著	2003年3月	奈良体育学会編、奈良体育学会研究年報　第６号		
日本におけるスポーツ行動に関する社会調査の現状	単著	2003年3月	奈良体育学会編、奈良体育学会研究年報　第７号		
戦後における日本人のスポーツ行動の変容	単著	2004年3月	奈良女子大学文学部文学部研究年報　47号		P.17-28
戦前における薙刀教育	単著	2004年3月	奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編 スポーツ科学研究　第６号		P.61-69
その他					
体育学からスポーツ科学へ ―スポーツ科学教室の半世紀―	単著	2004年3月	奈良女子大学文学部スポーツ科学教室編 スポーツ科学研究　第６号		P.79-92

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和42年４月～現在に至る	日本体育学会正会員、同学会理事、同論文審査員など歴任、平成13年4月より同体育社会学専門分科会会長
昭和49年４月～現在に至る	国際スポーツ社会学会正会員
昭和51年７月～現在に至る	奈良市スポーツ振興審議会委員、昭和58年より副委員長
昭和60年４月～現在に至る	奈良市学校施設開放運営協議会委員
昭和61年４月～現在に至る	親切・美化奈良県運動推進協議会　専門理事
平成５年４月～現在に至る	奈良県体育協会スポーツ指導者協議会委員
平成11年４月～平成12年12月	日本体育学会第51回大会の奈良女子大学での開催にむけて、組織委員会及び実行委員会の事務局長の任にあたる
平成12年１月～平成13年12月	科学研究費委員会専門委員（体育学）

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	岡村　浩嗣	（有・無）

Ⅰ　教育活動　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		

2　作成した教科書、教材、参考書 アスリートのための栄養・食事ガイド（第一出版） スポーツ栄養学（市村出版）		スポーツ栄養学及び栄養管理の参考資料として利用
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
活性酸素と運動－しなやかな健康と長寿を求めて	共著	1999年 5月	共立出版	井上正康 編著	第７章３ P. 291-296
栄養と運動と休養	共著	1999年 5月	光生館	飯尾雅嘉 他編	P. 113-134
身体運動・栄養・生命科学Ｑ＆Ａ「運動と栄養」	共著	1999年 7月	杏林書院	伏木　亨 他編	P. 36-37
Thremotherapy for neoplasia, inflammation, and pain,	共著	2000年	Springer-Verlag	Kosaka, M 他編	P. 74-80
スポーツ栄養学	共著	2001年	市村出版	樋口　満 編著	P. 23-35 P. 47-58 P. 103-111
アスリートのための栄養・食事ガイド	共著	2001年	第一出版	小林修平 編	P. 55-58
新運動生理学	共著	2001年	真興交易(株)医書出版部	宮村実晴 編	P. 207-218
バドミントン教本	共著	2003年	ベースボールマガジン社	バドミントン協会 編	P. 210-233
Exercise, Nutrition, and Environmental Stress	共著	2003年	Cooper Publishing Group	Nose, H 他編	P. 223-24
エクササイズ、疾病予防のための運動	共著 翻訳	2004年	エルゼビア・ジャパン	前嶋伸一郎 他監訳	P. 59-69
運動生化学ハンドブック	共著 翻訳	2004年	ナップ	山田　茂 監訳	P. 153-165
論文					

Effect of amino acids and glucose on exercise-induced gut and skeletal muscle proteolysis in dogs	共著	1999年	Metabolism	K. Hamada K. Matsumoto K. Okamura T. Doi K. Minehira S. Shimizu	48: 161-166
超持久運動におけるアミノ酸代謝と感情・気分の変動について	共著	1999年	体力科学	松原　大　下光輝一 岡村浩嗣　小田切優子 勝村俊仁	48: 210-210
Effect of meal timing after resistance exercise on hindlimb muscle mass and fat accumulation in trained rats	共著	1999年	J. Nutr. Sci. Vitaminol.	M. Suzuki T. Doi S. Lee K.Okamura S. Shimizu G. Okano Y. Sato Y. Shimomura T. Fushiki	45:401-409
Effect of timing of meal intakeafter squat exercise training on bone formation in rodent hindlimb	共著	1999年	J. Nutr. Sci. Vitaminol.	G. Okano M. Suzuki M. Kojima Y. Sato S. J. Lee K. Okamura S. Noriyasu T. Doi T. Fushiki Y. Shimomura S. Shimizu	45:543-552
Anthropometric and physiological factors predincting 2000 m rowing ergometer performance time	共著	2000年	Adv Exerc Sports Physiol	C. Yoshiga Y. Kawakami T. Fukunaga K. Okamura M. Higuchi	6: 51-57
Gastrointestinal tract, hepatic, hindlimb, and renal recovery of carbon dioxide in vivo	共著	2000年	J. Appl. Physiol.	J.D.Gresham K. Okamura, P.E.Williams K.Jabbour P.J.Flakoll	89: 2000-2006
Characterization of control and immobilized skeletal muscle. An overview from genetic engineering	共著	2001年	FASEB J	J.St-Amand, K. Okamura K.Matsumoto S. Shimizu Y.Sogawa	15 684-692
Serum lipoprotein cholesterol in male collegiate rowers	共著	2001年	Adv Exerc Sports Physiol	C. Yoshiga Y Kawakami K Okamura J. Oka M. Higuchi	7: 33-37
A New approach for weight reduction by a combination of diet, light resistance exercise and the timing of ingesting a protein supplement	共著	2001年	Asia Pacific J Clin Nutr	T. Doi T. Matsuo M. Sugawara K. Matsumoto K. Minehira K. Okamura K. Hamada S. Shimizu M. Suzuki	10: 226-232
Effect of protein nutrition timing on muscle protein synthesis	単著	2003年	Korean J.　Exerc. Nutr		7: 99-105

Effects of Voluntary Resistance Exercise and High-Protein Snack on Bone Mass, Composition and Strength in Rats Given Glucocorticoid-injections	共著	2003年	Biosci. Biotech. Biochem.	T. Matsuo T. Nozaki S. Gohtani K. Okamura, K. Matsumoto T. Doi M. Suzuki	67: 2518-2523
その他					
スポーツ選手に対する最新の栄養・食事ガイドライン策定に関する研究、第2報「アジア大会出場選手を対象とした合宿期と日常期の「食」生活一般調査」	共著	1999年	平成10年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、No. IX	川野 因 小林修平 鈴木久乃 高戸良之 杉浦克巳 岡村浩嗣 樋口 満 石井恵子 亀井明子 田口素子 富松理恵子 柳沢香絵 山田優香 内丸 仁	
Sports drink, some physiological functions required. 台北、台湾	単著	1999年	国際運動栄養検討会		
競技力向上の視点および健康増進の視点から見た「ローイング運動」	共著	1999年	日本体力医学会	吉賀千恵 川上泰雄 福永哲夫 岡村浩嗣 樋口 満	
運動後の食餌摂取タイミングと食後のエネルギー消費量	共著	1999年	日本体力医学会	岡野五郎 岡村浩嗣 鈴木正成	
スポーツ選手に対する最新の栄養・食事ガイドライン策定に関する研究、第3報「アジア大会出場選手を対象とした合宿期の食事摂取状況」	共著	2000年	平成11年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告、No. X	亀井明子 鈴木久乃 小林修平 川野 因 高戸良之 杉浦克巳 岡村浩嗣 樋口 満 石井恵子 田口素子 富松理恵子 柳沢香絵 山田優香 内丸 仁	
スポーツ栄養食品とパフォーマンス	単著	2000年	体育の科学		第50巻 第10号 P. 767-773
Sciences underlying sports drink	単著	2000年	InternationalCongress on Exercise Nutrition 2000		
Characterization of skeletal muscle in control and immobilized legs. An overview from genetic engineering	共著	2000年	Experimental Biology 2000	J. St-Amand, K. Okamura M. Matsumoto S. Shimizu Y. Sogawa	
Anthropometric and physiological factors in Japanese female rowers	共著	2000年	European College of Sport Science	C. Yoshiga, T. Kawakami M. Matsushita I. Tabata K. Okamura M. Higuchi	

ボート選手の呼吸循環系機能および筋力と2000mローイング・パフォーマンスとの関係	共著	2000年	日本運動生理学会	樋口　満 松下雅雄 岡村浩嗣 吉賀千恵 田畑　泉 川上泰雄	
ボート選手のトレッドミルおよびローイング・エルゴメータによる漸増負荷試験に対する呼吸循環系応答	共著	2000年	日本運動生理学会	吉賀千恵 田畑　泉 樋口　満 松下雅雄 岡村浩嗣	
ボート選手の呼吸循環系機能および筋力とローイング・エルゴメーター漕パフォーマンスとの関係	共著	2000年	日本体力医学会	吉賀千恵 松下雅雄 岡村浩嗣 樋口　満 田畑　泉 川上靖雄	
Nutrition-exercise regimen for effective skeletal muscle protein synthesis	単著	2001年	International Sports Science Network Forum		
Effect of exercise on preference and threshold for a sweet taste.	共著	2001年	Experimental Biology 2001	K. Okmaura, S. Matsumura S. Kanehara	
Effect of apple polyphenol on muscle atrophy and subsequent recovery in immobilized rats	共著	2001年	American College of Sports Medicine 48th Annual Meeting	K. Matsumoto K. Hamada K. Okamura. K. Yanagisawa Y. Kimura	
Effects of apple polyphenol on oxidative stress during recovery from muscle atrophy. ,.	共著	2001年	American College of Sports Medicine 48th Annual Meeting	K. Hamada K. Matsumoto K. Okamura. M. Sakurai F. Matsubara	
運動で甘味閾値は低下する？	共著	2001年	日本体力医学会	岡村浩嗣 川島康弘 滝瀬定文 松村新也	
リンゴポリフェノール摂取による廃用性筋萎縮の抑制	共著	2001年	日本体力医学会	柳沢香絵 濱田広一郎 松元圭太郎 岡村浩嗣	
Effect of protein nutrition timing on muscle protein synthesis	単著	2002年	2002 Busan Asian games Sorts Scientific Congress.		
Citrate Does Not Enhance Postexercise Tissue Glycogen Repletion in Fructose-Ingested Rats	共著	2002年	Experimental Biology 2002	K. Okamura	
エアロビック運動vs. 軽レジスタンス運動	単著	2002年	日本健康科学学会シンポジウム		
Effects Of Conjugated Linoleic Acid And Exercise On Body Fat Accumulation In Rats	共著	2003年	Experimental Biology 2003	Y Harada T Yamamoto K Okamura T Iwata K Tsutsumi,	
共役リノール酸と自発運動の併用がラットの体組成に及ぼす影響	共著	2003年	日本栄養・食糧学会	岡村浩嗣 岩田敏夫 堤賢太郎 原田八千代 山本隆也	
フルクトースとクエン酸の併用投与が運動後のグリコーゲン回復に及ぼす影響	共著	2003年	日本栄養・食糧学会	原田八千代 田井伸二 岡村浩嗣	

甘味、塩味、酸味、苦味の閾値に対する運動の影響	単著	2003年	日本体力医学会		
サプリメントの現状	単著	2003年	臨床スポーツ医学会学術集会 コメディカルシンポジウム		
タンパク質代謝と運動	単著	2004年	体育の科学		第54巻 第1号 P.23-26

Ⅲ 学会等および社会における主な活動　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和57年～現在に至る	日本栄養・食糧学会
昭和61年～現在に至る	日本体力医学会
平成11年～現在に至る	アメリカ生理学会
平成11年・平成14年	日本体育協会「スポーツ選手の栄養・食事ガイドライン策定研究班」
平成11年・平成14年	佐賀県スポーツ医科学委員
平成11年～現在に至る	日本体力医学会評議員
平成12年・平成14年	日本テニス協会スポーツ科学委員会委員
平成13年～現在に至る	J Nutr Sci Vitaminolならびに栄養学雑誌の論文査読
平成15年～現在に至る	日本オリンピック委員会情報・医・科学専門委員会科学サポート部会部会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	上　勝也	（有）・無）

Ⅰ 教育活動　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） ・機能解剖学 ・スポーツ生理学 ・演習Ⅰ・Ⅱ		・学生による授業評価は「機能解剖学」、「スポーツ生理学」ともに学内平均と比較して高い値を示したことから、現在実施している授業方法を基盤として改善することで、さらに分かりやすい授業が展開できると思われる。 ・演習Ⅱではゼミ論を必須とし、現代社会において研究することの意義を伝えている。
2　作成した教科書、教材、参考書 ・機能解剖学 ・スポーツ生理学		・「機能解剖学」と「スポーツ生理学」では、既存の教科書は使用せずプリントを使って講義を行っている。また、講義プリントには幾分かの書き込みができるように工夫されている。 ・講義にはパワーポイントを利用し、学生の授業内容の理解に務めている。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
身体運動・栄養・健康の生命科学 Q＆A　シリーズ骨格筋と運動	単著	平成13年	杏林書院	跡見順子 大野秀樹 伏木　亨	P. 50-51
新運動生理学（下巻）	単著	平成13年	真興交易医書出版	宮村実晴	P. 392-406
エクササイズ －疾患予防のための運動－	単著	平成16年	エルゼビア・ジャパン	前島伸一郎 前島悦子　（監訳）	P. 141-154
総説					
筋再生と細胞内シグナル伝達	共著	平成13年	生体の科学 第52巻	◎上　勝也 仙波恵美子	P. 328-333
骨格筋の適応変化 －細胞・分子レベルでの観察－	単著	平成14年	バイオメカニクス研究 第6巻		P. 208-219
論文					
LIF, GDNF, and their receptor expressions following muscle crush injury	共著	平成11年	Muscle & Nerve. Vol 22	◎Kami K　Morikawa Y Kawai Y　Senba E	P. 1576-1586
Gene expression of receptors for IL-6, LIF, and CNTF in regenerating skeletal muscles	共著	平成12年	J Histochem Cytochem. Vol 48	◎Kami K　Morikawa Y Sekimoto M　Senba E	P. 1203-1213
In vivo activation of STAT3 proteins in satellite cells and myofibers in regenerating rat skeletal muscles	共著	平成14年	J Histochem Cytochem. Vol 50	◎Kami K Senba E	P. 1579-1589
Localization of MyoD, myogenin and cell cycle regulatory factors in hypertrophying rat skeletal muscles	共著	平成16年	Acta Physiol Scand. Vol 180	◎Ishido M Kami K Masuhara M	P. 281-290
その他					
運動生理・生化学辞典	単著	平成13年	大修館書店	大野秀樹　他	P. 140-142

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和60年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和60年～現在に至る	日本体力医学会会員

平成５年～現在に至る	日本解剖学会会員
平成10年～現在に至る	大阪体育大学アメリカンフットボール部　総監督

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	滝瀬　定文	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 健康指導管理論	平成16年3月	テキスト作成
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等	平成14年 現在に至る 平成15年 平成15年～現在に至る	水泳医科学シンポジウム　シンポジスト 厚生労働省　健康運動指導士認定講習　講師 水口スポーツセンター記念事業基調講演 吹田市指導者講習会　講師
4　その他教育活動上特記すべき事項	現在に至る 平成16年	日本学生水泳連盟　関西支部　運営委員 テレビ朝日　おはよう朝日「骨を強くする」

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
Effects of Exercise on the Vascular Diseases of Hyperlipidemic Rats	共著	平成11年3月	Japanese Journal of Judo Therapy　Voi.7,	Sadafumi Takise Yasuhiro Kawashima Mitsuhiko Masuhara Masaru Iwata Michio Kimura	P. 425-434
大学女子柔道選手のコンディショニングに関する一考察	共著	平成13年	大阪ソーシャルサービス研究 創刊号	松田基子 滝瀬定文 岩田　勝	P. 95-105
閉経後の運動が骨量に及ぼす影響について	共著	平成14年	スポーツ整復療法学研究 Vol. 3	中瀬義弘　高折和男 滝瀬定文　岡本　崇 大川得太郎	P. 41-48

バトミントン運動が骨量に及ぼす影響	共著	平成14年	近畿職業能力開発大学校紀要 Vol.10	中瀬義弘　大川得太郎 和田麻由子　小妻崇志 河上俊和　滝瀬定文	P.1-9
大学競泳チームにおける心理的サポートの実践	共著	平成15年	大阪体育大学紀要　Vol.34	土屋裕睦 川島康弘 滝瀬定文	P.83-94
インピーダンス法による高精度体成成分分析装置を用いた体組成と健康評価に関する一考察	共著	平成15年	大阪体育学研究　Vol.42	土肥啓一郎　梅林　薫 上　勝也　滝瀬定文 豊岡示朗　松生香里 松村新也　吉田精二 増原光彦	P.81-91
報告書					
大阪体育大学学生の体力を測る～平成11年度体力測定の学年別・運動所属別集計結果～	共著	平成12年	大阪体育大学紀要　Vol.31	淵本隆文　上　勝也 中井俊行　鶴池政明 木谷法子　滝瀬定文 吉田精二　川島康弘	P.87-94
体育大学におけるFat Burning（体脂肪燃焼）に関する授業への取り組み〔その２〕	共著	平成12年	平成11年度日本私学振興・共済事業団補助対象研究報告書		
大阪体育大学学生の体力を測る～平成12年度/体力測定の学年別・運動クラブ別集計結果～	共著	平成13年	大阪体育大学紀要　Vol.32	川島康弘　滝瀬定文 吉田精二　淵本隆文 中井俊行　木谷法子 豊岡示朗	P.127-135
大阪体育大学生の体力を測る～平成13年度体力測定の学年別・運動所属別集計の結果～	共著	平成14年	大阪体育大学紀要　Vol.33	吉田精二　淵本隆文 中井俊行　浅井正仁 岡村浩嗣　滝瀬定文 川島康弘　木谷法子 豊岡示朗	P.47-55
体育大学におけるFat Burning（体脂肪燃焼）に関する授業への取り組み〔その３〕	共著	平成14年	平成13年度「高等教育研究改革推進経費」報告書		
学会発表及び大会号					
Science of fishing Dosefishing become health-making?	共著	平成12年	第２回日本スポーツ整復療法学会	滝瀬定文 岩田　勝 松田基子	
閉経後の運動が骨量に与える影響について	共著	平成12年	第２回日本スポーツ整復療法学会	中瀬義弘　滝瀬定文 岡本　崇　大川得太郎	
女子柔道選手の減量とコンディショニングについて	共著	平成12年	第２回日本スポーツ整復療法学会	松田基子 滝瀬定文 岩田　勝	

バトミントン運動が閉経後女性の骨量に及ぼす影響	共著	平成13年	第３回日本スポーツ整復療法学会	中瀬義弘 小妻崇志 滝瀬定文	
水泳運動における脳性麻痺者の心拍数と体温の変化	共著	平成13年	第３回日本スポーツ整復療法学会	小妻崇志　中瀬義弘 冨築一行　滝瀬定文	
サッカー選手の体力と傷害に関する実態調査	共著	平成13年	第３回日本スポーツ整復療法学会	河上俊和 滝瀬定文 中瀬義弘	
サッカー選手の体力と傷害に関する実態調査	共著	平成13年	第３回日本スポーツ整復療法学会	河上俊和 滝瀬定文 中瀬義弘	
大学女子柔道選手の体力と傷害の現状	共著	平成13年	第３回日本スポーツ整復療法学会	松田基子 滝瀬定文 岩田　勝	
水泳運動が閉経後女性の骨密度に及ぼす影響について	共著	平成14年	第57回日本体力医学会大会	河上俊和　滝瀬定文 岩田　勝　廣橋賢次 小妻崇志　中瀬義弘 大川得太郎	
脊髄損傷者における車椅子バスケットボール選手の骨密度について	共著	平成14年	第57回日本体力医学会大会	小妻崇志　滝瀬定文 廣橋賢次　河上俊和 松下直史　小池達也	
ラットギプス固定が血圧及び骨密度に及ぼす影響について	共著	平成14年	第4回日本スポーツ整復療法学会大会	河上俊和　滝瀬定文 岩田　勝　小妻崇志 大川得太郎	
脊髄損傷者のスポーツ参加について	共著	平成14年	第4回日本スポーツ整復療法学会大会	小妻崇志　滝瀬定文 岩田　勝　河上俊和	
運動制限が大腿骨骨密度に及ぼす影響	共著	平成15年	大阪体育学会第41回大会	河上俊和　滝瀬定文 廣橋賢次　岩田　勝 小妻崇志　河上陽子	
脊髄損傷者のスポーツ実施が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成15年	大阪体育学会第41回大会	小妻崇志　滝瀬定文 廣橋賢次　岩田　勝 河上俊和	
インピーダンス法による高精度体成成分分析装置を用いた体組成と健康評価法に関する一考察	共著	平成15年	大阪体育学会第41回大会	土肥啓一郎　宇田宗弘 松生香里　上　勝也 梅林　薫　滝瀬定文 豊岡示朗　松村新也 吉田精二　増原光彦	
ラットギプス固定が大腿骨骨密度低下に及ぼす影響について	共著	平成15年	第58回日本体力医学会	河上俊和　滝瀬定文 大川得太郎　儀満大輔 廣橋賢次　岩田　勝 小妻崇志	

長期ギプス固定後の運動が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成15年	第58回日本体力医学会	儀満大輔　滝瀬定文 大川得太郎　河上俊和 廣橋賢次　岩田　勝 小妻崇志	
高精度体成分分析装置 In Body3.0を用いた身体特性に関する一考察	共著	平成15年	第58回日本体力医学会	土肥啓一郎　梅林　薫 上　勝也　滝瀬定文 豊岡示朗　松村新也 吉田精二　増原光彦	
水泳運動が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成15年	第54回日本体育学会	河上俊和　滝瀬定文 儀満大輔　小妻崇志 岩田　勝　河上陽子	
脊髄損傷者のスポーツ実施が日常生活動作に及ぼす影響について	共著	平成15年	第54回日本体育学会	小妻崇志　滝瀬定文 岩田　勝　河上俊和 儀満大輔　河上陽子	
閉経後の運動が骨密度に及ぼす影響	共著	平成15年	第5回日本スポーツ整復療法学会	河上俊和　滝瀬定文 大川得太郎　廣橋賢次 岩田　勝　儀満大輔 小妻崇志	
脊髄損傷者のスポーツ参加が形態に及ぼす影響	共著	平成15年	第5回日本スポーツ整復療法学会	小妻崇志　滝瀬定文 河上俊和　儀満大輔 岩田　勝	
廃用性萎縮が骨密度に及ぼす影響	共著	平成15年	第5回日本スポーツ整復療法学会	儀満大輔　滝瀬定文 大川得太郎　廣橋賢次 岩田　勝　河上俊和 小妻崇志	
脊髄損傷者の上肢のみの運動による骨代謝の改善	共著	平成16年	日本リハビリテーション医学会近畿地方大会第16回学術集会	松下直史　中土　保 小池達也　大澤　傑 滝瀬定文	
掲載抄録					
運動で甘味閾値は低下する？	共著	平成13年	体力科学　Vol.50	岡村浩嗣　滝瀬定文 川島康弘　松村新也	P.863
水泳運動が閉経後女性の骨密度に及ぼす影響について	共著	平成14年	体力科学　Vol.51	河上俊和　滝瀬定文 岩田　勝　廣橋賢次 小妻崇志　中瀬義弘 大川得太郎	P.722
脊髄損傷者における車椅子バスケットボール選手の骨密度について	共著	平成14年	体力科学　Vol.51	小妻崇志　滝瀬定文 廣橋賢次　河上俊和 松下直史　小池達也	P.795

ラットギプス固定が大腿骨骨密度低下に及ぼす影響について	共著	平成15年	体力科学　Vol.52	河上俊和　滝瀬定文 大川得太郎　儀満大輔 廣橋賢次　岩田　勝 小妻崇志	P.864
長期ギプス固定後の運動が骨密度に及ぼす影響について	共著	平成15年	体力科学　Vol.52	儀満大輔　滝瀬定文 大川得太郎　河上俊和 廣橋賢次　岩田　勝 小妻崇志	P.865
高精度体成分分析装置 In Body3.0を用いた身体特性に関する一考察	共著	平成15年	体力科学　Vol.52	土肥啓一郎　宇田宗弘 松生香里　上　勝也 梅林　薫　滝瀬定文 豊岡示朗　松村新也 吉田精二　増原光彦	P.947
その他（健康科学）					
潮岬沖シアイのかけ上がり狙いサンマで食わせるぶりとヒラマサ 超ブリヒラマサのすべて	単著	平成11年	週刊釣りサンデー		P.32-33
釣り場DEヘルス 長時間を熱を発するカイロが最高 カプサイシン効果に即効性なし	単著	平成11年	週刊釣りサンデー　12.5		P.75-82
自己保安 不意の大波まさかの落水事故 万が一に備えておこう	単著	平成12年	週刊釣りサンデー		P.140-143
釣友とにぎやか和深沖の船釣り	単著	平成12年	週刊釣りサンデー　1.30		P.76-77
小アタリでのアワセは不可能	単著	平成12年	ちぬ倶楽部　44		P.36-37
健康釣りライフを楽しむために ペットボトルで筋力アップ	単著	平成13年	ちぬ倶楽部　49		P.74-75
軽擦法と揉捏法で疲労部位を刺激する	単著	平成13年	ちぬ倶楽部　51		P.36-38
釣って食べて福笑い	単著	平成13年	週刊つりサンデー　2.11		P.90-91
迷える磯師の押しかけ問答プロの結論　熟年磯師のボディーケア	共著	平成13年	磯釣りスペシャル　1	滝瀬定文 細田利彦	P.90-95
炎天下での釣りは熱中症に注意 30分に一度は水分補給する	単著	平成14年	ちぬ倶楽部　50		P.74-75
身体の機能にはビタミンが重要 三度の食事で夏バテを予防	単著	平成14年	ちぬ倶楽部　51		P.74-75
超40歳は寒さに常に我慢している!？下半身の保温につとめよう	単著	平成14年	ちぬ倶楽部　53		P.74-75

痛みの原因や症状はさまざまなのだ　釣行で起こる腰痛にご用心	単著	平成14年	ちぬ倶楽部　54		P.274-275
いつでもどこでもシコなら踏める!	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　4.21		P.76-77
大漁祈願のかしわ手打って前腕強化	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　5.26		P.76-77
かかと釣りは集中力高める食事とメンタルトレーニングが大切ですよ	単著	平成14年	ちぬ倶楽部　58		P.63-67
予測不能ギックリ腰は予防できる!?	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　6.9		P.76-77
腰痛克服釣り場カムバックのために	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　6.23		P.76-77
腰にキビシいカセや堤防の前傾姿勢	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　7.7		P.76-77
ゴーグル型の偏光グラスください!	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　7.21		P.76-77
「熱中」もほどほどがよろしいようで	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　8.14		P.76-77
足を鍛えていいクツはいて楽々釣行	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　8.18.25		P.96-97
足のニオイで貧果がバレバレです!?	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　9.8		P.76-77
関節の炎症予防には筋力強化が一番	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　9.22		P.76-77
肩のインナーマッスルをきたえよう	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　10.6		P.76-77
疲労予防はしっかり食べることから	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　11.3		P.76-77
意外に多い“かかり”1時間255キロカロリー	単著	平成14年	ちぬ倶楽部　46		P.36-37
捻挫や打撲による負傷にアイシング	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　12.1		P.76-77
伸ばしてほぐして心身のリラックス	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　12.15		P.76-77
基礎代謝を高めて脂肪とサヨウナラ	単著	平成14年	週刊釣りサンデー　12.29		P.76-77
コンビニ活用しっかり食べて初釣り	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　1.19		P.76-77
「百楽の長」も飲み方次第量次第!?	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　2.16		P.76-77

朝一番の好時合…高血圧にご注意	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　3.2		P.76-77
バランス崩れめまい船酔いもう大変	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　3.16		P.76-77
転ばぬ先のバランス感覚向上作戦!?	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　3.30		P.76-77
じっくり腰を据えるのも善し悪し!?	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　4.13		P.76-77
眠いと釣れない・釣れないと眠い!?	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　4.27		P.76-77
僕らの釣りを支えるのは健康はホネ	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　5.12		P.96-97
めざせ磯マッチョマン　痛い!疲れた!!なんていわせない!?筋肉モリモリの“磯オトコ”になろう筋肉は正しい処方により維持・向上が可能	単著	平成15年	月刊磯釣りスペシャル　11		P.68-69
「楽」か「キツい」かは人それぞれです	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　11.17		P.76-77
めざせ磯マッチョマン　痛い!疲れた!!なんていわせない!?筋肉モリモリの“磯オトコ”になろう阿波の鉄人小里哲也さんの体力を測定する	単著	平成15年	月刊磯釣りスペシャル　12		P.70-72
時合いに備えリラックスとイメトレ	単著	平成15年	週刊釣りサンデー　12.1		P.76-77

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和47年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和49年～現在に至る	日本体力医学会会員
昭和53年～現在に至る	バイオメカニクス学会会員
昭和58年～現在に至る	日本自動化健診学会会員
昭和58年～現在に至る	日本産業医学会会員
平成11年～現在に至る	日本脂質生化学研究会
平成11年～現在に至る	日本スポーツ整復療法学会
平成11年～平成16年３月	日本スポーツ整復療法学会評議員　関西支部理事長
平成14年～現在に至る	日本水泳医科学シンポジウム　シンポジスト
平成16年～現在に至る	日本スポーツ整復療法学会　関西支部長
平成16年～現在に至る	日本学生水泳連盟　関西支部　運営委員

所属	大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	職名	教　授	氏名	原田　宗彦	大学院の授業担当の有無	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
授業評価	2004年6月	大学が行う授業評価を受け、学生の感想文を参考にして授業を改善した
2　作成した教科書、教材、参考書		
・スポーツ産業論入門　第３版	杏林書院　2004年4月	社会の動きに対応した内容にコンテンツを変更
・スポーツイベントの経済学	平凡社新書 2002年6月	スポーツと都市に関する知識の体系化を行う
・スポーツマーケティング	大修館　2004年4月	スポーツマーケティングに関する内容を体系化した
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
改訂スポーツ産業論入門	編著	1999年4月	杏林書院	原田宗彦　他19名	１，９，１６，２６章
新しい軽スポーツのすすめ	編著	1999年5月	杏林書院	原田宗彦　他５名	
スポーツの経営学	共著	1999年8月	杏林書院	池田　勝 原田宗彦　他13名	第４章 P.63-83
スポーツ経営学	共著	1999年12月	大修館書店	山下秋二 原田宗彦　他12名	第２章 P.46-63
スポーツが都市（まち）を変える	単著	2000年2月	(財)勤労者福祉施設協会		
大学ランキング 2002年版	共著	2001年4月	朝日新聞社		

レクリエーション・ コーディネーター・テキスト	共著	2001年3月	(財)日本レクリエーション協会	原田宗彦　　他23名	P. 181-186
大学ランキング 2002年版	共著	2001年4月	朝日新聞社		P. 248-253
スポーツイベントの経済学	単著	2002年6月	平凡社新書		
生涯スポーツ実践論	共著	2002年11月	市村出版		第4章１「生涯スポーツのビジネス化」を担当
生涯スポーツの社会経済学	共著	2002年11月	杏林書院	原田宗彦　　他13名	
新しい体育・スポーツ理論	共著	2002年11月	大修館書店		第3章「スポーツが経済を変える」と「スポーツが世界を変える」を担当
朝日現代用語辞典　知恵蔵	共著	2002年11月	朝日新聞社		「スポーツビジネス」に関する項目を担当。
日本大百科辞典（ニッポニカ）	単著	2002年11月	小学館		
スポーツ産業論入門第3版	編著	2003年3月	杏林書院	原田宗彦　　他19名	
論文					
The influence of new team entry upon brand switching in the J-league	共著	1999年9月	Sport Marketing Quarterly Vol. 8.　No. 3	Munehiko Harada Hirotaka Matsuoka	P. 21-30
Aging and Rcereation	単著	1999年10月	WLRA Journal		
高齢社会と医療スポーツ	単著	2001年1月	臨床スポーツ医学 Vol.18.　No.1		P. 1-6
現代人が求めるスポーツのベネフィット	単著	2002年4月	人間生活工学 Vol. 3.　No. 2		P. 3-6
スポーツビジネスの世界	単著	2002年10月	郵政 No. 639		P. 1-10
Direct and interaction effects ofteam identification and satisfaction on intention to attend games	共著	2003年	Sport Marketing Quarterly Vol.12.　No. 4	Matsuoka,H., Chelladurai,P. Harada,M.	P. 244-253
中高年の運動アドヒアランスに影響する因子に関する研究	共著	2003年	理学療法学 第30巻第2号	大工谷新一 鈴木俊明 原田宗彦	P. 48-54

W杯の観戦が日本と韓国における中学生のサッカー行動へ与える影響に関する研究 —「みる」スポーツと「する」スポーツの関連に注目して—	共著	2004年	大阪体育大学紀要 第35巻（2004）	林直也 原田宗彦　　他3名	PP. 1-13
交通広告による情報接触度とプロ野球観戦に関する研究 —特に大阪近鉄バファローズに注目して—	共著	2004年	大阪体育大学紀要 第35巻（2004）	竹中陽三 原田宗彦	PP. 15-23
その他					
ホモルーデンス都市を目指して	単著	1999年6月	（財）大阪都市協会		P. 79-80
次世代のスポーツ施設のあり方	単著	1999年7月	ベース設計資料　No.97		P. 60-63
北京は当確なのか？	単著	1999年10月	毎日新聞「言」 10月 9日朝刊		
地域スポーツ振興における新しい民間セクターの役割	単著	2000年3月	体育の科学 No.50		P. 194-198
Sports Management 1 「スポーツとマネジメント①」	単著	2000年5月	月刊体育施設 No.5		P. 70-73
Sports Management 2 「スポーツとマネジメント②」	単著	2000年7月	月刊体育施設 No.7		P. 64-67
「ホモ・ルーデンス都市関西」 「スポーツとマネジメント②	共著	2000年8月	21世紀の関西を考える会報告書		P. 1-116
2002年ワールドカップ大会と国際交流	単著	2000年8月	アイハウスニュース Vol. 28		
Sports Management 3 「スポーツとマネジメント③」	単著	2000年9月	月刊体育施設 No.9		P. 58-60
Sports Management 4 「公共スポーツ施設のマネジメント④」	単著	2000年11月	月刊体育施設 No.11		P. 80-83
Sports Management 5 「公共スポーツ施設のマネジメント⑤」	単著	2001年1月	月刊体育施設 No.1		P. 80-82
オリンピック教育:21世紀を担う青少年に夢と感動を	単著	2001年1月	産業新潮 Vol. 50　No.1		
大阪五輪の招致と成功のカギ	単著	2001年2月	イグザミナ ２月号		
Sports Management 6 「プロスポーツにおけるクラブ事業の本質」	単著	2001年3月	月刊体育施設 No. 3		P. 14-16

オリンピックにおける放映権とインターネット権の展開をIOCセミナーから見る	単著	2001年4月	月刊ニューメディア		
オリンピックにおける放映権とインターネット権の展開をIOCセミナーから見る	単著	2001年4月	月刊ニューメディア		
1日1万歩が身体にいい理由	単著	2001年4月	歩くマガジン「WALK」関西版 2001年春夏号		
Sports Management 7 「プロスポーツにおけるクラブ事業の活性化」	単著	2001年5月	月刊体育施設 No. 5		P. 84-86
Sports Management 8 「プロスポーツ経営に習うアマチュアスポーツの振興」	単著	2001年7月	月刊体育施設 No. 7		P. 34-36
Sports Management 9 「プロスポーツが提供する商品の本質 」	単著	2001年9月	月刊体育施設 No. 9		P. 72-74
Sports Management 10 「プロスポーツビジネスにおける経験価値マーケティング①」	単著	2001年11月	月刊体育施設 No. 10		P. 64-66
Sports Management 11 「プロスポーツビジネスにおける経験価値マーケティング②」	単著	2002年1月	月刊体育施設 No. 1		P. 56-58
Sports Management 12 「プロスポーツと公共体育施設 -プロレス経営学」	単著	2002年3月	月刊体育施設 No. 3		P. 22-24
Sports Management 13 「プロスポーツと公共体育施設 -大相撲の地方巡業」	単著	2002年5月	月刊体育施設 No. 5		P. 46-48
ワールドカップを楽しむ	単著	2002年5月	産経新聞 5月22日夕刊		
ワールドカップを楽しむ	単著	2002年5月	産経新聞 5月29日夕刊		
ワールドカップを楽しむ	単著	2002年6月	産経新聞 6月5日夕刊		
ワールドカップを楽しむ	単著	2002年6月	産経新聞 6月12日夕刊		
Sports Management 14 「アマチュアスポーツと公共施設：バスケットボール」	単著	2002年9月	月刊体育施設 No. 9		P. 50-52
メガイベント開催時のピーク需要考慮した10スタジアム	単著	2002年10月	月刊体育施設 No. 10		P38-40

Sports Management 15 「サッカースタジアムとイベント（前編）東北アジアにおける統合サッカー市場の出現」	単著	2002年11月	月刊体育施設 No. 11		P. 18-20
Sports Management 16 「サッカースタジアムとイベント（後編）東北アジアの統合サッカー市場がもたらすベネフィット」	単著	2003年1月	月刊体育施設 No. 1		P. 40-42
Sports Management 17 「スポーツ施設の固定的な媒体価値を利用した権利ビジネス」	単著	2003年3月	月刊体育施設 No. 3		P. 70-73
Sports Management 18 「転換期にある日本のスポーツ：クラブ経営のパラダイムシフト」	単著	2003年7月	月刊体育施設 No. 7		P. 42-44
Sports Management 19 「企業スポーツと地域スポーツのクラブ事業化」	単著	2003年9月	月刊体育施設 No. 9		P. 54-56
Sports Management 20 「クラブ事業のマネジメント」	単著	2003年11月	月刊体育施設 No. 11		P. 56-58
スポーツビジネス入門　第１回 「日本の余暇政策とスポーツ行動(1)」	単著	2003年5月	月刊体育施設 No. 5		P. 30-32

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和60年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和60年～現在に至る	日本レクリエーション学会理事
昭和61年～現在に至る	世界レジャー・レクリエーション学会会員
平成元年～現在に至る	日本体育スポーツ経営学会理事
平成２年～現在に至る	日本スポーツ産業学会運営委員
平成５年～現在に至る	オーストラリア・ニュージーランド・レジャー研究誌編集委員
平成５年～現在に至る	レジャー・マネジメント国際ジャーナル誌編集委員（イギリス）
平成８年～現在に至る	ヨーロッパスポーツマネジメント学会会員
平成９年～現在に至る	北米スポーツ・マネジメント学会会員
〈海　外〉	
平成11年６月	北米スポーツ・マネジメント学会発表（アメリカ）
〈国　内〉	
平成３年～現在に至る	（財）日本レジャースポーツ振興協会評議員
平成３年～現在に至る	（財）関西テレビ青少年育成事業団評議員
平成３年～現在に至る	宝塚市スポーツ振興審議会委員
平成６年～現在に至る	大阪オリンピック基本理念策定委員会委員
平成７年～現在に至る	スポーツ振興基金審査委員

平成11年～現在に至る	（財）大阪府青少年野外活動振興協会評議員
平成11年～現在に至る	大阪府青少年問題協議会委員
平成11年～現在に至る	大阪オリンピック招致委員会専門委員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	廣橋　賢次	（有・無）

I　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書 13名の教員により、日常の健康と傷害に留意するように“学生の健康手帳”を作成した	平成14年4月	この手帳の内容はスポーツ医学、科学、救急処置など、体育大生に対する多面的対応の項目が含まれている
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
全日本柔道連盟におけるアンチドーピング活動	共著	1999年	日本臨床スポーツ医学会誌	海老根東雄 高橋邦雄 廣橋賢次　他12名	7：278-289
特集/変形性膝関節症に対する理学療法	共著	1999年	骨・関節・靭帯	北村嘉雄 廣橋賢次	12：1341-1347
足関節テーピングとブレースの装着が内反ストレスに対する腓骨筋の反応時間に及ぼす影響	共著	1999年	関西臨床スポーツ医学研究会誌	島　広典 廣橋賢次	9：37-38

Radiographic Changes after Chiari Pelvic Osteotomy. -From over 20-year follow-up Study-.	共著	1999年	"Treasuury of Hip Surgery" Memorial Issue for the 26th Japanese Hip Society Meeting	Ohashi, H Yamano, Y Hirohasi,k	30-31
柔道における頭部外傷および脊椎・脊髄損傷について	単著	2000年	骨・関節・靭帯		13:3 ; 239-246
Factors Influencing the Outcome of Chiari Pelvic Osteotomy : A long-term follow-up.	共著	2000年	J Bone Joint Surg	Ohashi,H Hirohashi,K Yamano,Y	82-B : 517-525
特集/成人股関節障害のリハビリテーション　股関節障害へのリハビリテーションアプローチ 1　変形性股関節症	共著	2000年	J Clin Rehab	廣橋賢次 大橋弘嗣 古谷逸夫	9 : 6 ; 560-568
Chiari　手術後20年以上経過観察しえた症例のレ線変化	共著	2000年	Hip Joint	大橋弘嗣 山野慶樹 廣橋賢次	26 : 31-30
関節弛緩からみた成長期サッカー競技者の特徴	共著	2000年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	中野　卓 廣橋賢次	10 : 13-14
運動選手・非運動者における足部・足関節の機能評価	共著	2000年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	橋本雅至 廣橋賢次	10 : 19-21
シンポジウム/高齢者の健康と体力についての一考察	共著	2000年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	徳久貴男 金尾顕郎 廣橋賢次	10 : 63-65
特集/関節疾患と保存療法 股関節疾患に対する運動療法の位置付けと有効性	共著	2001年	関節外科	廣橋賢次 大橋弘嗣 北村嘉雄	20 : 1536-1548
肥満と股関節症との関係	単著	2001年	整形外科看護		6 : 965-970
柔道選手に生じた陳旧性大胸筋皮下断裂の１例	共著	2001年	関西臨床ｽﾎﾟｰﾂ医科学研究会誌	廣橋賢次 松田英雄 越宗正晃	11 : 37-39
足関節テーピングおよびブレースの装着が運動能力に及ぼす影響	共著	2001年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	島　典広 廣橋賢次 矢部京之助	11 : 5-6
思春期における膝周辺の傷害 －Osgood-Schlatter病と剥離骨折－	単著	2002年	関節外科		21 : 724-739
静的ストレッチングが筋酸素動態に及ぼす影響	共著	2002年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	上中貴文 廣橋賢次	12 : 5-7
下肢荷重位トレーニングにおける筋活動について	共著	2002年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	橋本雅至　小柳磨毅 木村佳記　廣橋賢次	12 : 11-13

高齢者の健康と体力についての一考察 －第２報－	共著	2002年	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌	徳久貴男 金尾顕郎 廣橋賢次	12：31-33
関節の健康－変形性股関節症の運動療法を中心に－	単著	2004年	若さの栄養		119：10-17
Chiari法のポイント Chiari法の成績に影響を及ぼすポイント	共著	2004年	関節外科	大橋弘嗣 廣橋賢次	23：4；137-143
捻挫の現場での応急処置としてのテーピング	共著	2004年	M B Orthop	橋本雅也 小柳磨毅 廣橋賢次	17(6)：57-65
THRを要した例からみた股関節運動療法の適応の検討	共著	2004年	Hip Joint	大橋弘嗣　小林章郎 松下直史　廣橋賢次	30：176-180
その他					
私のスポーツ遍歴	単著	2002年	櫂		6号：8-16
発表					
Ischemic Necrosis Arising from Treatment of CDH or DDH and its Evaluation based on our Classification.		1999年4月	At The 21st SICOT Meeting,at Sydney,Australia	Hirohashi,K　Kitano,T Ohashi,H　Koike,T	
主題/年長児先天股脱(5歳以上)症例の長期成績		2003年11月	第15回小児整形外科学会　東京	廣橋賢次　北野利夫 酒井俊幸　今井裕記 和田麻由子　高岡邦夫	
主題/治療に難渋した先天股脱臼３症例の長期成績について		2003年11月	第15回小児整形外科学会　東京	廣橋賢次　北野利夫 酒井俊幸　今井裕記 和田麻由子　高岡邦夫	

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

[国際学会]	
昭和60年～現在に至る	Societé Internationalé de Chirurugie, Orthopedie et de Traumatologie (SICOT)（国際整形外科・災害外科学会）
昭和51年９月～現在に至る	Western Pacific Orthopaedic Association
[加入学会・研究会]	
昭和37年～現在に至る	日本整形外科学会
昭和38年～現在に至る	日本手の外科学会
昭和40年～現在に至る	日本リハビリテーション医学会
昭和43年～現在に至る	日本体力医学会（評議員）
昭和46年～現在に至る	日本小児整形外科学会（評議員、同学会誌編集委員）
昭和46年～現在に至る	日本臨床スポーツ医学会（幹事、第３回学会の実行委員）
昭和46年～現在に至る	日本整形外科スポーツ医学会（幹事）（同編集委員　H.15.4月～現在）

昭和46年～現在に至る	日本股関節学会
昭和46年～現在に至る	日本肩間節学会
昭和46年～現在に至る	日本義肢装具学会
昭和46年～現在に至る	日本理学診療医学会
昭和46年～現在に至る	小児股関節研究会（幹事、第２５回（１９８６）本会会長、主催）
昭和46年～現在に至る	運動療法研究会（理事）
昭和46年～現在に至る	近畿小児整形外科懇話会（幹事、第５回（１９８９）本会会長、主催）
昭和46年～現在に至る	九州スポーツ医科学会（幹事）
昭和46年～現在に至る	Almani member of The University of Connecticut Orthopaedic Club
［その他の委員］	
昭和58年４月～現在に至る	全日本柔道連盟医科学委員・特別委員
昭和58年４月～現在に至る	日本医師スポーツ協会理事
昭和58年４月～現在に至る	全日本医師柔道連盟理事
昭和58年４月～現在に至る	大阪府柔道整復師会顧問医師
昭和58年４月～現在に至る	大阪府柔道連盟評議員
昭和58年４月～現在に至る	大阪府学生柔道連盟副会長
昭和61年８月～現在に至る	大阪府農業協同組合連合会、外科系特別査定医

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	福田　芳則	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項	2004年3月13日	「スポーツキャンプ2004」生涯スポーツ学科学生主導の地域交流モデル事業の企画・実施を実行委員長として統括した

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
大学生の余暇に関する調査研究（Ⅱ） -大阪体育大学学生を対象として-	共著	1999年7月	大阪体育大学紀要　第30巻	池島明子 福田芳則	P. 71-83
海洋性キャンプ参加者の海兵活動体験とプログラム満足度	共著	2003年3月	日本キャンプ協会キャンプ研究6号 2巻	久保和之 谷　健二 福田芳則	P. 21-26
野外活動施設の選択要因に関する研究	共著	2003年3月	大阪体育大学紀要　第34巻	福田芳則　弘中陽子 福山正和　池島明子	P. 41-54
海洋スポーツキャンプ実習参加者の意識に関する調査・研究	共著	2004年3月	大阪体育大学紀要　第35巻	山辺高大 福田芳則	P. 117-126
野外活動施設の選択要因に関する研究Ⅱ	共著	2004年3月	大阪体育大学紀要　第35巻	福田芳則　山辺高大 浜田祐子　弘中陽子	P. 25-38
その他					
続・これからの野外活動施設を考える		2003年5月	大阪府キャンプ協会研究紀要		P. 3-17

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

昭和52年４月～現在に至る	日本レジャー・レクリエーション学会会員
昭和54年４月～現在に至る	日本体育学会会員
昭和60年４月～現在に至る	大阪市青少年活動協会指導者養成事業（リーダースクール）講師
平成元年４月～現在に至る	熊取町教育委員会社会教育課少年指導者養成事業（シニアリーダー会）講師
平成６年４月～現在に至る	日本レクリエーション協会指導者養成課程認定校研究連絡会議幹事
平成６年４月～現在に至る	大阪市教育振興公社生涯学習インストラクターバンク登録事業認定委員会委員
平成７年４月～現在に至る	大阪府レクリエーション協会２１世紀を考える専門委員会委員
平成８年４月～現在に至る	日本レクリエーション協会公認指導者
平成９年９月～現在に至る	日本キャンプ協会上級指導者
平成９年11月～現在に至る	日本野外教育学会会員
平成11年６月～現在に至る	日本野外教育学会理事
平成12年４月～現在に至る	大阪府キャンプ協会専門委員会委員
平成14年４月～現在に至る	日本レクリエーション協会人材開発委員会委員

所属	大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	職名	教　授	氏名	前島　悦子	大学院の授業担当の有無	（(有)・無）

I　教育活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
エクササイズ―疾病予防のための運動―	共著	2004年1月10日	エルゼビア・ジャパン	監訳　前島伸一郎 前島悦子	
親とコーチのためのスポーツ医学	共著	2004年3月10日	金芳堂	監訳　前島伸一郎 前島悦子	
論文					
Successful pregnancy and delivery in a case of systemic lupus erythematosus treated with immunoads orption therapy and cyclosporin A	共著	1999年	Scand J Rheumatol 第28巻	Maeshima E　Yamada Y Kodama N　Mune M Yukawa S	P. 54-57

Massive gastro intestinal hemorrage in a case of a myloi dosis secondary to rheumatoid arithritis	共著	1999年	Scand J Rheumatol 第 28 巻	Maeshima E　Yamada Y Kodama N　Mune M Yukawa S	P. 262-264
構成障害のリハビリテーション	共著	1999年6月	臨床リハ 第8巻6号	前島伸一郎　前島悦子 松本明子　上好昭孝	P. 504-508
Fever and leucopenia with steroid	共著	2000年1月	Lancet 第355巻（9199号）	Maeshima E　Yamada Y Kodama N　Mune M Yukawa S	P. 198
Behcet's disease complicated by IgA nephropathy and interstitial nephritis	共著	2000年	Clin Exp Nephrol 第4巻	Maeshima E　Nakamura Y Otani H　Yamada Y Mune M　Yukawa S	P. 257-260
幼少期より血小板減少を呈し、消化管出血の精査加療目的で入院した43歳の男性 （誌上討論）	単著	2000年2月	内科専門医会誌 第12巻1号		P. 153
慢性関節リウマチと腎障害	共著	2001年9月	臨床リウマチ 第13巻3号	前島悦子 佐々木理恵 宗　正敏	P. 169-173
A case of cholesterol embolism with ANCA treated with corticosteroid and cyclophos phamide	共著	2001年7月	Ann Rheum Dis 第 60 巻 7 号	Maeshima E　Yamada Y Mune M　Yukawa S	P. 726
Circumscribed forearm and leg hypesthesia from thalamic storoke	共著	2002年	Eur Neurol 第47巻4号	Maeshima S Maeshima E Itoh N	P. 244-245
Mesalazineによる間質性腎炎の一例	共著	2002年	日腎誌 第44巻4号	大矢昌樹　大谷晴久 木村圭吾　児玉直也 南　良暢　梁　向明 前島悦子　他 3 名	P. 414-419
ステロイド剤にアレルギー反応を呈した全身性エリテマトーデスの一例	単著	2002年3月	和歌山県医師会 医学雑誌 第31巻		P. 44-45
Systemic lupusery the matosus with haemophago cytos:s and severe liver dis order	共著	2002年	Ann Rheum Dis 第 61 巻 8 号	Maeshima E　Kobayashi T, Mune M　Yukawa S	P. 753-754

Progressive systemic Sclerosis-polymyositis overlap syndrome with eosinophilic pleural effusion.	共著	2003年9月	Rheumatol Int 第23巻5号	Maeshima S　Nishimoto T Yamashita M　Mune M Yukawa S	P. 252-254
Effect of environmental changes on oxidative deoxyribonucleic acid(DNA)damage in systemic lupus erythematosus.	共著	2002年9月	Arch Environ Health 第57巻5号	Maeshima E　Liang XM Otani H　Mune M Yukawa S	P. 425-428

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

平成２年９月～現在に至る	日本内科学会認定内科医
平成４年１月～現在に至る	日本リハビリテーション医学会認定臨床医
平成４年６月～現在に至る	日本リウマチ財団登録医
平成４年12月～現在に至る	日本内科学会認定内科専門医
平成５年６月～現在に至る	日本温泉気候物理医学会温泉療法医
平成６年３月～現在に至る	日本リウマチ学会認定医
平成10年10月～現在に至る	日本体育協会公認スポーツドクター
平成12年２月～現在に至る	和歌山膠原病研究会世話人
平成12年９月～現在に至る	日本内科学会近畿地方会評議員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	松坂　寿仁	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)					
著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

III　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)	
平成７年４月～現在に至る	大阪体育大学教授（ドイツ語，外書講読　担当）

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	松村　新也	（有）・無）

I　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)		
教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)					
著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
論文					

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)	
昭和44年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和44年～現在に至る	日本体力医学会会員
昭和56年～現在に至る	日本産業衛生学会会員
平成６年～現在に至る	日本バイオレオロジー学会会員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	教　授	吉田　精二	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)		
教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）	2003年～2004年	授業に関するアンケート調査を実施し、指摘された問題について改善した
2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項	2001年～2007年まで	河内長野市立市民総合体育館運営審議会委員として（運営方法、規約の作成）

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)					
著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
大阪体育大学学生の体力を測る	共著	2000年7月	大阪体育大学紀要　第31巻	淵本隆文　上　勝也 中井俊行　鶴池政明 木谷法子　滝瀬定文 吉田精二　川島康弘	P. 87-94
大阪体育大学学生の体力を測る	共著	2001年7月	大阪体育大学紀要　第32巻	川島康弘　滝瀬定文 吉田精二　淵本隆文 中井俊行　木谷法子 豊岡示朗	P. 127-135

大阪体育大学学生の体力を測る	共著	2002年7月	大阪体育大学紀要　第33巻	吉田精二　淵本隆文 中井俊行　浅井正仁 岡村浩嗣　滝瀬定文 川島康弘　木谷法子 豊岡示朗	P.47-55
大阪体育大学学生の体力を測る	共著	2003年3月	大阪体育大学紀要　第34巻	岡村浩嗣　浅井正仁 中井俊行　淵本隆文 吉田精二　豊岡示朗	P.107-114
インピーダンス法による高精度体成分分析装置を用いた体組成と健康評価法に関する一考察	共著	2004年3月	大阪体育学研究　第42巻 （大阪体育学会）	土肥啓一郎　梅林　薫 上　勝也　滝瀬定文 豊岡示朗　松生香里 松村新也　吉田精二 増原光彦	P.81-91

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

昭和45年～現在に至る	日本体育学会会員
昭和52年～現在に至る	日本体力医学会会員
昭和53年～現在に至る	日本バイオメカニクス学会会員
昭和58年～現在に至る	日本総合健診医学会会員
平成13年～現在に至る	河内長野市立市民総合体育館運営審議会委員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	助教授	土屋　裕睦	（有）・無）

Ⅰ　教育活動　過去5年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） スポーツ心理学 スポーツカウンセリング スポーツとメンタルヘルス メンタルトレーニング論 剣道 健康科学実験実習（メンタルヘルス） 教養演習 メンタルヘルス特論 メンタルヘルス特演	1999.4.1～現在	授業にあたっては、①視聴覚機材の活用、②対話のある授業の推進、③オフィスアワーと教員連絡先（メールアドレス）の明示に努めている。本学FD委員会の「学生による授業評価」の実施以前より、20人以上の授業では「学生による授業ならびに教員の授業態度に関する評価」を実施し、授業方法の改善に努めてきた。

2　作成した教科書、教材、参考書		
スポーツ心理学 スポーツカウンセリング スポーツとメンタルヘルス メンタルトレーニング論 健康科学実験実習（メンタルヘルス） メンタルヘルス特論 メンタルヘルス特演	1999.4.1～現在 〃 〃 〃 〃 〃 〃	一部のテキスト（例：「健康スポーツの心理学」，大修館書店や「メンタルトレーニングワークブック」，道和書院）を除いて、講義ノートと研究資料をA4サイズで作成したものを、授業資料として配布している。これらは学生の経済的負担を軽減するために公刊せず、無償にて配布している。
健康スポーツ指導論・同実習	1999.4.1～現在	「大阪体育大学インターンシップ・マニュアル」（全96頁）を作成し学生に配布している。　現在第２版。
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
1）教育委員会主催の教職員に対するカウンセリング研修 亀岡市教育研究所教職員研修講座講師 岸和田市教育研究所カウンセリング研修会講師 泉大津市教育研究所カウンセリング講座講師 東大阪市教育研究所カウンセリング講座講師	2001.8.3 2003.8.20-21 2003.7.29 2003.7.30	本学の教育実践をもとに現職教員に対し、「教師だからこそできるカウンセリング」「生徒に伝えたいストレスマネジメント」「子どもたちも使えるストレス対処法」「授業に生かすカウンセリング；構成的・グループエンカウンター」等のテーマで講演を行っている。
2）インターンシッププログラムの作成と効果の検討	2000	以下に授業内容の紹介を中心に報告実践について発表している。 土屋裕睦、藤本淳也（2000） 「大阪体育大学におけるインターンシップ・プログラムの試み」 （大阪体育大学紀要，31：121-131）
3）学会資格認定研修会 スポーツメンタルトレーニング指導士資格認定研修会講師 スポーツメンタルトレーニング指導士資格認定講習会講師	2001.9.24 2002.11.14	本学でのメンタルトレーニング指導実践をもとに以下の研修について講師を担当 「メンタルトレーニング指導事例の検討」 「メンタルトレーニングの展開と評価」
4）スポーツカウンセリングルーム活動報告	1999.4.1～現在	年度末に活動報告会を開催し、教育実践についての発表。その内容については実践報告として本学紀要に投稿。
5）日本体育協会主催エンジョイスポーツセミナー講師	2001.7.7	本学での「スポーツ心理学」講義をもとに「メンタルトレーニングを取り入れたスポーツ指導」について講演。
4　その他教育活動上特記すべき事項		
学生相談・カウンセリング業務	1999.4.　1～2000.3.31 2000.4.1～現在	学生相談室・スポーツカウンセリングルームにて世話人。 学生相談室・スポーツカウンセリングルームにて心理カウンセラー（週２日、10時より17時まで）を担当。

II　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
コーチングの心理Q & A	共著	1999.	不昧堂出版	日本スポーツ心理学会（編）	146-147.
「エンカウンターで学級が変わる　高等学校編」	共著	1999.	図書文化	國分康孝（編）	143-147.
「続・構成的グループエンカウンター」,	共著	2000.	誠信書房	國分康孝（編集代表）	147-155.
Sport Facilities in Japan : a Futuristic View.	共著	2000.	Meyer & Meyer Verlag, Aachen.	Roland Naul(ed.)	216-224.
現代カウンセリング事典	共著	2001.	金子書房	國分康孝（編著）	56.
スポーツメンタルトレーニング教本	共著	2002.	大修館	日本スポーツ心理学会（編）	50－56, 101-105, 152-157.
論文					
UPIにおける回答方式変更の影響.		2000.	大阪体育大学紀要	西野明 土屋裕睦	31：39-45
ある大学女子スポーツチームに実施した構成的グループ・エンカウンターの効果.	単著	2001.	スポーツ教育学会第20回記念国際大会論集,		191-194,
大学剣道新入部員の適応支援を目的とした心理的サポートの実践.	共著	2001.	スポーツ教育学研究	奥村基生　土屋裕睦 武藤健一郎　佐藤成明 香田群秀	22-2：93-101,
運動・スポーツ分野における心理学的ストレス研究の動向と課題.	共著	2001.	ストレス科学	岡浩一朗 土屋裕睦 荒井弘和	16-3　：157-167,
大学スポーツ選手の精神的健康とストレス過程に関する研究.	共著	2003.	千葉大学教育学部紀要	西野明 土屋裕睦	51：111-114
大学競泳チームにおける心理的サポートの実践	共著	2003.	大阪体育大学紀要	土屋裕睦 川島康弘 滝瀬定文	34：83-94
我が国におけるメンタルトレーニング指導の現状と課題―関連和書を対象とした文献研究―.	共著	2004.	スポーツ心理学研究	西野明 土屋裕睦	31-1：9-21

その他					
スポーツカウンセリングとクラブ活動.	単著	1999.	櫂		第３号：76-82
1998年度スポーツカウンセリングルーム活動報告.	共著	1999.	大阪体育大学紀要	鈴木壯　中島登代子 山本昌輝　荒木雅信 土屋裕睦	30：135-138,
UPIからみた体育専攻大学生の精神的健康度の特徴.	共著	1999.	大阪体育大学紀要	西野明 土屋裕睦 荒木雅信	30：37-44
スポーツ選手へのソーシャル・サポートの必要性と具体的内容.	単著	1999.	コーチングクリニック		1999-12：19-23
大阪体育大学におけるインターンシップ・プログラムの試み.	共著	2000.	大阪体育大学紀要	土屋裕睦 藤本淳也	31：121-131
1999年度スポーツカウンセリングルーム活動報告.	共著	2000.	大阪体育大学紀要	鈴木壯　中島登代子 山本昌輝　廣瀬幸市 土屋裕睦	31：95-102
スポーツカウンセリングとソーシャル・サポート	単著	2000.	櫂		第４号：25-29
スポーツカウンセリングとメンタルトレーニング.	単著	2001.	櫂		第５号：60-66
2000年度学生相談室・スポーツカウンセリングルーム活動報告.	共著	2001.	大阪体育大学紀要	鈴木壯　中島登代子 山本昌輝　廣瀬幸市 土屋裕睦	32：137-147
日本体育学会大会スケッチ―体育心理学―.	単著	2001.	体育の科学		51-2：143-145
メンタルトレーニングの評価―その考え方と評価―.	単著	2001.	体育の科学		51-11：862-867
2001年度学生相談室・スポーツカウンセリングルーム活動報告.	共著	2002.	大阪体育大学紀要	土屋裕睦　鈴木壯 山本昌輝　廣瀬幸市	33：57-67
スポーツカウンセリングとチームビルディング.	単著	2002.	櫂		第７号：57-65
2002年度学生相談室・スポーツカウンセリングルーム活動報告.	共著	2003.	大阪体育大学紀要	土屋裕睦　山本昌輝 廣瀬幸市　高橋幸治 樋口幸代	35：157-172
チームワーク向上のためのメンタルトレーニング.	単著	2003.	体育科教育		９：62-63
こころのコンディショニング.	単著	2004.	剣道時代		381：70-73
Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)					
昭和63年４月～現在に至る	日本体育学会会員				

平成４年４月～現在に至る	日本スポーツ心理学会
平成５年４月～現在に至る	日本武道学会会員
平成５年４月～平成13年３月	臨床スポーツ心理研究会事務局
平成７年４月～現在に至る	日本心理学会会員
平成８年４月～現在に至る	スポーツ教育学会会員
平成８年４月～現在に至る	日本カウンセリング学会会員
平成10年７月～現在に至る	日本心理臨床身体運動学会会員
平成11年４月～平成12年３月	大阪府青少年問題協議会
平成11年４月～現在に至る	「認定カウンセラー」（日本カウンセリング学会認定資格、第249号）　取得
平成12年４月～平成14年３月	大阪体育学会　会長推薦理事（会計担当）
平成12年４月～現在に至る	日本スポーツ心理学会資格認定特別委員（常務委員）
平成12年４月～現在に至る	「スポーツメンタルトレーニング指導士」（日本スポーツ心理学会認定資格、第10号）　取得
平成14年４月～平成16年３月	日本体育学会体育心理専門分科会理事

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	助教授	藤本　淳也	（有・無）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・「演習」では、研究発表やフィールドワークを重視している。		・演習におけるフィールドワークは、「Ｊリーグ観客調査（実施、集計、報告書作成）」を毎年、「プロ野球観客調査（実施、集計、報告書作成）」を隔年程度の頻度で実施している。また、平成14年度には、韓国のヨンセイ大学と交流プログラムを実施した。
・「スポーツマーケティング」では、スポーツビジネスの現状に関する情報提供を重視している。		・スポーツマーケティングでは、一般新聞、日経流通新聞、Sport Business Journalなどを中心に、スポーツビジネスやマーケティング能力を高めるために有効な情報を収集し、毎週提供すると共に解説を加えている。
・「スポーツ行動分析法」では、特にスポーツ消費者を対象としたリサーチ能力を高めるため、その理論と同様にリサーチプランの作成を重視している。		・スポーツ行動分析法では、リサーチプラン作成能力を養うため、二次的データの収集と分析、現状の把握、問題点の把握、リサーチの必要性の確認、目的と仮説の設定、リサーチ方法の検討、調査用紙の作成という一連のプロセスをレポートにまとめ提出をさせている。
・「レクリエーションⅡ（実技）」では、指導能力を高めるためのレクリエーション・プログラム立案・実施・評価の体験学習を重視している。		・「レクリエーションⅡ」では、グループ単位でレクリエーション・プログラムを立案し、授業内で実施するとともに、受講者からの量的・質的評価をまとめるというプロセスを体験的に学習させている。

2　作成した教科書、教材、参考書 ・「スポーツマーケティング」大修館書店 ・「新しい軽スポーツのすすめ」杏林書院	 2004年4月 1999年6月	 ・スポーツマーケティングの理論を体系的にまとめた。 著者：原田宗彦、藤本淳也、松岡宏高 ・レクリエーション活動での適応性の高い軽スポーツを数多く紹介し、ルール、指導方法、留意点などについてわかりやすくまとめた。 著者：仲野隆士、原田宗彦 他４名
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

II　研究活動　　過去5年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
改定スポーツ産業論入門	共著	1999年4月	杏林書院	原田宗彦編著、他19名	pp66-80 pp97-111 pp239-251
講座スポーツの社会科学３：スポーツ経営学	共著	1999年8月	杏林書院	池田　勝・守能信次編、他13名	pp159-169
新しい軽スポーツのすすめ	共著	1999年6月	杏林書院	仲野隆士・原田宗彦編著、他4名	pp107-137
やさしいレクリエーション実践：レクリエーションインストラクター養成テキスト	共著	2000年2月	（財）レクリエーション協会	（財）レクリエーション協会編	pp124-129
楽しいをつくる：やさしいレクリエーション実践、演習ノート	共著	2000年2月	（財）レクリエーション協会	（財）レクリエーション協会編	pp38-39
スポーツ白書2010	共著	2001年3月	（財）SSF笹川スポーツ財団	池田勝編著、他21名	pp66-80
生涯スポーツ実践論	共著	2002年10月	市川出版	川西正志・野川春夫編著、他20名	pp45-55
生涯スポーツの社会経済学	共著	2002年11月	杏林書院	池田勝編著、他14名	pp225-234
ジグソーパズルで考える総合型地域スポーツクラブづくり	共著	2002年12月	大修館書店	NPO法人クラブネッツ監修 黒須充・水上博司編著、他43名	pp96-99

スポーツ産業論入門第３版	共著	2003年4月	杏林書院	原田宗彦編著、他18名	pp90-102 pp138-149
論文					
Emotional Changes During Leisure Activity: A case of Elderly Japanese in A Community Program	共著	1999年	Society and Leisure	◎William P. Stewart Junya Fujimoto Munehiko Harada	
大阪体育大学におけるインターンシップ・プログラムの試み	共著	2000年7月	大阪体育大学紀要	◎土屋裕睦 藤本淳也	
潜在的観戦者のマーケット・セグメンテーションに関する研究 － 特に観戦意図に注目して－	共著	2001年7月	大阪体育大学紀要	◎藤本淳也 原田宗彦	
スポーツにおける経済効果	共著	2002年1月	体育の科学	◎藤本淳也 佐々木康	
健康産業のマーケティング：清涼飲料水	単著	2004年2月	体育の科学		
大学運動部の広告価値評価に関する研究	共著	2004年4月	大阪体育大学紀要資料論文	◎古屋孝生 藤本淳也　他４名	
その他					
報告書「臨床スポーツ心理学の構築にむけて」	共著	1999年	大阪体育大学報告書	臨床スポーツ心理学研究会委員分担執筆	
報告書「生涯スポーツ振興戦略としての国民体育大会の役割について」	共著	1999年	文部省科学研究費研究成果報告書	◎原田宗彦 藤本淳也 長積　仁	
スポーツ参加へ導くための情報戦略	単著	1999年	月刊レクリエーション		
報告書「臨床スポーツ心理学の構築にむけて」	共著	2000年	大阪体育大学報告書	臨床スポーツ心理学研究会委員分担執筆	
報告書「体育系大学卒業生のジョブマーケット拡大に関するシンポジウム」	共著	2000年	大阪体育大学報告書	大阪体育大学シンポジウム実行委員分担執筆	
愛されるチームづくりに貢献する「みるスポーツ」のマーケティング	単著	2000年	蛍雪時代臨時増刊号		
北米スポーツマネジメント学会第14回学会大会参加報告	単著	2000年	体育の科学		
企業とスポーツの関わり－スポーツ・スポンサーシップの理論－	単著	2000年	日本広報学会1999年度「企業スポーツ広報」研究会中間報告書		

報告書「女性のスポーツ参与支援システムに関する調査研究」	共著	2002年	JWS報告書	JWS、プロジェクト委員分担執筆	
スポーツマーケティング学会第１回大会参加報告	共著	2004年	体育の科学	◎藤本淳也 永富慎也 松岡宏高	
報告書「体育系大学・学部と地域交流」	共著	2004年	大阪体育大学、私立学校振興共済事業団補助事業報告書	実行委員会委員分担執筆	

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

平成２年４月～現在に至る	日本体育学会会員
平成２年４月～現在に至る	日本スポーツ産業学会会員
平成２年４月～現在に至る	日本体育スポーツ経営学会会員
平成２年４月～現在に至る	北米スポーツマネジメント学会会員
平成13年８月～平成15年３月	JOC選手強化本部情報・戦略専門委員会企業とスポーツ特別プロジェクト作業部会委員
平成14年９月～現在に至る	日本生涯スポーツ学会会員
平成15年11月～現在に至る	スポーツマーケティング学会会員（米国）
平成15年３月～平成16年３月	大阪府スポーツ指導者活用システム検討委員会委員
平成15年４月～現在に至る	（財）八尾体育振興会自主事業検討委員会委員

所属	職名	氏名	大学院の授業担当の有無
大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	助教授	古澤　光一	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
１　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） ・「演習」では、研究発表や企画能力の育成を重視している。 ・「スポーツ施設管理運営論」では、スポーツ施設の管理運営の現状に関する情報提供を重視している。 ・「教養演習Ⅱ」では、特に次年次以降の専門課程においての学習活動に必要な能力の育成を重視している。 ・「レクリエーションⅡ(実技)」では、指導能力を高めるためのレクリエーション・プログラム立案・実施・評価の体験学習を重視している。		・演習における企画力の育成では、スポーツ・レジャー・フィットネスの分野におけるイベントの企画と事業計画の立案をシミュレーションすることで、実践的な知識と能力の育成に努めている。 ・スポーツ施設管理運営論では、公共スポーツ施設、民間スポーツ施設についての管理運営の実際を論ずると供に提供サービスのコンセプト作りや事業収支の考え方について理解するための課題を課している。 ・教養演習Ⅱでは、聴くこと、読むこと、書くこと、発表することの能力を高めることを目的に、毎回ポイントを説明後、各時間内に提出できる課題を課し、次回にフィールドバックするとともに他の授業への学習意欲が増すように努力している。 ・「レクリエーションⅡ」では、グループ単位でレクリエーション・プログラムを立案し、授業内で実施するとともに、受講者からの量的・質的評価をまとめるというプロセスを体験的に学習させている。

2　作成した教科書、教材、参考書		
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去５年間（1999年4月1日～2004年3月31日）

著書・論文等の名　　称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
講座スポーツの社会科学３：スポーツ経営学	共著	1999年8月	杏林書院	池田　勝 守能信次編　他13名	8-2「民間スポーツ・クラブの経営」 P. 170-181
論文					
民間フィットネスクラブの地域スポーツ貢献	単著	2003年9月	体育の科学2003　vol. 53		P. 671～680
その他					
18th TAFISA World Congress 報告書	単著	2004年3月	Trim Japan 2004 spring　№79		P. 37-41

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去５年間（平成11年4月1日～平成16年3月31日）

所属	大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	職名	講　師	氏名	鶴池　政明	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む）		
・平成12年度、本学生涯スポーツ学科健康スポーツ科学コースは（財）日体協認定アスレティックトレーナー適応コースとして承認。以降、毎年2名から6名が検定試験を受験	平成12年	財団法人日本体育協会認定アスレティックトレーナー検定試験において平成15年度までに本学から3名の合格者（三保谷千優、田中健一、松田篤実）を輩出
・トレーニングルーム改築およびアスレティックトレーニング（AT）ルームの増設を本学体力トレーニングセンターと大成建設とで考案、完成する	平成13年	トレーニングルームの改築、増築に伴い、アスレティックリハビリテーションII、テーピング実習 II、アスレティックトレーニング実習Ⅰ、アスレティックトレーニング実習 II を開講
2　作成した教科書、教材、参考書		
・学生トレーナーハンドブック	平成14年4月	平成13年度より本学の資格関連科目で開講しているアスレティックトレーニング実習ⅠおよびⅡの手引書として作成。本書では受講生の学期中の活動スケジュール、各部位の外傷・障害に関した口頭評価試験（6回）、学生トレーナーに課する日誌および外傷障害記録の記入の仕方の説明を含む（A4サイズ64頁）
・テキストアスレティックリハビリテーション	平成16年4月	本学の関連科目で開講しているアスレティックリハビリテーションのテキストとして作成。テキストは10章の構成され、治癒過程からアイシングそしてアスレティックリハビリテーションの概念などの説明、後半部は事例による各論の諸問題の説明を含む（A4サイズ83頁）
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等		
・女子バスケットボール選手と膝外傷.櫂 第4号 大阪体育大学 コーチ教育	平成12年2月	バスケットボールの運動特異性、女性の骨格形成から考えられる下肢の諸問題、膝傷害の代表の1つ半月版損傷についてまとめた。特に半月版損傷について保存療法と手術療法の比較を検討　（6頁）
・アスレティックトレーニング－事例からみた足部外傷－.櫂 第5号 大阪体育大学 コーチ教育	平成13年3月	スポーツ選手の足部、足関節傷害について扁平足、甲高足など骨形成の異常がもたらす影響を説明した報告書　（6頁）
・けがの痛みによるマネジメント－アスレティックトレーニング－.櫂 第6号 大阪体育大学 コーチ教育	平成14年3月	本学女子バスケットボール部の選手が公式戦で受けたけがをどのようにマネジメントしたかをまとめた。けがには腓骨骨折、後十字靭帯断裂、足部靭帯損傷、肩衝突症候群を含む　（8頁）

・大阪体育大学・アスレティックトレーニングルームと全国学生トレーナーの集い．櫂 第７号 大阪体育大学 コーチ教育	平成15年3月	第5回全国学生トレーナーの集いを本学で2日間に掛けて開催した内容の報告書。本文では2日間に述べ230名以上の学生、指導・引率教員さらには協賛企業者ら一堂に集まり、アスレティックトレーニングに関するさまざまな現状と課題が話された内容をまとめた。また本学の教育とその施設の紹介を含む　(7頁)
・一枚岩　アスレティックトレーニング．櫂 第８号 大阪体育大学 コーチ教育	平成16年3月	事例報告。バスケットボールの選手が半月板損傷を受傷した。半月板の保存療法を担当医師、チーム監督そしてチームのアスレティックトレーナーが協力して取り組んだ流れ、そしてその成果を報告。事例を通じてスポーツ障害の一面を詳細に説明　(6頁)
4　その他教育活動上特記すべき事項 NATA 卒業生座談会アメリカで受けた教育をもとに日本のスポーツ現場を考える．医道の日本臨時増刊 No. 9:152-168	平成14年10月	アメリカでアスレティックトレーニング教育を受けた者がどのように日本のスポーツ界で貢献できるのか、また教育を普及できるのかを議論した記録書。内容にはアメリカでの教育、スポーツシステムの違い、さらには留学から就職まで多岐に渡る比較討論を含む　(鶴池、山本、八田、山下　17頁)

II　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
論文					
Conditioned patellar tendon-tap reflexes corresponding muscle strength deficit due to ACL reconstruction	共著	1999 年 5 月	International Journal of Sports Medicine, 20:263-266	Tsuruike Koceja	4頁
加齢に伴う H 反射の変化 －伏臥位と直立姿勢－	単著	2000 年 5 月	大阪体育大学紀要第 31 巻:115-120		6頁
損傷した腱・靭帯の治癒過程	共著	2001 年 7 月	大阪体育大学紀要第 32 巻:149-157	鶴池 上	9頁
スポーツ科学の立場からスポーツ現場におけるリハビリテーションと予防トレーニングについて	単著	2002 年 1 月	スポーツ傷害フォーラム会報誌 7:45-49		5頁
日本におけるアスレティックトレーナー認定資格とその検定試験の現状と課題－トレーナー養成教育の展望－	単著	2002 年 7 月	大阪体育大学紀要第 33 巻:29-38		10頁

Age comparison of H-reflex modulation with the Jednrassik maneuver and postural complexity	共著	2003 年 5 月	Clinical Neurophysiology, 114:945-953	Tsuruike Koceja Yabe Shima	9頁
その他（研究助成金）					
加齢に伴うH(Hoffmann)反射の考察 ー疲労、筋収縮様式、視覚の影響ー	単著	2000年	科学研究費補助金奨励研究（A）		

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

平成 10 年 5 月～現在に至る	National Athletic Trainers' Association 公式機関誌 Journal of Athletic Training 編集委員（Editorial Board）
平成 11 年 9 月	Modulation of the soleus H-reflex from prone to standing in young and old 共著　Advances in Exercise and Sports Physiology, 5(4):180　日本体育学会第 50 回大会（於東京大学）日本運動生理学会第 7 回大会において口頭発表（Tsuruike, Kami, Ishikawa　1 頁）
平成 11 年　7 月	関西学生アメリカンフットボール連盟の安全対策講習会講師
平成 11 年 10 月	テニス医科学・コーチング組織委員会テニス医科学・コーチングフォーラム講師
平成 11 年 12 月	熊取町教育委員会高齢者教室講師
平成 12 年　2 月・12 月	高槻市教育委員会スポーツ振興課生涯スポーツ指導者育成講座講師
平成 12 年　2 月	(財)大阪市スポーツ振興協会生涯スポーツ指導者育成講習会講師
平成 12 年　3 月	和歌山県教育委員会運動部学部指導者研究会講師
平成 12 年　6 月	Postural modulation of the soleus H-reflex with the Jendrassik Maneuver in young and elderly subjects 共著　Medicine and Science in Sports and Exercise Supplement, 32:S1391　アメリカスポーツ医学（ACSM）第 47 回年次総会（於アメリカ・フロリダ州オーランド市）においてポスター発表（Tsuruike, Koceja　1 頁）
平成 12 年　7 月・12 月	National Strength & Conditioning Association Japan ワークショップ講師
平成 12 年 7 月	高齢者と若年者の Jendrassik Maneuver を用いた姿勢によるヒラメ筋 H 反射の変動 単著　合同学会大会大阪 2000 論集，283　日本バイオメカニクス学会第 16 回大会・日本運動生理学会第 8 回大会合同大会（於大阪体育大学）においてポスター発表（1 頁）
平成 12 年 11 月	京都府教育庁指導部保健体育課学校体育運動部課外指導者研修会講師
平成 13 年　2 月	茨木市教育委員会スポーツ指導員養成・認定講習会講師
平成 13 年　3 月	測定筋の筋収縮と上肢筋収縮同時によるヒラメ筋 H 反射の変動 単著　大阪体育学研究 39:18　大阪体育学会 10 周年記念大会（於大阪市）において口頭発表（1 頁）
平成 13 年 6 月	Modulation of the soleus H-reflex with Jendrassik maneuver during voluntary contraction of the corresponding muscle 共著　Journal of Athletic Training Supplement, 36:S103　全米アスレティックトレーナーズ協会（NATA）第 50 回年次総会（於アメリカカリフォルニア州ロスアンゼルス市）においてポスター発表（Tsuruike, Koceja　1 頁）
平成 13 年　8 月	National Strength & Conditioning Association Japan ワークショップ講師
平成 13 年 10 月	(財)日本体育協会Ｂ級スポーツ指導員養成講習会講師
平成 13 年 11 月	京都府教育委員会平成13年度運動部活動外部指導者研修会講師
平成 13 年 12 月	高槻市教育委員会スポーツ振興課生涯スポーツ指導者育成講座講師

平成 13 年 12 月	Modulation of the soleus H-reflex with Jendrassik maneuver during voluntary contraction of the corresponding muscle in young and elderly subjects 単著　Advances in Exercise and Sports Physiology, 7 (4):157　日本運動生理学会第 9 回大会（於日本体育大学）においてポスター発表（1 頁）
平成 14 年　1 月	第 7 回スポーツ傷害フォーラムシンポジウムシンポジスト
平成 14 年　1 月・8 月	National Strength & Conditioning Association Japan ワークショップ講師
平成 14 年　2 月	老人大学講師
平成 14 年　3 月	全国学生トレーナーの集い第 5 回大会主催学生運営指導
平成 14 年　3 月	大阪体育大学公開シンポジウム「競技力向上と選手のサポートを考える―大学スポーツへの提言―」シンポジスト
平成 14 年　3 月～任期 3 年間	日本アスレティックトレーナーズ機構（JATO)理事
平成 14 年　7 月	カレッジスポーツのマネジメントに関する研究－全米 Div. I 体育局の運営事例－ 共著　スポーツ産業学研究第 11 回学会大会号、55-57　日本スポーツ産業学会第 11 回大会（於早稲田大学）において口頭発表（鶴池、藤本 3 頁）
平成 14 年 10 月	兵庫県立伊丹北高校 進路校外学習に協力
平成 14 年 11 月	(財)日本体育協会Ｂ級スポーツ指導員養成講習会講師
平成 14 年 11 月	OSPA スポーツ大学講師
平成 14 年 12 月	大阪体育大学地域交流部会交流事業として大阪市立桜宮高校・運動部顧問会議講師
平成 14 年 12 月	高槻市教育委員会スポーツ振興課生涯スポーツ指導者育成講座講師
平成 14 年 12 月	伸張性筋収縮および他動ストレッチ直後における短縮性筋収縮の潜在性発揮能力 共著　体力科学、51(6):557　日本体力医学会第 57 回大会（於高知市）においてポスター発表（鶴池、島、矢部　1 頁）
平成 15 年　2 月	老人大学講師
平成 15 年　5 月	Changes in the amplitude of M-max with different joint angles in the prone position 共著　Medicine and Science in Sports and Exercise Supplement, 35:S280　アメリカスポーツ医学（ACSM）第 50 回年次総会（於アメリカ・カリフォルニア州サンフランシスコ市）においてポスター発表（Tsuruike, Shima, Koceja, Yabe 1 頁）
平成 15 年　6 月	「B&G 海洋レクリエーション指導員」アクア・インストラクター養成研修に係る講師
平成 15 年　7 月	“柔道整復師スポーツボランティア制度”京都講習会講師
平成 15 年　9 月	最大筋力発揮後のＨ反射に及ぼす関節角度の影響 共著　日本体育学会第 54 回大会抄録集　日本体育学会第 54 回大会（於熊本大学）においてポスター発表（島、前田、鶴池、太田、福島、矢部 1 頁）
平成 15 年 11 月	(財)日本体育協会Ｂ級スポーツ指導員養成講習会講師
平成 15 年 11 月	大阪体育大学地域交流部会交流事業として大阪市立桜宮高校・運動部顧問会議講師
平成 15 年 11 月	高槻市教育委員会スポーツ振興課生涯スポーツ指導者育成講座講師
平成 15 年 12 月	異なる関節角度における M-max 値の変化－伏臥位 共著　体力科学 52(6):832　日本体力医学会第 58 回大会（於静岡市）においてポスター発表（鶴池、矢部 1 頁）

所属	大阪体育大学 体育学部　生涯ｽﾎﾟｰﾂ学科	職名	講　師	氏名	松永　敬子	大学院の授業担当の有無	（有・(無)）

Ⅰ　教育活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

教育実践上の主な業績	年月日	概　　要
1　教育内容・方法の工夫（授業評価等を含む） ・演習では、研究発表やフィールドワーク、マネジメントの実践などを行っている。 ・レクリエーション概論では、レクリエーション理論だけでなく、マネジメントの視点も重視している。 ・レクリエーションⅠ（実技）では、前期は道具を使用しないコミュニケーションゲーム、後期は道具を使用するニュースポーツや軽スポーツなどを中心に体験する。		・演習におけるフィールドワーク（マネジメントの実践）では、地域に開かれた大学として、地元熊取町の子どもたちを対象にスポーツイベントの企画・運営・評価を実践している。 ・レクリエーション概論では、レクリエーションの歴史や基本的な考え方だけではなく、現代社会における課題とレクリエーションの役割にも注目し、理論のみならず、企画書の作成などマネジメントについても深く学ぶ。 ・レクリエーションⅠ（実技）では、前期は道具を使用しないアイスブレーキングからコミュニケーションゲーム、課題解決プログラムなどを体験する。後期は、道具を使用するニュースポーツや軽スポーツなどを中心に体験する。
2　作成した教科書、教材、参考書 ・「新しい軽スポーツのすすめ」杏林書院	1999年6月	レクリエーション活動での適応性の高い軽スポーツを数多く紹介し、ルール、指導方法、留意点などについて分かりやすくまとめた。 仲野隆士・原田宗彦編著、松永敬子　他13名
3　教育方法・教育実践に関する発表、講演等 日本レクリエーション協会公認指導者養成課程認定校研究連絡会議　平成16年度全国集会事例・研究発表 「地域と連携したレクリエーションイベント・マネジメントの実践授業事例」	2004年10月	日本レクリエーション協会公認指導者養成課程認定校研究連絡会議の平成16年度全国集会事例・研究発表として、松永ゼミ生の取り組みを「地域と連携したレクリエーションイベント・マネジメントの実践授業事例」と題し発表した。
4　その他教育活動上特記すべき事項		

Ⅱ　研究活動　　過去5年間(1999年4月1日～2004年3月31日)

著書・論文等の名称	単著・共著の別	発行または発表の年月（西暦でも可）	発行所、発表雑誌（及び巻・号数）等の名称	編者・著者名（共著の場合のみ記入）	該当頁数
著書					
改訂スポーツ産業論入門	共著	1999年4月	杏林書院	原田宗彦 編著 松永敬子　　他18名	pp. 332-347

新しい軽スポーツのすすめ	共著	1999年6月	杏林書院	仲野隆士・原田宗彦 編著 松永敬子　　他13名	pp. 9-26, pp. 65-80
新しい軽スポーツの社会科学３：スポーツ経営学	共著	1999年8月	杏林書院	池田　勝・守能信次 編 松永敬子　　他3名	pp. 195-199
総合型地域スポーツクラブマネジャー養成講習会テキスト	共著	2001年3月	文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課	(財)日本スポーツクラブ協会編著 (文科省委嘱) 松永敬子　　他28名	pp. 88-95
目で見る女性スポーツ白書	共著	2001年4月	大修館書店	井谷惠子・田原淳子・來田享子編著 松永敬子　　他10名	pp. 119-142
レクリエーション・コーディネーター養成テキスト	共著	2001年4月	(財)日本レクリエーション協会	(財)日本レクリエーション協会編	pp. 187-196
生涯スポーツの社会経済学	共著	2002年11月	杏林書院	池田　勝 編著 松永敬子　　他13名	pp. 122-134
テキスト総合型地域スポーツクラブ	共著	2002年12月	大修館書店	日本体育・スポーツ経営学会編 松永敬子　　他10名	pp. 125-133
ジグゾーパズルで考える総合型地域スポーツクラブ	共著	2002年12月	大修館書店	NPO法人クラブネッツ監修 黒須　充・水上博司 編著 松永敬子　　他43名	pp. 34-39
総合型地域スポーツクラブマネジャー養成講習会テキスト改訂版	共著	2003年3月	文部科学省スポーツ・青少年局生涯スポーツ課	(財)日本スポーツクラブ協会編著 (文科省委嘱) 松永敬子　　他28名	pp. 91-97
富山県生涯スポーツ指導員養成講習会テキスト	共著	2003年3月	富山県教育委員会	富山県教育委員会編 松永敬子　　他13名	pp. 106-112
スポーツ産業論入門 第3版	共著	2003年4月	杏林書院	原田宗彦 編著 松永敬子　　他18名	pp. 274-289
テキスト総合型地域スポーツクラブ増補版	共著	2003年4月	大修館書店	日本体育・スポーツ経営学会編 松永敬子　　他10名	pp. 125-133
国民福祉辞典	共著	2003年12月	金芳堂	硯川眞旬 監修 松永敬子　　他205名	pp. 188
論文					
民間スポーツ施設における潜在利用者の特性に関する研究	単著	1999年12月	文教大学人間科学部紀要人間科学研究第 21 号	◎松永敬子	pp. 121-130
まちづくりとしての総合型地域スポーツクラブの役割：地域とクラブの統御に求められる「場」のマネジメント	共著	1999年12月	徳島大学総合科学部人間科学研究	◎長積　仁 冨山浩三 松永敬子	pp. 37-47
スポーツ・メディア考	単著	2000年3月	現代風俗学研究第 6 号・2000	◎松永敬子	pp. 91-96
スポーツ振興くじの意義と可能性	単著	2001年3月	文教大学生活科学研究第 23 集	◎松永敬子	pp. 67-76

総合型地域スポーツクラブ設立における組織間のコンフリクトの類型化	単著	2002年3月	日本体育・スポーツ経営学研究 第17巻1号	◎冨山浩三 長積　仁 松永敬子	pp. 49-59
総合型地域スポーツクラブ役割ークラブハウスの確保とその経緯に注目してー	単著	2003年3月	大阪体育大学紀要	◎松永敬子	pp. 95-105
総合型地域スポーツクラブ育成をめぐる受益者負担の問題：会費設定における金額の意味解釈	共著	2003年12月	徳島大学総合科学部人間科学研究	◎長積　仁 松永敬子 冨山浩三	
その他					
＜雑誌・報告書＞ 各地の総合型地域スポーツクラブを訪ねて：モデル事業終了地域から何が見える	単著	1999年10月	みんなのスポーツ 10月号	日本体育社	pp. 26-29
自立と共生をめざした総合型地域スポーツクラブの経営戦略	共著	2000年3月	平成10～11年度 文部科学研究成果報告書	◎長積　仁　　冨山浩三 松永敬子　　原田宗彦	総36頁中4頁を担当
生涯スポーツのすすめ：生涯スポーツをはじめましょう	単著	2000年4月	香川県教育委員会 『みんなで楽しくスポーツを』 №231		1頁
総合型地域スポーツクラブに求められるスポーツ組織の連携とそのあり方	単著	2000年6月	指導者のためのスポーツジャーナル　6月号	(財)日本体育協会	pp. 16-20
「総合型地域スポーツクラブ」育成マニュアル	共著	2001年4月	文部科学省	文部科学省編	
国際学会レポート：北米スポーツマネジメント学会第16回大会報告	共著	2001年8月	体育の科学　第51巻	杏林書院	
住民の意識改革の重要性・必要性：行政主導から住民主導へ	単著	2001年11月	みんなのスポーツ 11月号	日本体育社	pp. 15-17
総合型地域スポーツクラブ設立・育成ガイドブッグ	共著	2002年3月	広島県広域スポーツセンター	広島県広域スポーツセンター	pp. 118-137
女性のスポーツ参与支援システムに関する調査研究ーこころとからだの健康づくりをめざす女性のスポーツ参与支援のあり方についてー	共著	2002年3月	NPO法人ジュース（JWS）	NPO法人ジュース（JWS）	pp. 7-33
総合型地域スポーツクラブの基盤づくり：拠点づくりのための基盤づくり	単著	2002年6月	みんなのスポーツ 6月号	日本体育社	pp. 13-15
総合型地域スポーツクラブの現地視察・ヒアリング調査に関する報告書2003	共著	2003年3月	(財)日本体育協会	(財)日本体育協会 総合型地域スポーツクラブ中央研究班	pp. 28-32

スポーツ振興とまちづくりの有機的関係	共著	2003年3月	平成 14 年度文部科学省研究費基盤研究 C 研究成果報告書	◎原田宗彦　長積　仁 藤本淳也　松永敬子	pp. 47-53
大阪市がめざす総合型地域スポーツクラブづくり検討会議報告書	共著	2003年3月	大阪市総合型地域スポーツクラブ育成検討会議	永吉宏英 赤松喜久 松永敬子	pp. Ⅲ1-Ⅲ7
魅力ある総合型地域スポーツクラブの運営：運営者にとっての魅力	単著	2003年6月	みんなのスポーツ６月号	日本体育社	pp. 16-18
総合型地域スポーツクラブの現地視察・ヒアリング調査に関する報告書2004	共著	2004年3月	(財)日本体育協会	(財)日本体育協会 総合型地域スポーツクラブ中央研究班	pp. 43-47

Ⅲ　学会等および社会における主な活動　　過去5年間(平成11年4月1日～平成16年3月31日)

[学会活動]	
平成２年10月～現在に至る	日本体育学会学会員（体育経営管理分科会）
平成３年５月～現在に至る	日本レジャー・レクリエーション学会学会員
平成４年３月～現在に至る	日本体育・スポーツ経営学会学会員
平成８年９月～現在に至る	日本スポーツ産業学会学会員（スポーツマネジメント分科会幹事）
平成12年１月～現在に至る	北米スポーツマネジメント学会学会員
平成14年９月～現在に至る	ヨーロッパスポーツマネジメント学会
[社会的活動]	
平成11年５月～平成13年３月	(財)日本スポーツクラブ協会：文部省委嘱事業「総合型地域スポーツクラブ管理運営員養成に係るカリキュラム開発事業」開発委員会委員
平成11年10月～平成13年３月	文部省体育局：地域スポーツ推進体制等に関する調査研究協力者会議 クラブつくりマニュアル策定委員会臨時委員
平成12年７月～現在に至る	NPO法人クラブネッツ：理事
平成12年12月～平成13年３月	(財)日本体育協会：スポーツ情報システム委員会「スポーツネット」検討ワーキンググループ委員
平成13年２月～平成14年３月	(財)日本レクリエーション協会レクリエーション・コーディネーター学習内容検討委員会検討委員
平成14年８月～現在に至る	尼崎市スポーツ振興審議会委員
平成14年12月～現在に至る	大阪市スポーツ振興審議会委員
平成15年８月～現在に至る	(財)日本体育協会マネジメント資格検討作業班班員

3　専任教員に配分される研究費

（表22）

学部・研究科等	総 額（A）	総 額（B）（除、講座・研究室等の共同研究費）	専任教員数（C）	教員１人当たりの額 ①（A／C）	教員１人当たりの額 ②（B／C）	備　　考
体育学部	74,905,834	28,124,503	54	1,387,145	520,824	
ｽﾎﾟｰﾂ科学研究科	10,386,260	10,091,659	(24)	432,760	420,486	大学院の教員は兼任である。
計	85,292,094	38,216,162	54	1,819,905	941,310	

［注］1　専任教員に助手を含む。
2　15年度の実績。
3　研究費総額（A）には、学科、講座もしくは研究室ごとに支給される研究費も含めて記載。ただし、間接経費は除く。研究費総額（B）には、講座研究費、個人研究費等の名称は問わず、教員個人が専らその研究の用に充てるために支給される経常的経費（図書購入費、機器備品費、研究用消耗品費、アルバイトなどへの謝金等）を記載すること。
4　研究費には旅費を含まない。

4　専任教員の研究旅費

（表23）

学部・研究科等		国外留学		国内留学	学会等出張旅費		備　考
		長期	短期	長　期	国外	国内	
体育学部	総　　額		1,230,000		3,107,781	5,658,540	学会年５回、１回７万円限度
	支給件数		1		19	119	国外は３年以上在職者。
	１人当たり支給額		22,778		57,552	104,788	専任教員数　５４　人(含む大学院)
計	総　　額		1,230,000		3,107,781	5,658,540	
	支給件数		1		19	119	
	１人当たり支給額		22,778		57,552	104,788	専任教員数　５４　人(含む大学院)

［注］1　専任教員に助手を含む。
2　15年度の実績。
3　留学の「長期」は、１年以上のもの、１年未満を「短期」とする。

5　科学研究費の採択状況

（表24）

学部・研究科等	科学研究費								
	平成１４年度			平成１５年度			平成１６年度		
	申請件数(A)	採択件数(B)	採択率(%) B/A*100	申請件数(A)	採択件数(B)	採択率(%) B/A*100	申請件数(A)	採択件数(B)	採択率(%) B/A*100
体育学部	6	3	50%	8	2	25%	7	1	14%

［注］　採択件数には、当該年度新規に採択された件数のみを記載。

6　学外からの研究費の総額と一人当たりの額　（平成１５年度）

（表25）

学部・研究科等	専任教員数	科学研究費補助金			その他の学外研究費			合計（A＋B）	専任教員１人当たり合計額
		科学研究費補助金総額（A）	うちオーバーヘッドの額	専任教員１人当たり科研費	その他の学外研究費総額（B）	うちオーバーヘッドの額	専任教員１人当たり学外研究費		
体育学部	55	6,900,000						6,900,000	125,455
合計	55	6,900,000						6,900,000	125,455

7　教員研究室　（平成１６年５月１日現在）

（表26）

学部 研究科	室数			総面積（㎡）（B）	１室当たりの平均面積（㎡）		専任教員数（C）	個室率(%)（A/C*100）	教員１人当たりの平均面積（㎡）（B/C）	備考
	個室(A)	共同	計		個室	共同				
体育学部	58	12	70	1,128.68	12.95	31.44	53	100.00	21.30	
計	58	12	70	1,128.68	12.95	31.44	53	100.00	21.30	

［注］１　「室数」、「総面積」欄には、学部、大学院研究科等の保有する全ての教員研究室について記載。
２　「１室当たりの平均面積」は全ての教員研究室について、「教員１人当たりの平均面積」は、学部、大学院研究科等の専任教員が実際に使用している教員研究室について算出。
３　専任教員数には助手を含まない。
４　健康福祉学部は平成１５年度開設の為、除く。

Ⅵ　施設・設備等

1　校地、校舎、講義室・演習室等の面積

（表27）

校地・校舎				講義室・演習室等	
校地面積（㎡）	設置基準上必要校地面積（㎡）	校舎面積（㎡）	設置基準上必要校舎面積（㎡）	講義室・演習室・学生自習室総数	講義室・演習室・学生自習室総面積（㎡）
134,084㎡	76,866㎡	17,020㎡	12,811㎡	51	3,688

［注］　校舎面積に算入した施設は、講義室、演習室、学生自習室、実験・実習室、研究室、図書館（書庫、閲覧室、事務室）、管理関係施設（学長室、応接室、事務室（含記録庫）、会議室、受付、守衛室、宿直室、倉庫）、学生集会所、食堂、廊下、便所など。

2　学部・大学院研究科等ごとの講義室、演習室等の面積・規模

（表28）

学部・研究科等	講義室・演習室学生自習室等	室数	総面積（㎡）	専用・共用の別	収容人員（総数）	学生総数	在籍学生１人当たり面積（㎡）	備考
体育学部	講義室	12	2,097.00	専門	1,968	1,960	1.07	
		6	1,033.00	共用	1,019	2,207	0.47	短大（学生数247）と共用
	演習室	27	671.00	専門	384	1,960	0.34	
	学生自習室	0	0.00					
ｽﾎﾟｰﾂ科学研究科	講義室	0	0.00					
	演習室	5	97.82	専用	0	53		
	学生自習室	10	261.71	専用	72	53		
	体育館	9	9,064.60	共用				短大（学生数160）と共用
	講堂	0	0.00					

［注］1　大学院研究科との共用関係については、ここには記入せず、「在籍学生１人当たり面積」の算出に当たっても、大学院学生数は除く。
2　「在籍学生１人当たり面積」は、小数点第３位を四捨五入。
3　健康福祉学部は平成１５年度開設の為除く。

3　学部の学生用実験・実習室の面積・規模

（表29）

用途別室名	室数	総面積（㎡）	収容人員（総数）	収容人員１人当たりの面積（㎡）	使用学部等	備考
視聴覚教室	2	362	263	1.38	体育学部・短期大学部	再掲
情報処理学習施設	2	313	156	2.01	体育学部・短期大学部	
生理学関係実習室	3	297	152	1.95	体育学部	
バイオメカニクス関係実習室	2	229	88	2.60	体育学部	
計	9	1,201	659	1.82		

4　大学院研究科の学生用実験・実習室の面積・規模

（表30）

用途別室名	室数	総面積（㎡）	収容人員（総数）	収容人員１人当たりの面積（㎡）	使用研究科等	備考
実験室	5	251.75	160	1.57		
自習室	10	261.71	72	3.63		
計	15	513.46	232			

5　規模別講義室・演習室使用状況一覧表

（表31）

学部名	収容人員	使用教室数	総授業時数	使用度数	使用率（%）	備考
体育学部	1 ～ 50	19	288	93	32%	
	51 ～ 100	9		99	34%	
	101 ～ 250	5		62	22%	
	251 ～ 520	2		34	12%	
計		35		288	100%	
健康福祉学部	1 ～ 50	12	19	4	22%	
	51 ～ 100	2		5	27%	
	101 ～ 250	1		10	51%	
計		15		19	100%	

［注］　使用教室数は、当該学部の正規の授業として使用している教室数を指し、総授業時数とは、１週間の総授業科目のうち、講義室・演習室を使用する全ての授業科目数を示す。なお、使用率は、（使用度数／総授業時数）により算出。

Ⅶ　図書館及び図書等の資料、学術情報

1　図書、資料の所蔵数

（表32）

図書館の名称	図書の冊数　（冊）		定期刊行物の種類（種類）		視聴覚資料の所蔵数（点数）	電子ジャーナルの種類（種類）	備　考
	図書の冊数	開架図書の冊数（内数）	内国書	外国書			
図書館	126,314	51,703	2,167種類	503種類	5,138種類	43種類	
計	126,314	51,703	2,167種類	503種類	5,138種類	43種類	

［注］1　雑誌等ですでに製本済のものは図書の冊数に含む。
　　2　視聴覚資料には、マイクロフィルム、マイクロフィッシュ、カセットテープ、ビデオテープ、ＣＤ・ＬＤ・ＤＶＤ、スライド、映画フィルム、ＣＤ－ＲＯＭ等を含む。

2　過去３年間の図書の受け入れ状況

（表33）

図書館の名称	１３年度	１４年度	１５年度
図書館	3,855	3,544	4,139
計	3,855	3,544	4,139

3　学生閲覧室等

（表34）

図書館の名称	学生閲覧室	学生収容定員（B）	収容定員に対する座席数の割合（%）A／B＊100	その他の学習室の座席数（教員閲覧室）	備　考
	座席数（A）				
図書館	260	2,222	11.7	10	学部学生　2,020　大学院学生 42 短期大学学生 160
計	260	2,222	11.7	10	学部学生　2,020　大学院学生 42 短期大学学生 160

Ⅷ　学生生活への配慮

1　奨学金給付・貸与状況

（表35）

奨学金の名称	学内・学外の別	給付・貸与の別	支給対象学生数（A）	在籍学生総数（B）	在籍学生数に対する比率 A／B*100	支給総額（C）	1件当たり支給額 C／A
日本育英会	学外	貸与	841	2,112	39.82	676,536,000	804,442
大阪府育英会	学外	貸与	14	2,112	0.66	4,968,000	354,857
あしなが育英会	学外	貸与	2	2,112	0.09	1,080,000	540,000
交通遺児育英会	学外	貸与	2	2,112	0.09	1,200,000	600,000
小野奨学会	学外	給付	3	2,112	0.14	1,080,000	360,000
朝鮮奨学会	学外	給付	2	2,112	0.09	720,000	360,000

［注］1　前年度実績をもとに作表。
　　2　当該奨学金が学部学生のみを対象とする場合は、「在籍学生総数」欄には学部学生の在籍学生総数を、大学院学生のみを対象とする場合は、大学院の在籍学生総数を記載。
　　3　日本育英会による奨学金も記載。

2　生活相談室利用状況

（表36）

施設の名称	専任スタッフ数	非常勤スタッフ数	週当たり開室日数	年間開室日数	開室時間	年間相談件数			備　考
						平成13年度	平成14年度	平成15年度	
学生相談室・ｽﾎﾟｰﾂｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞﾙｰﾑ	1	3	5	150	10：00 ～ 17　:00	224（39）	263（35）	232（39）	専任教員1 非常勤ｶｳﾝｾﾗｰ3

［注］1　開室時間は曜日により変更あり。
　　2　専任、非常勤ごとに、スタッフの種類（医師、資格を持ったカウンセラー、教員、職員等）を備考欄に記載。

Ⅸ 財　　政

1－1　消費収支計算書関係比率（法人全体のもの）　※私立大学のみ

（表37－1）

	比　率	算　式（＊１００）	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	備　考
1	人件費比率	人件費 / 帰属収入	% 63.2	% 61.4	% 63.1	% 62.0	% 59.7	
2	人件費依存率	人件費 / 学生生徒等納付金	85.4	80.7	80.4	81.7	77.8	
3	教育研究経費比率	教育研究経費 / 帰属収入	23.6	22.9	24.7	24.2	26.1	
4	管理経費比率	管理経費 / 帰属収入	6.3	5.5	6.4	6.8	8.1	
5	借入金等利息比率	借入金等利息 / 帰属収入	0.5	0.5	0.4	0.4	0.3	
6	消費支出比率	消費支出 / 帰属収入	94.2	91.3	95.0	94.7	95.4	
7	消費収支比率	消費支出 / 消費収入	117.8	102.5	100.4	99.5	124.8	
8	学生生徒等納付金比率	学生生徒等納付金 / 帰属収入	74.0	76.0	78.4	75.9	76.7	
9	寄付金比率	寄付金 / 帰属収入	0.1	0.1	0.3	0.2	2.1	
10	補助金比率	補助金 / 帰属収入	18.6	17.0	15.4	16.6	17.1	
11	基本金組入率	基本金組入額 / 帰属収入	20.1	10.9	5.4	4.8	23.5	
12	減価償却費比率	減価償却費 / 消費支出	8.3	10.1	9.8	9.8	10.2	

［注］1　平成15年度は健康福祉学部を含む

2　本表（表37－1）については、「学校法人会計基準」に基づく財務計算書類中の消費収支計算書（法人全体のもの）を用いて、表に示された算式により過去５年分の比率を記入。なお、法人として当該大学のみを運営している場合は、表37－1のみを作表。

１－２　消費収支計算書関係比率（大学単独のもの）　※私立大学のみ

（表37－２）

	比　率	算　式（＊１００）	１１年度	１２年度	１３年度	１４年度	１５年度	備　考
1	人件費比率	人件費／帰属収入	% 44.3	% 43.4	% 42.9	% 42.3	% 45.7	
2	人件費依存率	人件費／学生生徒等納付金	50.3	50.1	48.1	48.4	53.4	
3	教育研究経費比率	教育研究経費／帰属収入	26.1	23.0	26.5	25.5	24.7	
4	管理経費比率	管理経費／帰属収入	3.1	3.2	3.4	3.5	6.0	
5	借入金等利息比率	借入金等利息／帰属収入	0.9	0.8	0.7	0.6	0.5	
6	消費支出比率	消費支出／帰属収入	74.6	71.9	74.1	73.9	78.1	
7	消費収支比率	消費支出／消費収入	84.1	79.1	83.6	77.7	144.6	設備投資の為。（ｱﾈｯｸｽ・ｾﾐﾅｰﾊｳｽ）
8	学生生徒等納付金比率	学生生徒等納付金／帰属収入	88.0	86.6	89.2	87.4	85.5	
9	寄付金比率	寄付金／帰属収入	0.1	0.0	0.3	0.3	3.2	
10	補助金比率	補助金／帰属収入	7.4	6.8	5.6	5.7	6.7	
11	基本金組入率	基本金組入額／帰属収入	11.3	9.0	11.3	4.8	46.0	設備投資の為。（ｱﾈｯｸｽ・ｾﾐﾅｰﾊｳｽ）
12	減価償却費比率	減価償却費／消費支出	12.0	13.0	13.2	13.4	13.1	

［注］１　平成15年度は健康福祉学部を含む

２　本表（表37－２）については、「学校法人会計基準」に基づく財務計算書類中の消費収支計算書（大学単独のもの）を用いて、表に示された算式により過去５年分の比率を記入。

2　貸借対照表関係比率（私立大学のみ）

（表38）

	比　率	算　式　（＊１００）	平成11年度	平成12年度	平成13年度	平成14年度	平成15年度	備　考
1	固定資産構成比率	固定資産 / 総資産	% 78.8	% 77.7	% 76.2	% 74.5	% 78.1	
2	流動資産構成比率	流動資産 / 総資産	21.2	22.3	23.8	25.5	21.9	
3	固定負債構成比率	固定負債 / 総資金	5.9	5.4	5.5	5.2	5.1	
4	流動負債構成比率	流動負債 / 総資金	6.1	6.6	6.4	6.8	6.0	
5	自己資金構成比率	自己資金 / 総資金	88.0	88.0	88.2	88.0	88.9	
6	消費収支差額構成比率	消費収支差額 / 総資金	-11.2	-11.5	-11.5	-11.2	-15.4	
7	固定比率	固定資産 / 自己資金	89.6	88.3	86.4	84.6	87.9	
8	固定長期適合率	固定資産 / 自己資金＋固定負債	83.9	83.2	81.4	79.8	83.2	
9	流動比率	流動資産 / 流動負債	347.7	338.3	372.9	378.2	361.0	
10	総負債比率	総負債 / 総資産	12.0	12.0	11.8	12.0	11.1	
11	負債比率	総負債 / 自己資金	13.7	13.7	13.4	13.6	12.5	
12	前受金保有率	現金預金 / 前受金	436.4	469.0	560.4	557.3	472.4	
13	退職給与引当預金率	退職給与引当特定預金（資産） / 退職給与引当金	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
14	基本金比率	基本金 / 基本金要組入額	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	
15	減価償却比率	減価償却累計額 / 減価償却資産取得価格（図書を除く）	33.4	35.2	37.9	39.9	39.4	

［注］1　平成15年度は健康福祉学部を含む
2　本表については、「学校法人会計基準」に基づく財務計算書類中の貸借対照表を用いて表に示された算式により過去５年分の比率を記入。
3　「総資金」は負債＋基本金＋消費収支差額を、「自己資金」は基本金＋消費収支差額をあらわす。

3　財政公開状況について（私立大学のみ）

（表39）

		自己点検・評価報告書	学内広報誌	大学機関紙	財務状況に関する報告書	学内ＬＡＮ	ホームページ（Ｗｅｂ等）	その他（会議等）	開示請求があれば対応する
教職員	資金	○			○		○	○	
	消費	○			○		○	○	
	貸借							○	
在学生	資金						○		
	消費						○		
	貸借								
卒業生	資金						○		
	消費						○		
	貸借								
父母等	資金						○		
	消費						○		
	貸借								
社会・一般（不特定多数）	資金						○		
	消費						○		
	貸借								

財団法人大学基準協会による加盟判定審査結果

財団法人 大学基準協会
〒162-0842
東京都新宿区
市谷砂土原町2-7-13
Tel.03(5228)2020
Fax.03(5228)2323
http://www.juaa.or.jp

大基委判第134号
平成14年3月8日

大阪体育大学
学長　野田　敏彦　殿

財団法人 大学基準協会
会長　大南　正瑛

貴大学の正会員への加盟・登録に関する件について

拝啓　時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、貴大学の正会員への加盟・登録に関する件につきましては、平成14年3月8日開催の評議員会および理事会において、満場一致をもって承認されましたので、同封の「大阪体育大学に関する加盟判定審査結果」のとおりご通知いたします。

上記「結果」におきましては、貴大学の一層の充実向上を期待するため、勧告、助言および参考意見を付していますので、その点もよろしくご高配下さいますようお願いいたします。

本来、正会員は、勧告等の有無にかかわらず、自らの大学の掲げる理念・目的を達成するために、自主的かつ恒常的にその質的水準の向上を期して努力すべきはいうまでもありません。このたび「勧告」あるいは問題点の指摘に関する「助言」の付せられた大学におかれましては、「勧告」の趣旨に添った対応策を講じられるとともに、「助言」の趣旨も可能な範囲で参酌され、その改善実施の概況に関して「改善報告書」をお取りまとめの上、平成17年7月末日までに本協会会長宛にご提出願うこととなっております。また、自己点検評価に対する学外からの検証結果の社会への積極的公表が要請されていることから、上記「結果」の公表、とりわけ「概評」部分の公表につきましては、ぜひご検討いただきますようお願いいたします。

なお、貴大学の正会員への加盟・登録年月日は、平成14年4月1日付となりますので、何とぞご承引下さいますようお願いいたします。また、本年度より、加盟判定審査結果作成の基礎資料として作成された大学審査分科会および各専門審査分科会の主査報告書を当該大学にのみ開示することとなりました。主査報告書の開示をご希望される大学におかれましては、学長名・学長公印のある文書によって協会会長宛ご請求ください。主査報告書の写しをお送りいたします。なお、送料は貴大学のご負担となりますので予めご了承ください。

敬具

同封文書
1　「大阪体育大学に関する加盟判定審査結果」
2　正会員及び賛助会員に関する規程

大学基準協会正会員証

大阪体育大学殿

貴大学が本協会の正会員であることを証する

平成14年11月27日

財団法人　大学基準協会

会長　大南正瑛

大阪体育大学に関する加盟判定審査結果

Ⅰ　加盟判定審査結果

平成13年度判定委員会において、貴大学は、大学基準に適合しているものとして、正会員への加盟・登録を行うことが適当である旨の判定結果が下され、かつ、評議員会および理事会において、同判定結果が満場一致をもって承認されたので、ここに正会員への加盟・登録を承認する。

Ⅱ　勧告・助言

［1］　概　評

大阪体育大学は、1965年に、関西地域で唯一の体育系大学として、生産体育、社会体育、学校体育における人材育成を目的として発足したものである。当時のわが国の体育系大学または学部は、学校教育を主体とするものがほとんどであった中で、「産業教育と体育推奨による人格の形成」を建学の理念として発足したことは極めてユニークであった。その後の数度にわたるカリキュラムの改正や、キャンパスの全面移転、大学院修士・博士両課程の設置等を通して、わが国でも特色のある私立の体育系単科大学・大学院としての体制を整備し、建学の精神を踏襲しつつ、社会の変化に対応させながら、教育目標を検討改善していることは評価できる。現在はその学則で「体育・スポーツ、健康及びレクリエーションに関する科学の理論と技術を教育研究し、豊かな教養と広い識見を備える実践的、かつ、創造的な体育・スポーツ指導者を育成するとともに、体育・スポーツ科学の研究者及び高度の専門家をも育成し、国民の健康とスポーツ文化の向上に寄与する」としている点等は十分に評価することができる。

しかし、学生の受け入れその他幾つかの点で、なお改善すべき点も見受けられるので、勧告にしたがって向上に努めるとともに、助言にも配慮されたい。貴大学は、自己点検・評価を真摯に行い、幾多の改善を要する問題点を自覚しており、その解決に向けて努力しつつあるが、他方で近年の急速な発展、組織機構の改革、学内各機関の統廃合等の取り組みが必ずしも全構成員に定着していないうらみがあり、かつ、わが国の大学を取り巻く現今の厳しい環境下にあって、今後の改革は、設置者、教職員の一層の一致協力なくしては容易ではないと思われる。幸いにも貴大学は、すばらしい環境の中に広大なキャンパスを

有しており、財政状態も良いので、現在大学が掲げている教育目標を実現するため、自己点検・評価の結果を踏まえて将来の改善・改革に向けた方策を立て、それを実行するシステムを確立し、実行されるならば、さらなる発展、充実も十分可能であると思われる。今後期待を持って貴大学の将来を見守りたい。

［２］　大学に対する提言

一、勧　告

１　学生の受け入れについて

体育学科、生涯スポーツ学科の収容定員に対する在籍学生比率が高いので、その適正化に努力されたい。なお、これに関連して、自己点検・評価報告書において、「本学は、入学定員に対する受け入れ学生数の比率を1.3倍としてきた」という記述があるが、これは体育系学部においては是正される必要がある。

二、助　言

①　長所の指摘に関わるもの

１　施設・設備等について

５つの種目別体育館、屋内プール、野球場、陸上競技場、多目的グラウンド等体育施設が充実していることは評価できる。

２　図書等の資料及び図書館について

学術情報の検索に関して、1999年度から図書目録を電子化し、これをWeb上で公開し、外部データベースの代行検索により、より広範な学術情報の利用を可能にしていること等、及び日本体育図書館協議会や私立大学図書館協会に加盟して、学外との相互協力活動に積極的に参加している点は評価できる。

３　自己点検・評価の組織体制について

全学的な自己点検・評価委員会を組織し、どの部局においても真摯に自己点検・評価が行われ、その作業経過の中で明らかになった組織体制上の問題も、早速に改善されたことは、自己点検・評価の目的に照らして望ましい姿であると考えられる。

②　問題点の指摘に関わるもの

１　教育研究上の組織について

産業体育研究所は、附置研究機関としての期待に十分応えているとは言えないので、今後は、健康づくり、生き甲斐づくりをサポートする新しい研究所の役割について、産業界の代表や地域の代表などの外部の委員を含めた委員会を設置して、活性化に向けた解決策を検討されることを期待する。

2　学生の受け入れについて

体育学科において入学者に占める推薦入学者の比率が高いので、その適正化に努力されたい。

3　教育課程について

(1) 学生に各学科及びコースの履修モデル等を示すなどして、履修についての個別指導の工夫を検討されたい。

(2) 学部としての学生による授業評価の実施やファカルティ・ディベロップメントの実施等について検討されたい。

4　研究活動について

提出された資料によると、研究活動の不活発な教員が見られるので、その活性化が望まれる。

5　施設・設備等について

講義室・演習室がやや狭あいなので改善に努力されたい。

6　図書等の資料及び図書館について

長期休暇中、図書館が閉館している点は改善が望まれる。

7　学生生活への配慮について

(1) 検討課題であるとの認識がすでにあるが、大学独自の奨学金がなく、また緊急時における大学独自の貸付制度もないので、これらの設定が望まれる。

(2) セクシャル・ハラスメントの対応策に関するガイドライン・規程等を設定の上これを運用する委員会を早急に設置し、パンフレット等を作成するなどして学生への広報を行うことが望まれる。

三、参考意見

判定委員会において、以下の意見が示されたので、参考とされたい。

1　理念・目的は学校教育法の趣旨と整合しており、そこに大学の個性・特徴がよく反映している。理念・目的は公的刊行物の中でも明確にされているが、その実現に向けての全構成員の意識が確固たるのものではないので、構成員の意識改革について今後一層の努力が望まれる。

2　今まで入試の改善については学長諮問の特別委員会で検討され、実行されてきたが、今後は入試制度に対する外部評価の結果をも考慮しつつ、入学選抜の在り方を検証する体制が構築される必要があろう。

3　単科大学とはいえ大学院博士課程まで設置している大学として、また電子図書館化が進むとしても、蔵書数が少ないので、充実が望まれる。さらに、最終授業終了後 20 分程度で閉館する点についても改善が望まれる。

4　約 80%の学生が運動部に所属している現状において、傷害保険の充実は不可欠であり、学生教育研究災害保険への加入や大学の教育後援会が設定している傷

害治療援助費交付制度のみでは、重大事故における保障内容が不十分であるので、この点を検討されたい。

5　教学部学生係の学生相談室が１坪程度というのは不十分と思われるので、対策を検討されたい。

6　体育系学生の多岐にわたる心身の健康維持に留意されている点は評価できるが、学生からの生活相談、進路相談、就職指導等において一層の検討と努力が望まれる。

7　大学運営に教学側の意見をより一層反映させるために、理事及び評議員に、学長のほかにも教学代表者を加えることを検討されたい。

8　自己点検・評価委員会の構成メンバーが学長はじめ役職者ばかりということには検討の必要があろう。

大阪体育大学の現状と課題（自己点検・年次報告）

2005年2月1日発行

発　行　所　　大阪体育大学
自己点検・評価委員会
〒590-0496
大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

印刷・製本　　株式会社大同印刷所

大阪体育大学の現状と課題
自己点検・年次報告書
2004
大阪体育大学